２０日間のシンデレラ

孤高の侍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
２０日間のシンデレラ

【Ｎコード】
Ｎ８７９７Ｚ

【作者名】
孤高の侍

【あらすじ】
主人公陸は不安を抱えながら生きていた。未だに忘れられずにいる好きだった花梨を傷つけてしまった小学五年生の頃の後悔。それがこれから先も呪いのように自分自身を苦しめ続けるのではないかと。ある日、元同級生の恵子の家を訪ねる事になった陸。そこで陸が見つけた物は「黒魔術　禁断の書　過去に戻る方法」と書かれた一冊の本だった。本当に過去に戻れるのかと恵子に尋ねる陸。恵子の口から返ってきたのは儀式を行えば現在の自分の意識を過去の自分に憑依させ一ヶ月以内なら過去を自由に変える事ができる。しか

しその代償として本当の記憶は最終的に失ってしまい、新たに生まれた記憶が自分や他人も含め周りの世界を書き換えてしまうというリスクを伴うものだった。後日、意を決した陸は過去に戻る為、黒魔術の儀式を始めるのだが・・・

第1話　やり直したい過去がある（前書き）

登場人物紹介

出雲　陸（２０）　主人公

池田　花梨（２１）　陸の元クラスメイト

清水　翼（２１）　陸の元クラスメイト

佐々木　恵子（２１）　陸の元クラスメイト

前田　篤（２１）　陸の元クラスメイト

米川　卓（２１）　陸の元クラスメイト

井上　夏美（２１）　陸の元クラスメイト

飯田　真司（５５）　陸の元担任　あだ名は「イダセン」

まえがき

人生は決していい事ばかりじゃない。

何年という月日が経っても忘れられない苦い思い出や経験、あの時こうしておけばよかったという後悔と呼ばれるものたち。

けどもしその思い出を自分の思うように変える事ができたとしたら・・・

これはそんな何かを背負った大人になる一歩手前の青年の物語。

第1話　やり直したい過去がある

メインタイトル　『２０日間のシンデレラ』

○教室（回想）

黒板に大きく描かれた文字。〈さようなら　池田花梨さん〉

光が差し込み教室がオレンジ色に染まっている。

うっすらと遠くで聞こえる蝉の声。

ゆっくりと教壇の上に立ち、生徒を見つめている教師（イダセン）。

深刻な表情の生徒。

少し重たい空気が教室内に流れている。

イダセン　「えーみんなも知っての通り今日で池田とはお別れだ。
　来月からは県外の学校に通う事が決定している。　なかなか会う機会も少なくなって寂しくなるとは思うが・・・・・・」

陸　「寂しくなんかねーよ」

イダセンの話を割って、ぶっきらぼうな態度でつぶやく陸。

視線を窓の外に向けている。

花梨が少し悲しげな表情で、隣の席の陸を見ている。

イダセン、声を荒げて、

イダセン　「出雲、冗談でもそんな事言うもんじゃない！」

しばらく教室内に沈黙が続く。

コホンと一度咳払いをする教師。

イダセン　「じゃあ最後に池田からみんなに挨拶をしてもらおう、池田」

花　梨　「はい」

よく通る声が教室に響く。

席を立ち上がり、上靴の音を鳴らしながら壇上に向かう花梨。

短めの髪がふわりと揺れる。

自分の横を通り過ぎる花梨を横目でちらりと見る陸。

何かよからぬことを思いついたような表情。

口元をにやりとさせ、机に突っ伏す。

イダセンに会釈をして教壇に上る花梨。

姿勢を正してクラスメイトの顔を眺める。

花　梨　「・・・・・・」

机に突っ伏している陸が視界に入る。

表情が少し曇り、話し始めるタイミングを逃してしまった花梨。

清　水　「おい、もしかして陸泣いてんじゃねーの？」

米　川　「んな訳ねーだろ、陸だぞ。　どうせ泣いているふりして驚かせようとしてるんだよ」

ひそひそと生徒が話し始め、自然と陸の方に視線が集まる。

イダセン　「おい、静かにしろ」

イダセンが目で合図を送り、コクリと頷く花梨。

少し前に一歩出て。

花　梨　「私はこの五年四組が大好きです。　ほんっとうに毎日が楽しくて、気がついたらあっという間に一日が終わってるような、そんなクラスでした。　飯田先生は俺をいたずらで騙せたら、宿題をなしにしてやるぞーとか言って全然先生っぽくないし」

真剣な表情から笑みがこぼれて、柔らかい印象になっているイダセン。

花　梨　「恵子はいつも怪しい黒魔術の本を読んでるし、前田は

給食の時間になるとおかわりする為に人が変
わったように早く食べるし、あと米川の机の奥からカビ付きのパン
が出てきたり、夏美が水槽を落として割っちゃったり」

教室にどっと笑いが起きる。

次第に生徒の表情が明るくなっていく。

花　梨　　「そして・・・・・・」

一瞬、陸の方を見る。

瞳を潤ませてまた視線を戻す。

花　梨　　「あと一年で卒業なのに急に転校する事になっちゃって
すごく残念だけど、私にとってこの五年四組で
過ごした思い出は一生の宝物です。　みんな・・・・・本当にあ
りがとう」

涙声になりながらぺこりと一礼をする花梨。

拍手が教室に鳴り響く。

泣いている女子も何人かいる。

イダセン　「よし、みんなからも池田にお礼を言おう。　全員起立
！」

椅子が一斉に引かれて、床とこすれる音。

陸以外の全員が起立をする。

机に突っ伏したままの陸。

イダセン　「ん？　おい出雲」

生徒が陸の方を見る。

清　水　　「おい陸、池田に挨拶するぞ。　ほら立てって」

後ろを振り返り、陸に声をかける清水。

全く反応がない。

よく見ると体がぷるぷると震えている。

清　水　　「お前・・・・・・」

教室がざわざわとし始める。

周りの生徒が心配して次々に声をかける。

びっくりした様子で教壇から見ている花梨。

その体勢のまま、聞こえるか聞こえないか程度の小さな声で。

陸　　「うるせぇ・・・・・・」

生徒たちが陸の元にかけよってくる。

陸にピントが当てられ、他の生徒たちがぼやけて見える。
時間が止まったように陸以外の生徒の動きが止まる。
実際よりもはるかに多く、陸を呼ぶ声。
エコーがかかった様な声で次第に大きくなっていく。
陸　「うるせぇ・・・・・・うるせぇ・・・・・・」
ぼそぼそと繰り返す陸。
さらに声は大きくなる。
震えている陸の体。
急に机をばんっと叩き立ち上がる。
教室内、沈黙。
涙でくしゃくしゃの顔。
両手で耳を塞ぎながら。
陸　「うるせぇーーーーお前なんかとっとと転校しやがれ！」
大きな声が響く。

○一人暮らしの陸の家　寝室（２０１０年　現在）

急にベッドから起き上がる陸。

汗をびっしょりとかいて、息が乱れている。

カーテンから漏れている光。

雀の鳴き声が聞こえる。

おもむろに手を伸ばし、近くにあるケータイを手にとる。

しばらく画面を凝視する。

再びベッドに勢いよく仰向けになり、無造作にケータイを近くに置く。

天井を眺めている陸。

ケータイの画面が光ったままに。

〈メール受信ＢＯＸ　清水良平　明日は約束の日、覚えてるよな？〉

×　×　×

陸　「タイムカプセル・・・・・・か」

サブタイトル　『第1話　やり直したい過去がある』

○電車内（翌日）

電車が揺れる音。

（本日はご乗車頂きありがとうございます・・・・・）

車内アナウンスが聞こえる。

遠足に向かうであろう小学生がリュックサックを背負って、楽しそうにはしゃいでいる。

端の座席に座り、その光景を遠めに見ている陸。

手すりに肘をつきながら、ぼーっとした表情で、

陸（語り）「心のもやがとれずにいる。あの時こうすればよかった、あんな事をしなければよかった。　思い通りにいかなくて後悔というものとして残った時、それはじわじわと自分自身を蝕んでいってるような気がしてならない」

○改札

切符を入れて改札を通る陸。

駅の出口に向かう。

○小学校　校門前

足早に歩いていく陸。

遠くに校門が見える。

ざわざわと話し声が聞こえて人だかりができている。

こちらに気づき静かになると、誰かが勢いよく走ってくる。

ある程度の距離になって清水だと認識する陸。

清　水　「陸ーーーー」

暑苦しい顔が次第に近くなり、抱擁を求めるように手を広げている清水。

陸を抱きしめようとする清水。

しかし空をきる。

冷静に清水の抱擁をかわす陸。

あっけに取られ目を丸くしている清水。

清水を指差してげらげらと笑う陸。

清　水　「このやろー陸、久しぶりじゃねーか」

陸　「おう」

お互い手を軽く握りコツンと当てる。

陸（語り）　「俺は多分恐れている・・・・・・果たして自分があれから前に進めているのかという事に」

○小学校　裏庭

勢いよくスコップが地面に突き刺さる。

前　田　「よいしょっと」

地面に穴を掘る前田。

前に飛び出たお腹を気にもせず、俊敏な動きをしている。

その前田の周りを男女含め十人程が囲んでいる。

ざっと旧友を見渡す陸。

陸　「なーんか、何も変わんねーのな。　みんな」

清　水　「そうでもないぞ」

清水に視線を向ける陸。

清　水　「ほら、夏美なんかもう二人も子供がいるみたいだし」

陸　「まじかよ！　くーっ、昔はちょっとエロイ事言っただけで涙目になってたような奴なのに、今じゃママとはね」

清　水　「俺らが知らないだけで変わってるんだよ、きっと」

清水がその場にしゃがみ込み、穴を掘っている前田を見つめる。

清　水　「お、陸。　一度確認してみろよ」

陸　「は？　何を」

清　水　「前田だよ、前田。　もし昔と変わってなかったら後ろからカンチョーしても、あの名言を吐くはずさ」

陸　「はは・・・・・・なるほど。　で俺にやれと」

清　水　「かつてスナイパーと呼ばれていた男の実力がなまっていたら、話は別だけどな」

陸　「まさか」

自信に満ちた表情で前田の背後にしゃがみ込む陸。

前　田　「ふーっ、なかなか出てこないな」

額の汗を拭い、作業を続ける前田。
前田の尻が上下に揺れる。
その様子を凝視している陸。
陸　「今だ！」
陸の二本の指が前田をとらえる。
スコップを動かす手が止まる。
前　田　「うっ・・・・・・さばの・・・・味噌・・・・煮・・・・・・・」
苦しんでいる前田。
腹を抱えて笑い転げる清水。
続けて笑う陸。
お互い顔を見合わせて、
清　水　「変わってない」
陸　「痛さを紛らわす為に、好きなおかずを言うところ」
何とか立ち上がり、スコップを振り上げる前田。

前　田　「陸ーこの野郎！」

陸　「待て前田、話せばわかる。　てかスコップはまずい」

陸を捕まえようとする前田。

その光景を見て余計に笑い転げる清水。

夏　美　「あ、タイムカプセル」

夏美が前田の掘っていた地面を指差す。

（一同）　「え？」

それぞれ騒いでざわざわとしていた空気が、一瞬にして静かになる。

×　　×　　×

何重にも袋を被せたタイムカプセルが地面に置かれる。

砂が沢山こびり付いて、袋が茶色くなっている。

（一同）　（おーっ！）

全員が歓声をあげて、目をきらきらと輝かせている。

前　田　「へへっ、これは僕が掘ったんだぞ」

腕を組みながら自慢げにしている前田。

みんな、前田を無視してタイムカプセルに近づいていく。

一人ぽつんと残された前田。

前　田　「お・・・・・・おい」

袋をやぶって中身を取り出す陸。

黄色い箱が姿をあらわす。

ふたの表面に

（6年4組☆　タイムカプセル）

と書いてある。

その周りにそれぞれの生徒のメッセージや名前が書いてある。

自分の名前を発見する陸。

メッセージも何もなく、ただ飾り気のない名前が書かれているだけ。

陸　「（もっと何か書けよ、俺・・・・・・可愛げのない小学生だな）」

ふたを開けるとその裏側に

（米川竜也です）

と大きな字で書いてある。

みんながそれを見て爆笑する。

清　水　「米川ーお前、一人だけ目立ちすぎだろ」

清水が隅の方にいた米川を連れて来て、その文字を見せる。

米　川　「あれー俺、こんなこと書いたっけな」

首をかしげて照れている米川。

笑い声が響く。

清　水　「ホント久しぶりだなーお前、今なにやってるんだよ？」

綺麗にセットされた髪、さわやかな笑顔。

高そうなスーツを身にまとっている米川。

米　川　「あぁ、ある事業を始めたんだけどそれがいい感じでね。
必ず米川カンパニーを実現させてみせるさ」

清　水　「米川カンパニーって小学校の頃、言ってた・・・・・・
何かお前なら本当にできそうな気がしてきた・・・・・」

一方、真剣な眼差しで一人タイムカプセルに書かれた文字を見つめている陸。

一瞬表情が曇りため息を吐く。

それに気づく清水。
米川との会話を中断して陸の方へ向かう。
清　水　「陸！」
急に声をかけられて、ふと我に返る陸。
清　水　「何やってんだよ、早く中の手紙とりだそうぜ」
陸　「あぁ・・・・・・すまん」
箱の中にある、青い袋で包まれたものを取り出す陸。
破ると中から透明な袋がでてきて、その中に沢山の手紙が入っている。
陸　「よし、じゃあ配るからな」
一人一人、手紙を渡していく陸。
手紙の差出人の名前を見つめる陸。
（佐々木　恵子）
陸　「今日、恵子は来てないのか？」
夏　美　「うん、見てないよ」

陸　「そっか、じゃあ後日渡しに行ってくるわ。　俺だったらまだこんなだし時間あるから」

夏　美　「了解」

にこっと笑うと少し離れた女子が集まっている方へ歩いていく夏美。

みんなそれぞれ手紙を開けて、盛り上がっている。

陸も自分宛の手紙を封筒から取り出す。

突然、ちりんと陸の耳に鈴の音が聞こえる。

音の鳴る方を見ると、塀の上から首に鈴を付けた黒猫が陸を見ている。

視線を逸らさない黒猫。

不思議そうな顔をしている陸。

陸　「何だよ・・・・・・」

にゃーっと返事をするように鳴く黒猫。

再びちりんと鈴の音を鳴らして、すばしっこく去っていく。

ぎらぎらと太陽の光が当たる。

しばらく一人、何もしないで突っ立っている陸。

気を取り直して手紙を開け、ゆっくりと読み始める。

（未来の出雲陸へ　　やっほーお元気ですか？　俺の事だからどうせあんまりいい仕事してないだろ。　過去の俺はお前の事がすごく心配で夜も眠れないよ。笑）

苦笑いを浮かべる陸。

陸　「（やっぱ馬鹿だな・・・・・・俺）」

（夢は？　友達はちゃんといる？　あと正直一番心配なのはこの事だけどさ・・・・・・お前まだ花梨の事、抱え込んでない？）

急に真剣な表情になる陸。

（わかってると思うけど、俺あいつにひどい事言ったんだ。　お前なんかとっとと転校しやがれーって。　本当は転校して欲しくなくて仕方がなかったのにさ。　ほんと馬鹿だよな俺って。　その後いつの間にかあいつの席は空いたままになってて、もう会う事も謝る事も出来なくなった。　なぁ十年後の出雲陸はもっと頭よくなってるよな？　もう花梨に謝ってるよな？　俺はお前を信じるよ。　ま、そうゆう事だから。　元気でやってくれよな。

じゃーなバイビー）

手紙を仕舞う陸。

近くの木でセミが鳴いている。

ぼうっとそれを見つめる陸。

×　　×　　×

ゆっくりと歩き出す。

楽しそうに話している夏美の方へ近づく。

陸　「なぁ花梨は今、何してるか知ってるか？」

夏　美　「あぁ花梨ね。　今、東京で一人暮らししてるよ。　仕事が忙しくていつ帰って来れるかわからないんだって」

陸　「そっか・・・・・・東京か」

夏　美　「何？　花梨に会おうとしてるの？　そっかー二人とも、仲良かったもんね。　あ！　あたし連絡先知ってるよ。　教えたげよっか？」

いじわるそうな目をする夏美。

複雑な表情の陸。

陸　「いや、いいよ。　さんきゅ」

夏　美　「そう・・・・・・」

少し残念そうな夏美。

再び歩き出しながら、

陸　「みんなー」

大きな声で呼びかける陸。

陸の方に注目する一同。

陸　「悪い俺、今日は帰るわ」

驚く一同。

陸に近づいていく清水。

清　水　「は？　何言ってんだよ陸。　まだこの後、飯も食いに行くんだぜ」

陸　「あぁ・・・・・・悪い」

清水の前をそそくさと通り過ぎて行く陸。

苛立っている清水。

陸を睨み付けながら、

清　水　「池田の事か？」

沈黙の後少し遅れて、

陸　「そんなんじゃねーよ」

小さくつぶやき、校門に向かう陸。

離れていく陸をみつめる清水。

○小学校　校門前

とぼとぼと出て行く陸。

陸　「会える訳ねぇよな」

しばらく歩いて立ち止まる。

小学校の方を振り返って、

陸　「一番、変わってないのは俺か・・・・・・」

○恵子の家　玄関（数日後）

インターホンを鳴らす陸。

普通の住宅街の中、一際異彩を放つ大豪邸。

がちがちに固まっている陸。

陸　「（なんつー家だよ、あいつお嬢様だったのか・・・・・・いかん緊張してきた）」

きょろきょろと辺りを見渡し、明らかに怪しい陸。

インターホンから声が聞こえる。

恵　子　「はい」

どきっとする陸。

陸　「あ・・・あの、出雲という者なんですけど恵子さんはおられますか？」

恵　子　「出雲？」

恵子だとわかり急に安心する陸。

陸　「恵子か・・・・・・ったく変に緊張したぞ。　お前タイムカプセル開けれなかっただろ？　だから手紙もって来てやったんだよ」

恵　子　「帰って、今忙しいの」

予想外の返事に一瞬とまどう陸。

しかし手馴れたように状況を立て直して、

陸　「そうか恵子は忙しいのか。　せっかく駅前のコロッケ屋で出来たてホカホカのやつを調達してきたってのに。　仕方ない、これは俺がおいしく頂いて・・・・・・」

陸が話し終わる前に、目の前の門が大きな音を立て勝手に開いていく。

呆然とその光景を眺めている陸。

陸　「はは・・・単純だな、あいつ・・・・・・」

苦笑いを浮かべ玄関へと入っていく。

○同・客間

クラシックが心地よい音量で流れている。

陸と恵子を挟む大きなテーブル。

恵子の目の前に陸から預かった、手紙が置いてある。

コロッケを満面の笑みで食べている恵子。

部屋着とは思えない高そうな黒いサテンのドレスを身にまとい、椅子の上にだらしなく

あぐらをかいて座っている。

陸　「（一体どこが忙しいんだよ・・・）」

呆れた様子でその光景を見ている陸。

視線に気付き一瞬、陸の方を向く。

全く感情のこもっていない口調で、

恵　子　「あ、久しぶり」

よっと軽く手を挙げるとすぐに食べるのを再開する。

また満面の笑みに戻る。

陸　「俺さぁここ最近、小学校の時の色んな奴に会ったけど、お前ほど変わってない奴は知らんぞ」

恵　子　「あんたに言われると何かむかつくわね」

コロッケを食べ終わり口を拭きながら、冷静な表情に戻る恵子。

恵　子　「それに・・・・・・」

一瞬、遠い目をする恵子。

独り言のようにぼそっと、

恵　子　「全く何も変わってない訳じゃない・・・・・・」

お互いしばらく無言になる。
なり続けていたクラシックの音が余計に大きく聞こえる。
少し重たい空気。
陸　「けどお前、やっぱ身長の低さは相変わらずだよな」
大げさにげらげら笑って空気を変えようとする陸。
急に立ち上がる恵子。
ドレスをひらひらと揺らし、無言で陸の元に近づいていく。
目の前でぴたりと止まる。
ぱーんと強烈な音が響く。

×　　×　　×

恵　子　「大トカゲのムニエルでいいわね」
陸の返答を聞く前に、扉を開けて客間を出て行く恵子。
陸　「なんつー怪しいものを食わそうとしてやがるんだ、あいつは・・・・・・」
赤く手形の跡がついた頬を手でおさえながら、打ちひしがれている陸。

ふーっとため息をつく。

室内を眺める陸。

高そうな絵画や骨董品が沢山置かれている。

その中で周りと全く釣り合ってないファービー人形が一体、一際違和感を放出しながら

ぽつんと置かれている。

くすっと笑い不思議そうに首をかしげる陸。

ふと一部を見つめる。

陸　「本棚か」

椅子から立ち上がり、本棚に向かう。

色んな分野の難しそうな本が並べられている。

自分には理解できないと顔をしかめる陸。

視線を下に向けると、同じようなタイトルの本が沢山ある事に気付く。

（黒魔術の基本）

（黒魔術の儀式）

（黒魔術　禁断の書　過去に戻る方法）

陸　「過去・・・・・・」

一冊の本を手に取りまじまじと表紙を見ている陸。

大きな魔方陣が描かれている。

首をかしげながら、

陸　「たしか黒魔術って西洋で生まれたって聞いた事があるような・・・・・・」

著者の名前が目に入る。

（山田太郎）

こけそうになる陸。

陸　「完全に日本人だよな・・・・・山田太郎・・・・・・・怪しすぎる・・・・・・」

苦笑いを浮かべる陸。

半信半疑でゆっくりとページをめくる。

ぎっしりと埋め尽くされた細かい文字が姿を現す。

しばらくして突然、本をめくる手の動きが止まる。

そして目の色を変えて再び再開する陸。

ページをめくる速度も速くなり黙黙と読書を続けている。

なり続けるクラシック。

×　　×　　×

急にドアが開き、恵子がケーキと紅茶を持って入ってくる。

びくっとなる陸。

本を手に持ちながらあたふたしている。

陸　「あ・・・これはその・・・・・・」

テーブルにケーキと紅茶を置き、椅子に腰掛ける恵子。

恵　子　「座ったら？」

さっと、陸に椅子に座るよう手を差し出す恵子。

手に持っていた本を元の位置に戻し椅子に腰掛ける陸。

しばらく沈黙が続く。

紅茶を一口含み、カップを皿の上に置く恵子。

ふーっと軽く息を吐きながら、

恵　子　　「さて一体、何を見てたのかしら？」

手に顎を乗せて、いじらしい目で陸を見つめる恵子。

目線を下に向けている陸。

しばらく経って意を決したように、

陸　　「なぁ・・・・・・」

恵　子　「ん？」

真剣な眼差しで恵子と目を合わせる陸。

陸　　「黒魔術は過去に戻る事ができるのか？」

お互い沈黙。

突然、時計が大きな音を立てて鳴り出す。

針は三時を指している。

恵　子　　「結論から言うと可能よ」

真剣な表情の恵子。

動揺している陸。

恵　子　「正確には過去に戻るというよりも、現在の意識を過去の自分に憑依させるのに近いかしら」

陸　「憑依？」

恵　子　「ええ、魂を移動させるの。　そうすれば自由に行動する事ができる、つまり自分の思うように過去を作り変えれるって事。理解？」

陸　「あぁ・・・・・・・」

強張った表情の陸。

恐る恐るもう一度、恵子を見て。

陸　「それは・・・・・・・俺にもできるのか？」

恵　子　「ええ・・・・・・・できるわ」

恵子の口元がゆっくりとそう動く。

急に人が変わったように声を荒げて、

陸　「教えてくれ、その方法を！」

ゆっくりと席を立つ恵子。

窓の近くまで歩きカーテンを開ける。

やわらかな光が差し込む。

蝉の鳴き声が聞こえる。

近くにある木の下のほうに、ぽつんと蝉の抜け殻が置かれている。

それを眺めながら、

恵　子　「ねぇ、蝉は自分達が土の中にいた時の事を覚えているのかしらね・・・・・成虫になってから残り少ない時間を後ろを振り返る事なく生きていけてるのかしら・・・・・」

黙ったままの陸。

恵　子　「出雲・・・・・あんたを動かすものは一体、何なの？」

陸　「やり直したい過去がある。　それがこの先、自分が生きていく上で大きく関わっているような気がするんだ」

恵　子　「そう・・・・・じゃあ変わりに何かを犠牲にする覚悟はある？」

陸の方を振り返る恵子。

空気が変わる。

光が当たってあまり表情が見えない。

陸　「一体、何を？」

恵　子　　「あんたが仮に8月25日に戻りたかったら、その日までの8月1日から8月24日のどれかの日に戻る事が出来る。　ただそれを指定する事は出来ない。　そして8月25日を迎え26日の0時になった瞬間、意識は儀式を行った元の時間に帰ってくる」

ゆっくりと陸の方へ歩いてくる恵子。

恵　子　　「新たに生まれた一ヶ月以内の記憶が、周りの世界を完全に書き換える事になるの。　自分も他人もね」

陸の目の前でぴたりと立ち止まる恵子。

恵　子　　「元の世界に戻ってきた時、恐らくあんたは二つの記憶を持っている。　けど時間が経つごとに元々あった本当の記憶は薄れて、最終的には完全に忘れてしまうわ。　それがこの黒魔術の呪い。　犠牲よ」

言葉を失う陸。

顔がひきつっている。

恵　子　　「それでも過去に戻りたい？」

陸の脳裏によぎる声。

過去の陸の声　　「寂しくなんかねーよ」

頭を抱えている陸。

またしても声。

過去の陸の声　「うるせぇーーーーお前なんかとっとと転校しやがれ！」

沈黙。

ゆっくりと顔を上げる陸。

陸　「あぁ・・・・・・もう決心はついた」

落ち着いた表情の陸。

ふーとため息を吐き本棚を指差しながら、

恵　子　「あんたがさっき勝手に読んでた本、貸したげるわ。書いてある通りに実行すれば儀式は失敗しないから」

陸　「そうか、じゃあ借りてくよ」

席を立ち上がり、本棚から本を取り出して鞄に入れる陸。

そのまますたすたと玄関に向かう。

陸　「悪かったな」

声をかけて歩いていく陸。

恵　子　「私は一応、確認したからね」

陸　「あぁ、感謝してる」

遠くなる陸を見ている恵子。

急に陸の足が止まる。

こちらを振り返って、

陸　「なぁ、お前は黒魔術を何に使うつもりなんだ？」

椅子に体育座りをして、片方の手を猫のように手招きしながら、

恵　子　「コロッケ持ってきたら教えてやらんでもない」

陸　「あほ」

きびすを返して、片手を挙げながら玄関を出て行く陸。

ドアがばたんと閉まる。

×　　×　　×

席を立ち、音楽を止める恵子。

室内が急に静かになる。

恵　子　「変わりに何かを犠牲にする覚悟はある？　だって、ほんと我ながら笑ってしまうわね」

本棚の前に立ち一冊の黒魔術の本を手に取る恵子。

その本を眺めながら、

恵　子　「彼が望むのなら仕方がない・・・・・・けど今の私には必要ないわ」

その本を近くにあったごみ箱にぽいっと投げ捨てる。

恵　子　「あなたもそう思わない？」

突然、ちりんと鈴の音が聞こえる。

奥から一匹の黒猫が現れる。

にゃーっと返事をするように鳴く黒猫。

恵　子　「翔太・・・・・」

○一人暮らしの陸の家　寝室（数日後　深夜）

（1、　本術は、友引を迎える日に行う事）

真っ暗な部屋。

ケータイを見る陸。

〈8月12日　（金）　23時50分〉

確認し終わると、そのままケータイの光をカレンダーに近づける。

〈8月13日　（土）　友引〉

ごくりとつばを飲む陸。

（2、　部屋は6畳以内の四角形でなければならない）

入り口のドアの前に立ち、全体を見渡す陸。

一人うなづく。

（3、　部屋に人口音が聞こえてはならない）

張り詰めたような静けさが、部屋に流れている。

（4、　戻りたい日付を墨で書いておくこと）

用意していた半紙を机の上に置く陸。

墨汁をすずりの上にどくどくと垂らして、手に持った筆につける。

書き始めようとした手がぷるぷると震えだす。

再び元の位置に筆を引っ込め墨を付け直す。

陸　「（あの日を忘れるわけないだろ・・・・・・）」

勢いよく半紙の上を筆が滑っていく。

半紙の上に書かれた文字。

〈２０００年　７月２３日〉

ふーっと息を吐き、額に流れる汗を拭く陸。

（５、　蝋燭一本を部屋の中央に置き、明かりをつける）

中央を占めていた小さいテーブルを壁際に寄せる陸。

そのスペースに蝋燭を一本立てる。

ポケットからライターを取り出し、蝋燭に火をつける。

真っ暗な部屋にやわらかな一つの火がともる。

しばらくその火を眺めている陸。

時間がない事に気付き慌てて、作業を進める。

（６、　友引を迎える瞬間【０時０分０秒】、戻りたい日付を書いた紙を持って目を閉じ呼吸をしてはいけない）

ケータイで時間を確認する陸。

〈２３時５８分〉

半紙を手に持ち、仰向けにベッドに横になる陸。

体をだらんと伸ばしリラックスさせる。

ふと横を見ると蝋燭の火がゆらゆらと揺れている。
その火を眺めながら、
陸　「俺、これでよかったんだよな・・・・・・」
ぼそっとつぶやく陸。
ケータイの画面を見る。
〈23時59分〉
体の向きを元に戻し天井を見つめる陸。
全く何も聞こえない空間。
陸にだけ聞こえる、激しい心臓の高鳴り。
急に、手の中でケータイのバイブレーションが二、三回鳴る。
そしてすぐに鳴り止む。
あらかじめ設定しておいた、友引を迎えたという合図。
ゆっくりと目を閉じる陸。
深呼吸した後、息を止める。
×　　×

×

ケータイの画面。

〈8月13日　（土）　0時2分〉

静寂を切り裂いて、急にベッドから起き上がる陸。

陸　「はぁ・・・・・・はぁ・・・・・・」

激しく呼吸が乱れている陸。

少し落ち着くと肩を震わせながら、

陸　「はは・・・・・・」

不気味に笑う陸。

急に立ち上がり電気をつける。

部屋が息を吹き返したかのように明るくなる。

カーテンを勢いよくあける。

火がついたままの蝋燭を見つける陸。

さらに笑い声は大きくなり、気が狂ったかのように、

陸　「はっはっはっはー」

腹を抱えて大笑いをする陸。

立ったまま壁にもたれ掛かり、

陸　「やっぱ俺は馬鹿だ・・・・・・そんな事あるわけねぇよ・・・・・・」

そのままベッドに歩いていく。

その瞬間、激しい胸の痛みに襲われる陸。

そのままばたんと床に倒れ込む。

陸　「うっ・・・・・・」

うつろうつろな目がゆっくりと閉じていく。

意識を失う陸。

×　　×　　×

○真っ白な世界

陸の意識がゆっくりと目覚める。

周りは真っ白で何も存在しない。

何故か体が宙に浮いている感覚がある。

流れに身をまかせている陸。

急に目の前から一つの情景が飛び込んでくる。

教室。

人の動きを確認できる。

天上ほどの高さからそれを眺めている陸。

不意に自分の姿を発見する。

恐らく小学校五年生の自分。

授業中にも関わらず、机に突っ伏し爆睡している。

がやがやとおしゃべりをしている生徒達。

段々、音が鮮明に聞こえてくる。

イダセン　「おーい、静かにしろ」

生徒の注意をこちらに引き付けるイダセン。

白のチョークで書かれた文字の下に、黄色のチョークでアンダーラインを引く。

イダセン　「えーつまりもののかさの事を体積と言い、一辺が一センチの立方体の体積を一立方センチメートルと言います。　体積を

計算で求めるには公式があって立方体は一辺×一辺×一辺で答えが出て来ます。　では直方体を求める公式はなんでしょう？」

一斉にイダセンから当てられないように目線をそらす生徒達。

黒板の隅に書いている日付を確認するイダセン。

イダセン　「じゃあ今日は7月6日だから出席番号6番の・・・・・・」

ぐおーと突然、教室中に響く大きないびき。

空気が変わる。

しばらく経って再び話し始めるイダセン。

イダセン　「そう・・・・・今日は7月6日。　なので出席番号3番、出雲陸。　答えなさい」

生徒一同（日付全く関係ねぇー）

陸に視線が集まる。

なおも起きない陸。

花　梨　　「ちょっと陸、あんた当てられてるよ。　早く起きろって」

隣の席から焦りながら、無理やり陸をたたき起こす花梨。

何とか席を立ち上がらせる。

目を擦りながらまだ寝ぼけている陸。

陸　「ん・・・・・・おう、花梨おはよう」

陸の態度を見かねてすかさず同じ質問を繰り返すイダセン。

イダセン　「さぁ、出雲。　直方体を求める公式は何だ？」

陸　「えーと、直方体は・・・・・・」

言葉に詰まる陸。

小声で陸に向かって答えを教える花梨。

花　梨　「たて×横×高さっ！」

寝ぼけた顔でちらっと花梨の方を見る陸。

はっきり聞こえなかったのか、首をかしげている。

まぶたが開いたり閉じたりして、なんとか起立の姿勢を保っている陸。

陸　「たて×横×・・・・・・」

答えが分からず苦しんでいる陸。

ふと教室の入り口の方に目をやると少年柔道県大会優勝者の藤川が、

机の下で隠れて

ダンベルを使い筋トレをしている。

真剣な表情で、算数の授業に似つかわしくない大量の汗をかいている藤川。

はっと何かに気付く陸。

次第に自信満々に満ちた表情になる。

ゆっくりとイダセンの顔を見て、

陸　「・・・気合！」

途端に教室が静かになる。

唖然となっているイダセン。

そのタイミングで授業終了のチャイムが鳴り響く。

沈黙。

花　梨　「ぷっ・・・・・・」

緊張の糸がとけたかのように一斉に爆笑する生徒一同。

花梨もお腹を抱えて笑っている。

いまいち自分が何を言ったのか寝ぼけて実感がない様子の陸。

イダセン　「よし、わかった。　お前はたて×横×気合で直方体の面積がもとめられるんだな？　出雲は次の授業までに、宿題の算数ドリルの答えを普通の公式とお前の言う公式の二通りを書いて提出しろ。　それとこの後、職員室に来い！　以上だ」

我に返り、青ざめた顔で突っ立っている陸。

なおも笑い続けている生徒達。

×　　×　　×

無表情でその様子を眺めていた陸。

意識を上に向けて、その場からふわふわと去っていく。

またしても周りは真っ白。

流れに身をまかせている陸。

急に目の前から一つの情景が飛び込んでくる。

再び教室。

黒板を消している花梨。

ほうきを指の上に乗せてバランスをとっている陸。

教室には二人しかおらず、他の生徒は下校している。

窓から差し込むオレンジの夕日。
その光が黒板の隅に書いている文字を照らす。
（7月1日　日直　出雲　池田）
黒板を消しながら陸の方を見ないで、
花　梨　「なぁ、陸」
陸　「何だよ？　おっ、いい感じだ」
ほうきを指の上に乗せたまま、教室の中を歩き回っていく陸。
急にうつむく花梨。
表情がはっきり見えない。
黒板を消す手が止まる。
花　梨　「あたしさ・・・・・・転校するんだ」
立ち止まる陸。
指の上からほうきが落ちて、教室に大きな音をたてる。
窓の外から下校途中の生徒の声がうっすらと聞こえる。
陸　「嘘だろ？　どうせまた俺をからかってるんだろ？」

苦笑いで花梨に問いかける陸。

振り返り陸の方を見る花梨。

少し微笑み首を横に振りながら、

花　梨　「嘘だったら本当にいいんだけどね。　今日寝て次の日の朝、起きたら実は全部嘘でしたーって言われていつものように変わらず学校に行けたらいいのに・・・・・・」

真剣な表情の陸。

恐る恐る花梨の方を見て、

陸　「いつ転校するんだ？」

花　梨　「今月の末にはこの教室からあたしはいなくなる」

花梨がこの教室で過ごしている事を証明できる物がピックアップされていく。

教室の後ろに飾っている花梨が書いた習字の作品、給食当番表に載っている花梨の名前、

そして花梨の机。

花　梨　「父さんの新しい仕事がやっと決まったんだ。　会社をやめてからずっと家にいて、何か元気がなかったんだけど・・・・・・その時の父さんはすごく嬉しそうだった。　また頑張って欲しい

なって思ったんだ。　そんな姿を見てたらさ、引越ししなくちゃいけないって言われても嫌だなんて言える訳ないよね？　あたしのわがままで転校したくないなんて言える訳ないよね？」

花梨の目から涙がこぼれる。

陸　「花梨・・・・・・・」

花　梨　「陸・・・・・・手、出して」

ゆっくりと右手を差し出す陸。

花梨が何かを手渡す。

よく見ると自分で作ったのだろう、青と黄色の糸でできたミサンガが手の上に置かれている。

驚き、花梨の方を見る陸。

花梨、涙を浮かべながら笑顔で、

花　梨　「失くしたら許さないからね」

無言でそれを受け取る陸。

×　　×

×

無表情でその様子を見ていた陸。

意識を上に向けて、その場からふわふわと去っていく。

流れに身をまかせている陸。

次第に気持ちよくなって、目をつぶる。

どこまでも流れていく陸。

×　　×　　×

○実家　陸の部屋（２０００年　過去）

急にベッドから起き上がる陸。

汗をびっしょりとかいて、息が乱れている。

カーテンから漏れている光。

雀の鳴き声が聞こえる。

おもむろに手を伸ばし、近くにあるケータイを手にとる。

しかし、あるはずのケータイがない事に気付く。

全身が締め付けられるような窮屈な感覚。

急に下の階から大きな声で、

母　「陸ーあんたそろそろ起きないと学校に遅刻するわよ」

ずっこけそうになる陸。

陸　「ガキにするような言い方してんじゃねーっつうの」

ぼそっとつぶやく陸。

うーんっと両手を上に挙げて、伸びをする。

一瞬、動きが止まる。

陸　「ん・・・・・・ガキ？」

とっさに服ダンスのドアを開ける陸。

大きな鏡が現れる。

陸　「あ・・・・・・」

鏡には可愛らしいパジャマを着ている、小さな陸が写っている。

恐る恐るズボンを前に引っ張って、下半身を確認する陸。

何もかもが小さくなっている事に気付きその場に泣き崩れる陸。

陸　「俺・・・・・・」

段々、声を荒げて、

陸　「まじで過去に戻っちまったーー」

大声で叫ぶ陸。

下から同じぐらいの音量で

母　「早く仕度しろ、この馬鹿！」

×　　×　　×

○玄関先

陸　「行ってきまーす！」

黒いランドセルを背負って、走っていく陸。

給食当番の白い袋がぶら下がっている為、少し重たく感じる。

陸　「（えーっと、今日は２０００年の７月３日か。　花梨が転校する７月２３日まで２０日はあるって事だな。　てか行ってきまーす！　何て母親に言ったの一体、何年ぶりだろ俺・・・・・・）」

連絡帳を確認しながら勢いよく走り抜けていく陸。

陸　「あ、そうだ」

急にUターンをして別の道を進んでいく。

○路地

階段のように高くなっていく石のブロックの上を、バランスを取って綱渡りのように歩いていく陸。

真横に家の窓が見える。

陸　「川島のじいちゃーん、学校行ってくる」

窓に向かって声をかける陸。

○川島のじいさんの部屋

テレビを見ながらおかきを食べている川島のじいさん。

窓の外に目をやると、陸の足だけが見えて先に進んでいく。

川島のじいさん　「おー陸ちゃん、気をつけてな」

陸　「うん」

○原っぱ

勢いよく草を掻き分けて進む陸。

陸　「（俺は今、小学生なんだ、　その自覚を持たないといけないな。　確かここから学校の裏に続くフェンスが・・・・・）」

遠くに緑のフェンスを見つける陸。

陸　「（あった！）」

その勢いのままフェンスの穴に足を引っ掛け、あっという間に飛び越える陸。

きらきらと太陽が、宙に舞い上がっている陸を照らす。

綺麗に着地をして再び走っていく陸。

×　　×　　×

○5年4組　教室

チャイムが鳴る。

がらっと勢いよくドアが開く。

陸　「セーフ！」

汗だくになりながら陸が駆け込んでくる。

イダセン　「何がセーフだ、出雲」

後ろから頭をつかまれる陸。

陸　「ぐ・・・・・・」

逃げるように自分の席に向かう陸。

しかし、どこかわからず一人であたふたしている。

清　水　「なーにやってんだよ」

清水が意地悪そうな顔で、自分の近くにある机をばんばんと叩いている。

久しぶりに見る、頭の悪そうな小さい清水を見て思わず笑いそうになる陸。

清水が叩いている席に座り、ランドセルを横にかける。

懐かしさに浸ってる暇もなく、

清　水　「よう陸、昨日のノリノリ天国見たか？　俺、録画してたのに結局朝の3時まで見ちゃってさーあれはまじですげー興奮・・

・・・・」

ごつんとゲンコツを食らう清水。

イダセン　「エロ話は後にしろ」

清　水　「は・・・い」

生徒が一斉に笑い出す。

イダセン　「よーし、じゃあ朝の会をはじめるぞー」

ゆっくりと後ろのドアが開いていくのに気付く陸。

陸　「ん？」

宙に浮いた赤いランドセルが少しずつ動いている。

イダセン　「今日の日直は前田と池田だ」

がたっと音を立てて、前田が教壇へと向かう。

空席になっている花梨の席。

イダセン　「まーた遅刻か、何をやってるんだ池田は！」

イダセンが大きな声をあげる。

すると花梨の席のすぐ側から、

花　梨　　「すいません、分かりません、聞いてませんでしたー」

ほふく前進の体勢から立ち上がって、にょきっと姿を現す花梨。

申し訳なさそうに深々と頭を下げている。

しーんとなる教室。

イダセンが頭を抱えながら、

イダセン　「池田・・・・・・まだ授業中じゃない」

花　梨　　「へ・・・・・・」

目を丸くしている花梨。

隣の席で同じように目を丸くしている陸。

陸　　「花梨・・・・・・」

――つづく――

――第1話　「やり直したい過去がある」――

第2話　お前は一体、誰なんだよ

メインタイトル　『２０日間のシンデレラ』

○実家　洗面所

洗濯かごに無造作に放りこまれた小学校の制服。
土や泥がついてひどく汚れている。

○実家　台所

夕飯の仕度をせっせとしている母。
コンロの火をかちっと点けて、

母　「陸ーーーそろそろできるわよー下りてらっしゃい」

○実家　陸の部屋

陸　「今、勉強してるからもう少し！」
扉から顔だけを出してそう返事する陸。

すぐさま自分の机に戻り、文字をノートに書いていく。

陸（語り）「今日から日記をつけていく事にした。　あまりにも今日の一日が衝撃的だった為、もう一つは自分でもよくわからないけれど忘れたくない・・・・・自然とそう思ったからだ」

書き終わるとすっと立ち上がり、そそくさと駆け足で部屋を後にする陸。

窓から静かな風が吹き、吊るしてあった風鈴がちりんと揺れる。

開かれたノートに書かれた文字。

（7月3日・・・・・）

○教室（今日一日の回想）

前　田　「昨日、僕は何も悪いことをしていないのに、いきなり出雲君が後ろからカンチョーをしてきました。　とても悲しかったです。　謝って下さい」

前の席から陸の方を、涙目になりながら睨み付けている前田。

急な事で驚く陸。

難しい顔をしているイダセン。

イダセン　「出雲、それは本当か？」

椅子を引いて勢いよく立ち上がる陸。

陸　「ちょっと待ってくれよ、俺そんな事してねーって。それに昨日なんか学校に行ってねーし、ずっと家で黒魔・・・」

あっとなり話すのを途中でやめる陸。

生徒が一斉に陸の方に注目する。

イダセン　「何を言ってるんだ、出雲。　昨日は朝から博物館へ遠足だっただろ。　お前もちゃんと来てたじゃないか。　変な言い訳をするんじゃない」

陸　「え・・・・・そうだっけ？」

うーんと腕を組んで考え事をしている陸。

しばらくして、はっと何かに気付く。

陸　「（あ、そうか・・・・・俺は今日この世界に来たから、昨日やその前に起こった出来事は全部、過去の本当の俺がした事なんだ・・・・・）」

一番、前の席の前田に向かって、

陸　「てか前田、昨日の事をいちいち今日の終わりの会で言ってんじゃねーよ」

前　田　「何で陸が怒るんだよ、昨日は遠足だったんだから仕方ないじゃないか」

必死に反論する前田。

イダセン　「まぁ、落ち着け出雲。　前田の言い分も分かる。　よし、じゃあ昨日の遠足で嬉しかった事や悲しかった事がある者は手を挙げなさい」

二人の手が挙がる。

生徒を指名して意見を聞いていくイダセン。

米　川　「僕も昨日、出雲君に後ろからランドセルの鍵を開けられました。　それに気付かなくて少し前に屈んだ時、中身が全部落ちてしまいました。　とても悲しかったです・・・・・・」

恵　子　「私も博物館の中をコロッケを食べながら歩いていたら、走っていた出雲にぶつかられて地面に落としてしまいました。　コロッケ好きに対する冒涜です。　こっくりさんを召喚して呪い殺してやろうかと思いました。　あ、とても悲しかったです・・・・・・」

陸　「・・・・・・」

呆然と突っ立っている陸。

ふと横を見ると花梨が呆れた様な目で、じーっとこちらを見ている。

苦笑いの陸。

小声で前の席の清水に声をかける。

陸　「おい、清水！　お前も何とか言ってくれよ」

無言で急に席を立ち上がる清水。

陸　「清水・・・・・・」

清水の後ろ姿。

変なオーラを放っている。

急に大きな声で半べそをかきながら、

清　水　「先生！　昨日、夏美のスカートを覗こうとしたのは俺じゃありません。　後ろから陸に蹴り飛ばされてこけただけなんです。　夏美ー俺は無実だぁーっ、ちっくしょーとても悲しかったですーっ！（悲痛な叫びで）」

ふんっと怒ってそっぽを向いている夏美。

壊れている清水を見て、

陸　「清水・・・・・・お前もか・・・・・・」

頭を抱える陸。

前田　米川　恵子　清水　「（一斉に）謝ってください！」

イダセン　「・・・・・・だ、そうだが」

犯罪者のように視線を浴びせられている陸。

陸　「（俺はなんで責められているんだ・・・・・・こんな理不尽な話があってたまるもんか。　昨日、はただ必死で黒魔術の研究をしていただけなんだ。　カンチョーもしてないし、ランドセルの鍵も開けていない。　走りながらぶつかった事もなければ、後ろから蹴り飛ばす事なんてある訳ない。　責められる理由なんて一つもないんだ。　そうさ第一、俺はもう大人だ。　こんな小学生、相手にどうして頭を下げなけりゃいけない。　謝ってたまるもんか・・・・・・謝って・・・・・・）」

静かな空気の教室。

みんな陸の返事を待っている様子。

陸に冷たい視線が突き刺さる。

それを感じながら頭をかきむしる陸。

肩を撫で下ろしふーっと溜め息をつく。

教室に響くような大きな声で、

陸　「ごめんなさいっ！」

陸（語り）「小学生らしくごめんなさいの『い』の部分を嫌味ったらしく発音する事、それがこの世界でのささやかな抵抗だった」

サブタイトル　『第２話　お前は一体、誰なんだよ』

○３Ｆ　廊下

静かな廊下。

窓の向こうには中学校のグラウンドが見える。

手洗い場からポタポタと水がつたう音。

（水を大切に）

と書いている文字と手の洗い方の張り紙が張ってある。

天井からぶら下がるようについている時計。

針は１６時２０分を指している。

教室から聞こえてくる声。

生徒　「先生さようなら、みなさんさようなら！」

がらっと扉が開いて生徒達が勢いよく飛び出してくる。

男子生徒　「一番、最後はウンコマーン！」

わーっと騒ぎながら男子生徒達が走り抜けていく。

（廊下は走らない）

と書かれたポスターがはがれそうになっている。

生徒が走っていく風圧でひらひらと揺れている。

途中で女子生徒とぶつかりそうになる男子生徒。

女子生徒　「ちょっと、危ないじゃないのよ！」

怒っている女子生徒。

そのまま走って、後ろを振り返りながら、

男子生徒　「うっせーブース！」

けらけら笑いながら階段の手すりにまたがり勢いよく下に滑り降りていく。

少し遅れて教室から出てくる陸。

陸　「（ふーやっと終わった）」

とぼとぼと廊下を歩く陸。

次々と違う教室から生徒が出てきて廊下が騒がしくなる。

陸　「（しかし、何なんだ。　この周りのテンションの高さは。　まるでついていけん・・・・・小学生とはこんなにも自由

なのか。　どうせすぐに慣れて他の生徒と同じような感覚でいれるかもしれないと思っていたのは実に安易な考えだ。　とりあえず花梨が転校するあの日まで・・・・・・それまで俺は周りに怪しまれないよう必死で小学校五年生を演じきるしかないな・・・・・・）」

生徒達の間をすり抜けて教室を後にする陸。

角にあるトイレを右折して階段に向かう。

ランドセルとランドセルがぶつかりそうになる。

耳に入ってくる生徒の声。

生徒Ａ　「なあ、頼む一生のお願い！　ブルーアイズ交換してくれってー」

生徒Ｂ　「だめだ！　俺のデッキにはこいつが必要なんだよ」

生徒Ａ　「いいじゃんかー　な？　俺のラーバモスもなかなかいかすんだぜ」

生徒Ｂ　「それって、最弱モンスターじゃん」

生徒Ａ　「ぐっ・・・・・・」

生徒Ｂ　「それより知ってるか？　この学校の七不思議の一つで、夜中にこの上の屋上の方から化け猫の呪われた泣き声が聞こえてくるらしぞ」

階段の上を指差してけらけらと笑っている生徒Ｂ。

生徒Ａ　「ぎゃーっ！　お前そうゆうのやめろって」

喧騒の中、その一連のやりとりを聞いて思わず頬が緩む陸。

陸　「（何か・・・・・・懐かしい会話してるな・・・・・・・・）」

他の生徒達と同じように階段を下りていく。

○２Ｆ　階段

ぞろぞろと階段を下りていく生徒達。

○１Ｆ　廊下

三年生と一年生も合流して玄関に向かう廊下は生徒で一杯になる。

ふと視線の先に夏美と会話しながら歩いている花梨の姿を見つける陸。

陸　「（過去に戻るという事は当時のあいつと再び会うという事。　そんなこと最初からわかっていたけれど、それでも緊張が止まらない・・・・・・結局、今日は話かけられても混乱してしまい会話という会話にならなかった・・・・・・ちくしょう、勇気を出せ俺！　もう一度、あいつと学校生活を過ごせるチャンスじゃね

ぇか）」

生徒を掻き分け早歩きになる陸。

花梨との距離が縮まる。

陸　「（もう同じ過ちは繰り返さない。　自分に正直に行動するんだ・・・・・・そして今度こそ花梨に俺の・・・・）」

花梨まであと三歩、二歩。

手を伸ばしながら、

陸　「なあ、花・・・・・・」

そう呼びかけた瞬間、陸の肩にぽんっと手が置かれる。

何かと後ろを振り返る陸。

清水の顔。

これでもかってぐらい陸の顔との距離が近い。

無表情からにこっと笑うと、さっと体勢を低くして陸の股の間に頭を入れる清水。

そのまま立ち上がり陸を肩車した状態になる。

急に高く持ち上げられ驚く陸。

陸　「えっ・・・・・・・ちょっ・・・・・・・」

バランスがとれずふらふらしている陸。

清　水　「陸・・・・・・あっそびに行こうぜぇーーー」

その体勢のまま全速力で走る清水。

陸の体が仰け反る。

陸　「ぎゃーーっーー」

悲鳴をあげている陸。

清　水　「どけどけーっ！」

生徒を掻き分け、あっという間に玄関へと消えていく二人。

その光景を見ていた花梨と夏美。

夏　美　「ほんとあの二人って問題児だよねー清水はスケベだし出雲は喧嘩っ早いし」

冷静にぼそっとつぶやく夏美。

ふふっと笑う花梨。

夏　美　「花梨、どうしたの？」

首を横に振りながら、

花　梨　「ううん、何でもない。　ただ・・・・・・馬鹿だなって思ってさ」

○運動場

生徒達の声。

日は段々と傾いてオレンジ色に包まれている。

カラスの鳴き声が遠くで微かに聞こえる。

校舎はほとんどの生徒が下校している為、人の気配がしない。

対象的に騒がしい運動場。

勢いよく動き、ざざっと急に止まる生徒の足元。

それを何度も何度も繰り返す。

砂埃がもわっと舞っている。

下靴のかかとで地面にこすり付けて書かれた、大きな長方形の線。

真ん中に一本線が引いてあってそれぞれの陣地に生徒が分かれ、激しい動きをしている。

真っ白とはいえないボールがお互いの陣地を飛び交う。

清　水　「何やってんだよ陸ーー反撃しろ、反撃！」

外野から清水の声が響く。

前田と米川も清水の後に続き陸に声をかける。

内野は陸ただ一人、残りは全員アウトになり外野にでてしまっている。

必死で敵の攻撃をかわす陸。

ボールは陸を挟んで、敵チームの外野から内野へ、内野から外野へ。

陸　「（くそっ、思うように体が動かない。　ドッヂボールってこんなにも難易度高かったか？　よけるので精一杯だ・・・・・・）」

敵の内野、ボールをぱすっと受け取りながら、

五組生徒　「おいおい、逃げてばっかいるんじゃねぇよ。　四組はヘボクラスか！」

陸を挑発する五組生徒。

陸　「うっせーー早く投げやがれ！」

にやっと笑い陸めがけてボールを投げる五組生徒。

陸　「（ちくしょう・・・・・・今度は絶対取ってやる。

ボールをよく見るんだ。　ドッヂボールは俺の得意分野だったじゃないか。　・・・・・・・・・・・・今だ！）」

ボールを取ろうとする陸。

しかし、急に角度が落ちて陸の足に当たる。

ころころと地面を転がるボール。

五組生徒　「よっしゃー、一勝！」

敵チームで歓声が上がる。

呆然と突っ立っている陸。

陸の下に駆け寄ってくる清水、前田、米川。

前　田　「どうしたんだよー陸」

前田が心配そうに陸に声をかける。

清　水　「あぁ、お前なんか今日動き悪くねぇか？」

米　川　「ふんっ、そんな事では未来の米川カンパニーの社員にふさわしくないな」

偉そうに声をかける米川。

陸　「悪ぃ、ちょっと調子が悪いだけなんだ。　次こそ五組をぎゃふんと言わせてやるよ」

×　　×

×

清　水　「陣ボーじゃっしんホイ！」

五組の代表と清水がじゃんけんをする。

五組の生徒パー、清水チョキ。

勝利した清水、ガッツポーズをとりながら、

清　水　「ボー」

そういって陣地かボールの二択の内、ボールを選択する清水。

清水にボールを投げ渡す五組の生徒。

清　水　「よっし、いくぞー」

掛け声とともに外野の前田に大きくパスをする清水。

それを合図に全員が俊敏な動きで自分の配置につく。

パスを受け取る前田、近くにいた五組の生徒にシュートを放つ。

ボールが当たるぎりぎりの所で大勢を低くする五組の生徒。

頭にボールがボーンと当たる。

五組生徒　「頭はセーフだろ」

へへっと笑い、立ち上がる。

残念がっている前田。

すぐさま勢いをつけてボールを放つ。

ボールは陸の方へ。

受け止める体勢をとっている陸。

その瞬間、横から清水が飛び込んできてボールを受け止める。

驚いている陸。

さっと片手で陸にボールを手渡して、

清　水　「打てよ」

うなづきながらボールを受け取る陸。

半歩下がり、助走をつけながらシュートを放つ。

ボールは逃げようとしていた生徒を捕らえようとしている。

陸　「（捕らえた！）」

しかし次の瞬間、正面を向いてまたしてもボールを受け止められる。

陸　「くそっ」

すぐさま助走をつける五組の生徒。

大きな声で、

五組生徒　「いっくぞー」

そして大きく飛び上がる。

身構える陸。

陸　「（ジャンプシュートか・・・・・今度こそ！）」

五組の生徒のシュートは勢いのあるものではなく、手の先からぽろっと陸の方に向けて落とされる。

目を見開いている清水。

清　水　「ばっ、馬鹿！　フェイントだ！」

えっと驚いている陸。

勢いのないボールが陸の腕に当たる。

沈黙。

ははっと急に笑いだす陸。

そのまま外野へとかけていく。

清水、陸の背中めがけてぼそっと、

清　水　「あれぐらい取れよ・・・・・・」

小さくなっていく陸の後姿。

×　　×　　×

教　師　「まだやってんのかお前ら。　もう校門閉めるぞ」

玄関から教師が出てきて陸たちに声をかける。

辺りはすっかり暗くなっている。

一　同　「ういーっす！」

大きく返事をして教師の元に駆け寄る一同。

がらがらと音を立てて門が閉められる。

五組生徒　「次こそ決着つけるからな」

そう捨て台詞を言い放って走り去っていく五組の生徒達。

校門の前で残された陸、清水、前田、米川。

陸　「じゃあ俺も帰るな、また明日」

陸だけ帰る方角が違う為、一人で帰っていく陸。

清水　前田　米川　「また明日」

陸と反対の方向へ帰っていく三人。

静けさが漂う。

とぼとぼと歩く三人。

遠くなる学校が次第に不気味に感じられていく。

夜の虫たちの鳴き声が一層大きく聞こえる。

沈黙を切り裂いて、

米　川　「なぁ、陸ってあんなに下手だったっけ？」

二人に問いかける米川。

しばらくして、

清　水　「陸は少なくとも四組では一番上手い。　たかがフェイントでアウトになるなんてありえねぇよ・・・・・・」

前　田　「ドッジボール大会でも他のクラス相手に大活躍だったもんなぁ、陸」

またしても沈黙。

近所の家から夕飯の匂いがしてくる。

とぼとぼと歩き街灯の下で立ち止まる三人。

また明日と声を掛け合いそれぞれ帰路に向かう三人。

少し歩いて、二人の方を振り返る清水。

清　水　　「多分さーほんとに体調悪かっただけだよ、あいつ」

遠くから笑いながらうなづく二人。

手を挙げて再び自分が帰る方角に向かう清水。

次第に笑顔が消えていく清水。

壊れた街灯の光が、点いたり消えたりして清水を照らしている。

○教室　休み時間（翌日）

陸（語り）「7月4日。　なにもかもが新鮮な小学校生活。とても自分が一度経験した事とは思えない。　花梨を悲しませたくない、そして昨日あいつの姿を見て改めて確信したけれど正直やっぱり自分の気持ちをきちんと伝えられなかったって事も、俺の後悔の中の一つなんだ。　そんな気持ちと反比例して悩みの種となっている自分という存在。　周りの生徒に自分の正体がばれてはいけないという事もあって、思うように行動できない俺がいた・・・・・・」

米　川　「みんなー注目！　すっげーの持ってきたぜ」

教室の真ん中で大声をあげている米川。

ざわざわと不思議そうに米川の周りに集まる生徒達。

米　川　「いやー俺んち金持ちだろ？　だからおやじの仕事のコネでなかなか手に入らないレアなものがバンバン手に入る訳。　それを特別に俺がもらったんだよ。　やっぱ未来の社長は運に恵まれてるんだなーがっはっはっ」

寝癖でぼさぼさの髪、左右の長さが違う靴下、破れた所を縫って継ぎ接ぎができている制服、真っ黒に汚れている筆箱にぼろぼろのノート。

誰もが本当は米川が金持ちではない事を知っているので、また嘘かといった感じの生徒達。

米　川　「見て驚くなよーじゃーん」

机の上にどさっと彼が言うレアなものを置く米川。

不気味な目をぱちくりさせ、体はふわふわした毛で覆われ、丸い嘴をもぐもぐさせて動いている手のひらサイズの物体。

清水が間から割り込んできて、

清　水　「こ、これファービーじゃん！」

えーっと驚く生徒達。

花　梨　「うそっ、見せて見せて！」

清水の声に反応して席を立ち上がる花梨。

目をキラキラと輝かせている。

花　梨　「ファービーだってさ陸！　やばいってー絶対可愛いよーいこいこっ」

ぶんぶん体を揺さぶられ目を回している陸。

陸　「いや・・・・・・俺はいいよ。　花梨行ってこいよ」

陸を揺さぶる手が止まる。

花　梨　「あ・・・・・・うん・・・・・・」

少し寂しそうな顔をして米川の元に駆けていく花梨。

一人ぽつんと自分の席に座っている陸。

陸　「（何でそんな言い方しかできないんだよ俺。　せっかく誘ってくれたのに・・・・・・）」

花梨、興奮しながら、

花　梨　「これってさ今、人気ありすぎてなかなか手に入らないんでしょ？　すごーい、えっ確か話しかけるとしゃべるんだよね？」

ファービーだと聞いて次々と米川の周りに生徒が集まってくる。

自慢げな顔をしながら、

米　川　「もっちろん、試しに何か話しかけてみろよ池田」

花　梨　「へへっ」

期待に満ちた顔を浮かべファービーに近づく花梨。

花　梨　「こんにちは」

全く反応がないファービー。

米　川　「多分、声が小さいんだよ。　もっと大きな声で」

大きく息を吸い込む花梨。

花　梨　「こんにちはぁ！！」

しばらくして機械が動くような音がする。

ファービー　「・・・・・・・?好」

花　梨　「あっ！　何かしゃべった。　君のお名前は?」

またしても機械が動くような音がする。

ファービー　「・・・・・・餓死我了」

花　梨　「えっ・・・・・・」

教室が静かになる。

顔を見合わせ不思議そうにしている生徒達。

目をぱちくりさせながら、

ファービー　「・・・・・・今天去喝酒？」

花　梨　「きもっ！」

ぶんっとファービーにパンチを繰り出す花梨。

鈍い音を立て勢いよく教室の隅に飛んでいくファービー。

米　川　「何すんだよー池田！」

花　梨　「全然可愛くないじゃん！　何よこれー」

米　川　「よく見ると可愛いだろ！　ほらあの目とか毛とか嘴とか」

花　梨　「大体、何しゃべってんのか全くわかんないし！　呪われるかと思ったじゃん。　米川あんた、ろくなもん持って来ないわね」

米　川　「何だと！」

教室の中央で米川と花梨の口論が始まる。
清水がまた始まったというカンジで自分の席に戻っていく。
それにつられて米川の席を離れていく生徒達。
生徒が離れていく時に一瞬、米川の机に体があたる。
その衝撃で机の上に置いてあるファービーが入っていた箱が、ぽてっと倒れる。
箱の隅に小さく書いている文字。
（名称　ファービー人形　中国語版）
なおも口論を続けている花梨、米川。
その様子をぼうっと見ている陸。
一方、同じように床に視線を落としぼうっと見ている恵子。
ファービーが機械音を響かせながら、床に転がっている。
ゆっくりと持ち上げ机の上に置きまじまじと眺める恵子。
恵　子　「（愛くるしい・・・・・・）」

×　　×　　×

○教室　授業中

熱心に授業をしているイダセン。

真剣に聞いている生徒達。

どこかうわの空の陸。

ノートにはぼーっとしながら陸が描いた恐竜の絵が完成されている。

ちらっと横を見る陸。

花梨が眠たさを必死でこらえている。

それを見ながら、

陸　「（何かせっかく過去に戻ったってのに何にもしてないよな俺。　得意だったドッジボールもぼろ負けだったし・・・・・・あぁ思い出すと気が重たくなる・・・・・・あれはさすがにショックだった。　今の自分の体が思うように動かなすぎて、こんなにも激しい事をしていたんだって素直に驚いたぐらいだ。　まだまだ当時のこの体を使いこなすには少し時間がかかる。　昨日家に帰って悩むようにずっと考え続けて出た推測だ。　けど確証はない。　ただ・・・・・花梨にも馬鹿な態度をとっちまうし結局、何にも変わってないじゃねーか・・・・・・）」

ふーっと溜め息をつく陸。

自分の肘が思ったより机の端に追い寄せられていたノートに軽くあたり、床に落ちる。

教室にノートが落ちた音が聞こえる。

その音にびっくりする花梨。

花　梨　「もーっ、何やってんの」

眠そうにしながら、ノートを拾う花梨。

たまたま開かれていたページを見てしまう。

花梨の表情が次第に変わっていく。

突然、驚いたように、

花　梨　「えっ、陸めっちゃ上手いじゃん！」

授業中にも関わらず大きな声をだす花梨。

生徒の視線が集まる。

清水も後ろを振り返りながら、

清　水　「どうしたんだよ？　おーっこの絵、陸が描いたのか？」

陸　「いや・・・・・・まぁ、ぼーっとしながら適当に・・・・・」

花梨と清水が大きな声を出し、それがきっかけで周りの生徒達もざわざわと騒ぎ出す。

突然ゆっくりと陸の方にやってくるイダセン。

後ろを向いている清水に小さな声で、

陸　「やべぇ、イダセンこっち来るぞ！　清水、前向いとけ」

陸に忠告されてさっと正面を向く清水。

急いでノートを陸の机に置く花梨。

迫ってくるイダセン。

不自然ににこにこしてごまかしている清水。

全く清水を見向きもせず、素通りしていくイダセン。

陸　「（来たっ！　完全に怒られるな俺。　授業妨害したんだし・・・・・・）」

ぴたっと陸の席の前で立ち止まるイダセン。

下を向いて視線を合わせないようにしている陸。

机の上にあるノートを取り上げる。

陸が描いた絵を眺めながら、

イダセン　「・・・・・・」

何も言わないイダセン。

すたすたと何事もなかったかのように教卓の方に戻って行く。

陸　「えっ？」

思わずそう声に出てしまい驚いている陸。

周りの生徒もイダセンの予想外の行動に唖然としている。

生徒の方を振り返って、

イダセン　「とりあえず、授業は聞かないと駄目だぞ。　出雲、前にでてこの問題を解きなさい」

陸　「はい」

いつの間にか問題が書かれていた事に気づかず一瞬、驚きながらも返事をする陸。

ゆっくりと席を立ち上がり黒板に向かう。

白のチョークを持って答えを書いていく。

考え事をしている為、　どこか心ここにあらずのような表情の陸。

答えを書き終わりチョークを戻す。

前　田　「すげぇ・・・・・・」

一番前に座っていた前田がぼそっと一言。

それをきっかけに我に帰る陸。

周りを見渡すとみんな不思議な顔をしている。

その意味が全くわからない陸。

イダセンまでもが驚いた顔をして、

イダセン　「・・・・・・どうしたんだ出雲、変なものでも食ったか？」

そう言いながら黒板の前に立つイダセン。

赤のチョークを持ち陸の答えに大きく丸をうつ。

その瞬間、教室で歓声が上がり沢山の拍手が沸き起こる。

「奇跡だ」とか「ありえない」とか色んな声が飛び交う中、自分の答えをまじまじと見ている陸。

陸　「（えっ・・・・・・すげぇ簡単じゃん）」

勇者のように周りから讃えられながら自分の席に着席する陸。

すぐに清水がこちらを向いて、

清　水　「おぃおぃ一体どんな魔法使ったんだよ陸。　キングオブバカのお前が段々神様に見えてきたぞ。　ははーん、さてはもてようと思って影で勉強しだしたなお前」

ケラケラ笑って陸をちゃかす陸。

陸　「ま、まぁな。　お前ら俺の本当の実力を知らなさすぎなんだよ」

清水の勢いにつられて調子に乗る陸。

陸　「（・・・・・何だかすごい事になってきたぞ。　こんな簡単な小学生の問題を解いただけで奇跡がられるなんてどんだけ馬鹿だったんだ俺・・・・・けど悪くないな。　もういいっ、折角だし今の状態をとことん楽しんでやるっ）」

清　水　「なぁ、どう思う花梨？　陸が神だぞ」

ははっと笑って、

花　梨　「何よ神って。　陸は陸じゃん」

自分が期待していた答えと少し違い一瞬不貞腐れたような表情になる陸。

花　梨　「けどもう馬鹿って言えなくなるな。　あたし、あの問題わかんなかったし。　ははは・・・・・」

陸　「だろ花梨。　俺もやればできるんだって」

○教室（給食）

イダセン　「手を合わせて」

ぱちっと生徒が手を合わせる音。

一　同　「いただきます！」

その掛け声の後、それぞれがそれぞれの行動をとり始める。

真っ先にあまった牛乳を求めて黒板の前でじゃんけんをしている前田。

一人教卓で給食を食べているイダセン。

まわりに見つからないようにこっそり嫌いなパンを机の中に隠そうとしている米川。

がやがやとおしゃべりをしている生徒。

机はそれぞれ近くにいる四人を一組の班にして、向かい合わせにしてひっつけている。

陸の正面には花梨、右隣には清水が座っている。

陸のお盆の上に敷かれた可愛らしい車のデザインが描かれたナフキン。

それを眺めながら、

陸　「（車って・・・・・・だれがこのチョイスをしたんだろ？　オカンかな・・・・・・）」

ミルメークの粉をストローでかき混ぜ、牛乳を飲んでいる陸。

横から清水が、

清　水　「陸ぅーー」

全力の変顔で陸にせまる清水。

噴出しそうになり、ゲホゲホむせている陸。

陸　「こっ、殺す気か！」

げらげら笑っている清水。

その瞬間、急に天井から「だんご三兄弟」が流れる。

端の方にいた男子生徒が立ち上がり一緒になって「だんごっ、だんごっ♪」といった具合に大熱唱をしている。

清　水　「ったく何でモー娘。流れねーんだよ。　俺の愛するゴマキの声が聞けねーじゃねーか」

まだむせている陸。

隣の班にいた女子生徒がそれを聞いて、

女子生徒　「ほんとキモイよね男子って。一体、モー娘。のどこがいいのよ」

隣の班から「ねーっ」という女子の声が聞こえてくる。

米　川　「ほ、本当だよな。　そんなのが好きな奴の気がしれないよ」

ふっと髪の毛をかきあげて、もう片方の手で安部なつみの缶バッチがついた筆箱を机の中に隠す米川。

清　水　「何だとてめーら、日本の未来も俺の未来もＷＯＷ　ＷＯＷ　ＷＯＷ　ＷＯＷ～♪（ｂｙ　モーニング娘。　ＬＯＶＥマシーンより）　なんだよ！」

清水の後ろにいた夏美がこちらを振り返り、

夏　美　「清水、そんな趣味あったんだ。　気持ち悪っ・・・・・・」

好意のある夏美から直接その言葉を浴びせられ、体にどーんと稲妻が走ったかのように打ちひしがれている清水。

その隣で食事を再開する陸。

ちらちら花梨の顔を見て、また視線を食べようとしているわかめご飯の方に戻す。

教室の入り口側の班の女子がひそひそと何かを話している。

女子生徒Ａ　「出雲ってさ、何か急に雰囲気変わったよね」

女子生徒Ｂ　「あっ、それわたしも思った。　何か周りと違って大人っぽくなったっていうか。　勉強だって実はできるみたいだし何か見直しちゃった」

机の中から可愛らしいプロフィール帳をとりだす女子生徒。

池田花梨、井上夏美、佐々木恵子らをはじめクラスの女子のプロフィールがファイリングされている。

中にはプリクラを貼っているものもある。

女子生徒Ａ　「わたし・・・・・・行ってくる」

女子生徒Ｂ　「えっ！　ちょっと待ってよ、私も」

ぱっと机を立ち上がり陸の方に向かう女子生徒二人。

机の上に置かれたファービーの口に指を突っ込みながらその様子を眺めている恵子。

先ほど中断されたミルメークの残りを飲んでいる陸。

女子生徒Ａ　「いっ、出雲君！」

突然、横から声をかけられたのに驚き、またしても噴出しそうになってげほげほとむせている陸。

陸　「なっ・・・・・・何だよ」

女子生徒Ａ　「あっ、ごめんね。　えっとよかったらこれを書いて欲しいなって・・・・・・・」

女子生徒の手から、切り取られた一枚のプロフィール帳が陸に渡される。

女子生徒Ｂ　「私のも書いて」

それらを受け取り、

陸　「おう・・・・・・ありがとう」

その光景を見てさっきまで魂が抜き取られたかのように元気がなかったのにも関わらず、

突然、我に返る清水。

清　水　「おいおい、何で陸だけなんだよ！　なぁ、俺も書いてやるって」

女子生徒　「（二人同時に）あんたのはいらない」

再び体にどーんと稲妻が走ったかのように打ちひしがれている清水。

その二人に便乗して他の席からさらに二人の女子生徒が陸の元に現れて、プロフィール帳を書いてと頼みに来る。

あっという間に、女子に囲まれる陸。

後ろから、夏美が座る席の椅子がひかれる音を聞く清水。

他の女子と一緒になって陸を囲む夏美の姿を、抜け殻のようにぼうっと確認する清水。

困ったようにしながら、けど満更でもない様子の陸。

ちらっと花梨の方を見る陸。

陸の周りで騒ぐ女子生徒とは対照的に無表情で一人もくもくと給食を食べている花梨。

それを見て次第に陸の顔から笑顔が消えていく。

○デパート　２Ｆ　婦人服コーナー

清　水　「不公平だっ！」

そう大きな清水の声が聞こえて、下のエスカレーターから清水と陸が現れる。

ものすごく不機嫌そうに少し陸の前を早足で歩いていく清水。

陸　「だから頼むって。　プリクラもプロフィール帳に貼ってくれって頼まれたら断れねーじゃん。　それに一人で撮りに行ってたら大分気持ち悪いだろ俺。　なっ、親友を助けると思ってさ。」

手を合わせて清水に頭を下げる陸。

歩く速度を少し落とし、こちらを振り返りながら、

清　水　「何で俺はもらえねーんだよ、ちくしょう。　陸は前からもらった事、あったのかよ？」

陸　「いや、俺ももらうのは初めてなんだ」

清　水　「何、冷静に答えてんだ。　プロフィール帳をもらえるって事イコール、少なからずあなたの事が興味ありますよって事じゃねーか」

陸　「・・・・・・」

再び早足になって婦人服のコーナーをあっという間に通り抜けていく清水。

天井から聞こえてくる愉快な有線。

お客と店員との会話のやりとり。

色んな音が飛び交っている中、ぼそっと独り言のように、

清　水　「夏美・・・・・・」

○プリクラ機の中

陸　「ここらへんにあるプリクラ機って言ったら、確かここの一台だけだったもんな」

大きな音楽が機械から流れている。

腕をくんで無言の清水。

それを見て、

陸　「大丈夫、大丈夫。　金は俺が出すからさ。　だから頼む、どうか一緒に撮って下さい」

そう言いながら、アディダスの財布を取り出し銀色の５００円を機械の中に入れる陸。

効果音が鳴って、ボタンを操作しだす陸。

清　水　「やり方わかんのかよ？」

陸　「まぁな」

画面を見ながら次々と撮影モードを選んでいく陸。

興奮したような表情で、

陸　「うわーっ、やっぱすげー古いよなこのプリクラ」

清　水　「えっ・・・・・・」

驚いたように陸のその様子を見つめる清水。

次第に冷めたような表情になっていく。

○デパート　２階

陸の手元には清水と二人で撮ったプリクラが握られている。

先を歩く清水。

下の階に下りるエスカレーターを素通りする。

焦る陸。

陸　「おいっ、どこ行くんだよ？」

清　水　「ちょっと見に行こうぜ」

おもちゃ売り場を指差して、進んでいく清水。

○おもちゃ売り場

陸　「おーっ、ハイパーヨーヨーじゃん」

お試しで置いてあるハイパーヨーヨーを指にはめてプレイする陸。

陸　「ループ・ザ・ループ！」

その掛け声とともに、器用に半円を描く陸のヨーヨー。
今にも周りの商品に当たりそうになっている。
その他にも「犬の散歩」や「ブランコ」など色んな技を繰り出し、
やっと満足したのかさっきまで一緒にいた清水がいない事に今になって気付く。

陸　「おーい、清水」

大きな声で叫びながらおもちゃ売り場の中を歩いてまわる陸。
一通りまわってカードを見ている清水を発見する。

陸　「（いたっ！）」

しかし、声をかけれずしばらく固まってしまう陸。
周りを見渡して持っていたカードをすっとポケットにいれる清水。
何事もなかったかのようにこちらに向ってくる。
陸の存在に気付く清水。
近くまでやってきて小声で、

清　水　「余裕だわ、陸だったらもっとうまくやれるんだろうけどな」

ふっと笑ってそのまま陸の前を通り過ぎていく清水。

その場に立ち止まっている陸。

急に清水を追いかけ手を掴む。

驚いている清水。

清　水　「何すんだよ！」

陸　「馬鹿な事してんじゃねーよ。　すぐに返すんだ」

清　水　「はぁ？　いつもお前だってやってるじゃねーか。　何をいまさら」

陸　「そうだったとしてもだ！　早くしろっ！」

真剣な表情で声を荒げる陸。

周りにいた主婦が不思議そうな目でこちらを見ている。

その視線を気にしながら、

清　水　「馬鹿野郎っ！　まじで訳わかんね・・・・・・」

陸のむなぐらを掴もうとした次の瞬間、清水の肩にぽんっと手が置かれる。

従業員　「そのポケットの中に入れたものを出しなさい」

ゆっくりと声のする方を振り返る清水。

驚いた表情の陸。

強面で体の大きな従業員が冷徹な目をして清水を見ている。

清　水　「何、言ってんだよおっさん。　何もポケットになんか入れてねーって」

首をかしげてとぼけて見せる清水。

従業員　「とにかく事務所まで来てもらう」

そういうと清水の腕を勢いよく掴み、そのまま歩いていく。

振り返り、陸に向って、

従業員　「お前も来るんだ」

何も言わずとぼとぼと従業員の後ろをついていく陸。

清　水　「何しやがんだ！　離せ、離せよっ」

必死に抵抗する清水。

従業員　「大人しくしろ！」

力ずくで清水を引っ張っていく従業員。

清水、大声で陸に向って、

清　水　「おい、陸！　助けてくれよ！　陸ーーーーっ！！！！！」

黙って下を向き視線を清水から逸らす陸。

それを見て生気を失ったような表情の清水。

抜け殻のようにズルズルと従業員に連れられていく。

おもちゃコーナーから次第に小さくなっていく三人。

何事かとその様子を見ていた見物人達もしばらく経ってそれぞれの場所へと離れていく。

天井から聞こえてくる愉快な有線。

お客と店員との会話のやりとり。

おもちゃ売り場の地面に、さっきまで陸が使っていたハイパーヨーヨーが無造作に転がっている。

○教室（翌日）

次々と生徒が登校してきて騒がしくなっていく教室。

一人、窓の外を眺めている陸。

ぎらぎらと太陽の光が差し込み、思わず目をそむける陸。

隣から物音が聞こえて、

花　梨　「陸、おっはよー今日は遅刻しなかったのだーすごいでしょ？」

赤いランドセルを下ろして、にこにこしながら陸に声をかける花梨。

横を向いて、

陸　「あぁ、おはよう・・・・・・」

どこか元気がないような陸の挨拶。

そして再び窓の外を眺めている。

不思議そうな顔で陸を見ながらも、机に教科書を入れていく花梨。

急に扉がどーんっと大きな音を立てて開く。

その音に驚く生徒達。

清水が勢いよく入ってくる。

真剣な表情の清水。

さっきまで騒がしかった教室も、みんな清水のいつもと違う雰囲気に勘付いたのか恐ろしいほど急に静まり返る。

固まってしゃべっていた男子生徒も、清水が通ると道を開けるよう

に端へと移動する。

そのまま一直線に陸の机にやってくる清水。

なおも窓の外を眺めている陸。

陸の机を大きく叩く清水。

清水の方を見る陸。

清　水　「何で昨日、俺を止めた？　何で助けてくれなかったんだ？」

少し間を置いて、

陸　「悪い事だからだ」

小さくそう答える陸。

突然、鬼の形相のような怒り狂った表情になり、

清　水　「優等生ぶってんじゃねーぞ、こらあっ！！」

声を荒げ、座っている陸の顔面を殴る清水。

勢いよく吹き飛ばされ、椅子は倒れ、たまたま誰も座っていなかった後ろの机に大きく倒れ込んでいく陸。

一瞬の出来事に教室中が凍りつく。

陸　「・・・・・・てめぇ、何しやがるっ！！」

すぐさま起き上がり、自分の机を蹴飛ばし清水に飛び掛っていく陸。

清水のむなぐらを掴み頭突きを顔面に繰り出す。

ひるんだ勢いで清水もまた後ろへと倒れていく。

椅子も机もごちゃごちゃになり、危険を感じた周りの生徒は花梨も含め、瞬間的に少し後ろに非難している。

再び起き上がり陸に向って行こうとしている清水。

鼻からは生々しく鼻血が垂れている。

大きな声をあげて再び向っていく二人。

瞬間的に清水を前田が陸を米川が、必死にその体を抑える。

清　水　「離せっ前田！　こんな奴、陸でも何でもねぇ！！」

前　田　「落ち着けって清水！」

対照的にその清水の言葉を聞いて自然とクールダウンしていく陸。

陸の体を抑えながら、

米　川　「陸・・・・・・」

お互いの真ん中に割って入る花梨。

花　梨　「もうやめて！　あんた達、親友なんでしょ！！」

花梨の悲痛な叫びが教室に響く。

その瞬間、イダセンが教室に入ってくる。

夏美がイダセンの方を訴えるような目で見ながら、

夏　美　「先生・・・・・・」

何も言わずにそのまま陸と清水の元にやってくるイダセン。

冷静に周りを見渡し、その次に陸と清水を交互に見る。

体を抑えられながらお互い視線を下に向けている二人。

しばらく経って、

イダセン　「何があった？」

沈黙の中、イダセンの声がゆっくりと生徒の耳に入っていく。

下を向いたまま答えようとしない陸と清水。

もう一度、二人の顔を交互に見るイダセン。

さっきとは少し違った声色で、

イダセン　「まだやるか？」

沈黙。

陸　「いいえ」

ゆっくりと顔を上げイダセンの方を見ながら、そう答える陸。

イダセン　「清水は？」

何も言わず首を横に振る清水。

ふーっと一息つき、

イダセン　「とりあえずお前ら二人、保健室にいくぞ」

そう言い、入り口のドアの方へ向うイダセン。

清水を抑える前田の手を振りほどき、陸を睨み付けながら、

清　水　「お前は一体、誰なんだよ」

そう吐き捨てるとそそくさとイダセンの後に続いていく清水。

真剣な顔をしてなかなか動こうとしない陸。

荒れた教室を元通りにしようと動き出していく生徒達。

米川も陸の体を離す。

花梨も机を片付けている。

生徒が次々に動き出す中、ただ一人突っ立ったままの陸。

窓から蝉の鳴き声が勢いよく聞こえている。

陸（語り）「7月5日。　この日、俺は大切な親友を失った・・・・・」

――つづく――

――第2話　「お前は一体、誰なんだよ」　完―

第3話　黒魔術って信じる？

メインタイトル　『２０日間のシンデレラ』

○体育館（回想）

陸　「やっと・・・・・・やっとあなたを見つけました。もう駄目かと思ったけれど心には信じていました。　必ず会えると」

花　梨　「私も」

陸　「でも・・・・・・まだ名前を知りません・・・・・・」

花　梨　「シンデレラです」

陸　「シンデレラ・・・・・・シンデレラ・・・・・・シンデレラ！　世界で一番美しい名前だ。　・・・・・・お城に来てくれますね？」

ひざまずいたまま花梨の手を取る陸。

花　梨　「ええ・・・・・・喜んで・・・・・・」

その形のまま幕が下りる。

舞台からの光が急になくなり、体育館全体がわずかに残った光だけでほの暗くなる。

それと同時に盛大な拍手が体育館を包む。

いくつも並んでいる沢山のパイプ椅子。

全学年の生徒含め大勢の保護者達が同じように歓声をあげ、大きく拍手をしている。

舞台の一番上の方には、鮮やかに飾りつけされた、

（校内学芸会）

と書かれた文字。

端の方には縦長の白い紙に、

（5年4組　シンデレラ）

と書かれている。

鳴り止まない拍手。

中には目に涙を浮かべている保護者もいる。

しばらく経って再び幕が上がっていく。

舞台上に全員集合している5年4組の生徒達。

真ん中に主演の陸と花梨。

その周りを他の生徒が囲んでいる。

そしてゆっくりと全員同じタイミングで深々と一礼をする。

さらに大きくなる拍手、歓声。

観客側も舞台側もまさに一体となるような空気感。

いつになったら鳴り止むのだろうという体育館内になり響いている拍手の音。

そんな中、再び幕が下りて生徒の姿は見えなくなる。

観客側の盛り上がりもピークに達し、しばらく経ってようやくあたりが静かになる。

しかし完全に静かになるわけではなく、保護者や生徒達が感想を言い合って、まだざわざわとした感じは僅かに残っている。

暗闇の中、うっすらと認識できる観客の表情はとても生き生きとしていて満足している様子。

○舞台裏（回想）

生徒一同　「お疲れーー」

その掛け声とともにわいわいと盛り上がる生徒達。
やっと緊張がとけた安堵感と無事に舞台をやり終えた達成感で、満面の笑みを浮かべている。
急に泣き崩れて夏美と抱きあう花梨。
花梨をささえる夏美。
陸の元に清水がやって来る。
お互い手を軽く握りコツンと当てる。
照れ臭そうにニコッと笑う陸と清水。
他の生徒もそれぞれの喜びを分かち合っている。
右手を握って大きく上に挙げる陸。
陸　「5年4組は最強クラスだぁーー」
叫ぶように声を張り上げる陸。
その声の後、
生徒一同　「おーっ！」
と他の生徒も陸と同じように握った手を大きく上に挙げる。
ちらっと視線を横に向ける陸。

陸の方を真っ直ぐ見て、握った手を上に挙げている花梨。
表情はうっすら目に涙を浮かべながらも、満面の笑顔。
それを見て、なおも笑顔になる陸。

○実家　陸の部屋（７月１９日　現在）

急にベッドから起き上がる陸。
網戸にしている窓からオレンジの光が部屋に差し込んでいる。
外から聞こえるカラスの声。
その場からゆっくり立ち上がる陸。
倒れ掛かるようにどさっと勉強机の椅子に腰をかける。
ぼーっと柱に掛けてあるカレンダーを眺める陸。
二箇所の日付に赤いマジックで丸がうたれていて、その下にはそれぞれ文字が書かれている。
片方は、
（７月２０日　校内学芸会）

もう一つは、

（7月23日　花梨、転校）

視線を机に戻し、引き出しからノートを取り出す。

ぱらっとノートを開く陸。

7月3日からその日の日記が書かれている。

7月6日の日記をまじまじと見ている陸。

ノートに書かれている7月6日の日記、

陸（語り）「7月6日。　清水と喧嘩をして一日が経った。正直、何事もなかったかのようにけろっとしてて、またいつものように馬鹿騒ぎができるんだと思っていた。　けど実際は違った。改めて自分の考えの甘さと、してしまった事の重大さを身をもって知る事になる。　清水は完全に俺を無視した・・・・・・まるで最初からそこに存在していないかのように・・・・・・こちらから話しかけても聞こえてないふりをされ、今までのように前の席から後ろを振り返ってくだらない話を持ちかけてくる事もない。　ショックだった・・・・・・まだ頭の中に残っている本当の思い出ではこんな時期に清水と喧嘩をする事なんてなかったし、何よりとっさに万引きを止めてしまった自分にも驚いた。　当時なら自分も同じような事をしていたはずだ・・・・・・けど今の俺はやっぱりいけない事だと思う。　それは曲げられない。　・・・・・・清水は完全に俺を疑っている。　清水だけじゃない。　他の生徒もあの一件以来、俺を見る様子が何処かおかしいように思うんだ・・・・・・」

日記を読むのに没頭している陸。

○体育館（回想　7月6日）

一人、舞台を遠めで見ている陸。

イダセン　「おーい、何してるんだ！　早く跳べー」

呼びかけられふと我に帰る陸。

目の前には直線にマットが敷かれていて、その先に踏み切り板、そして高々と六段積み重ねられた跳び箱が見える。

声の聞こえる方を見ると、陸を急かして腕を組んでいる赤いジャージ姿のイダセン。

その近くで体育座りをして様子を見ている生徒達。

再び跳び箱の方に視線を戻す陸。

大きく息を吸い込みタッと駆け出す。

ゆっくりと助走をつけ、距離が近づくにつれ速度を上げていく。

タイミングを合わせ、踏み切り板に足をつき、跳び箱には両手、そして大きく足を開いて体を前に押し上げる。

バーンと大きな音を立て陸の体が宙を舞う。

静かに着地をする陸。

満足そうにうんうんと頷いているイダセン。

退屈な表情の清水。

他の生徒達もどこか関心がないような感じ。

一息ついてみんなの元に、すたすたと戻っていく陸。

授業終了のチャイムが鳴る。

体育館の入り口のドアを開けて、次々と生徒が出て行く。

その後に続いて出て行こうとするイダセン。

ふと振り返り一人、取り残された陸を見る。

誰も陸に「一緒に帰ろう」と声をかける生徒はいない。

どこか心配したような声で、

イダセン　「・・・・・・入り口、ちゃんと閉めとけよ」

とだけ言い、体育館を後にするイダセン。

軽く会釈をする陸。

大きな体育館に陸だけが、一人突っ立っている。

再び舞台の方に視線を向ける陸。
大きな黒い幕が掛かっている。

陸（語り）「舞台を眺めていると色々と思い出してしまう・・・・・・・　5年4組が初めて一丸となった瞬間。　本当に楽しかった俺の大切な思い出。　馬鹿で何のとりえもない俺が初めて、一生懸命に何かをやりとげようと思えたんだ。あの瞬間をもう一度味わいたいって大人になってからもずっと思っていたけど、あと二週間で再びそれが訪れようとしている。　それもこんな状況で・・・・・・一世一代のイベント、校内学芸会が目前と迫っていた」

サブタイトル　『第3話　黒魔術って信じる？』

○教室

イダセン　「えーつまりもののかさの事を体積と言い、一辺が一センチの立方体の体積を一立方センチメートルと言います。　体積を計算で求めるには公式があって立方体は一辺×一辺×一辺で答えが出て来ます。　では直方体を求める公式はなんでしょう？」

一斉にイダセンから当てられないように目線をそらす生徒達。

黒板の隅に書いている日付を確認するイダセン。

イダセン　「じゃあ今日は7月6日だから出席番号6番の・・・・・・」

陸の方を見るイダセン。

熱心にノートを取り、授業を聞いている陸。

イダセン　「・・・・・・何だかわからんが急にお前の答えが聞きたくなった。　出雲陸、答えなさい」

席を立ち上がる陸。

周りの視線が集まる。

陸　「たて×横×高さです」

イダセン　「よろしい」

着席する陸。

再びノートをとりながら真剣に授業を聞いている。

その様子を見ている花梨。

目に涙を浮かべている。

○男子トイレ

換気扇が回る音。

掃除用用具入れの近くに置いてある消臭剤。

小の便器には古くなったのか、ひびがいったのかガムテープで補強をしてある。

実際、汚くはないけれど建物自体が古くなっている為、やはりあまり綺麗ではない印象を与える。

突然、扉が音を立てて開く。

必死な顔で掛け込んでくる陸。

陸　「（やべぇ・・・・・・腹が・・・・・・）」

一瞬にして大の方の扉を開け、中に閉じこもる陸。

息を切らし、額の汗をぬぐっている。

ズボンを下ろそうと手に掛けたその時、聞こえてくる声。

男子生徒Ａ　「何かさぁ出雲、気味悪くないか？」

声がトイレ内に響く。

動きがピタッと止まる陸。

扉の向こうからコツコツと足音が聞こえてくる。

息を潜める陸。

５年４組でも影の薄い男子生徒二人組みが入ってくる。

きゅっと蛇口を回し手を洗いながら、

男子生徒Ｂ　「そうだよな、　ほんと別人みたいだもんな。　雰囲気も話すカンジも。　てか俺がびっくりしたのはあの授業だって。　なんであんな問題あいつに解けるんだ」

男子生徒Ａ　「さあな・・・・・・女子にももてやがるし」

男子生徒Ｂ　「・・・・・・お前、羨ましいんだろ？」

男子生徒Ａ　「違うわっ、馬鹿！　ただますます嫌になったよ、あいつの事」

トイレの壁にもたれ掛かり聞き耳を立てている陸。

男子生徒Ｂ　「清水と喧嘩してからみんな出雲に近づこうとしないもんな」

まだ少し濡れた手を振るっている男子生徒Ｂ。

男子生徒Ａ　「あん時はほんとびっくりした。　清水怒らすのだけはやめとこう」

男子生徒Ｂ　「はは・・・・・・そうだな」

男子生徒Ａ　「池田ってさ・・・・・・やっぱ出雲のこと好きなのかな？」

男子生徒Ｂ　「どうだろう。　けどみんな出雲のこと気味悪がってるんだぜ？　池田もやっぱ同じだろ。　もしかして池田のこと狙ってんのか？」

男子生徒Ａ　「まっ、まさか・・・・・・」

男子生徒Ｂ　「何、照れてんだよ？　まっ、それはないか。　お前はゲームが恋人だもんな。　早く帰ってＦＦでもしようぜ」

段々と遠くなっていく男子生徒達の声。

扉がバタンとしまる音が聞こえる。

壁にもたれかかったままズルズルとその場にしゃがみ込む陸。

やかましくなり続ける換気扇を見つめて、

陸　「はは・・・・・・腹痛、治まっちまった・・・・・・」

○５年４組　ベランダ

手すりに手をつき、ぼーっと一人外を眺めている陸。

空は雲ひとつない快晴。

太陽はいまだにぎらぎらと輝いている。

視線を下の運動場に向ける陸。

わいわいと元気な声が聞こえてくる。

鬼ごっこをしている生徒。

鉄棒で逆上がりの練習をしている生徒。

ジャングルジムに登っている生徒。

ドッジボールやキックベース、手打ちなどボールを使って遊んでいる生徒。

一年生から六年生まで入り混じり、みんなそれぞれ好きな事をして楽しんでいる。

陸　「（はぁー何か完全に一人になっちまったみたいだな俺。無理もないか・・・・・・）」

ため息をつく陸。

少し笑いながら、

陸　「（こんな状況でこんな事を思う俺もほんとどうかしてるのかなって思う。　けど一歩、引いた今の状況は皮肉にも彼らを客観的に見れているような気がするんだ・・・・・・）」

振り返ってベランダから教室の中を見る陸。

鬼ごっこをしている清水。

げらげら笑いながら全力で鬼から逃げている。

清　水　「つかまるかよ、バーカ」

陸　「（馬鹿で元気で正直でそれでいて純粋で、現実に冷める事なくいつも全力で何かを楽しむことができて・・・・・・）」

机の上に座って他の生徒と話をしている米川。

米　川　「俺は世界一有名な米川カンパニーの社長になるんだ。お前も社員にしてやるぞ」

藤　川　「嫌だよ。　俺は柔道のオリンピックで金メダルをとるし」

陸　「（何も知らない。　けど何も知らないからこそ周りを気にする事無く、馬鹿みたいに大きな自分の夢や目標も堂々と言うことができて・・・・・・）」

女子と話をしている前田。

前　田　「本当だって！　パンをシチューにつけるとすごく美味しいんだって。　もしかすると牛乳にパンってのも意外といけるかもしれないなぁ・・・・・・」

女　子　「えーっ！」

陸　「（好奇心旺盛で失敗を恐れず何にでも挑戦しようとする）」

ベランダから教室に戻る陸。

陸　「（大人になるって何なのだろう？　俺は世間一般に言えば大人だ。　けどそんな事、聞かれたってさっぱり分からない。　ただ常に周りから求められるものは、頭の偉い学校を出て、いい資格を持っていて、給料が高くて安定した仕事に就いている。　まるでそれらによってその人の人間性を決められるかのように。　確かに生きていく上で必要な事なのかもしれない。　けど今なら何となく思う。　俺達、大人は何か大切な事を忘れているんじゃないか？　彼らから学ぶような事は沢山あるんじゃないか？）」

そのまま生徒達の間をすり抜けて行く陸。

騒がしかった教室が一瞬、静かになり視線が陸に向けられる。

気にせず教室を出て行く陸。

○廊下

陸　「（柄にもなくそんな事を思ってしまった。　実際、俺もそんな事、偉そうに言えたような出来た人間でもないのにな・・・・・・花梨・・・・・・清水・・・・・・俺はほんと何をしてるんだろう・・・・・・）」

ふらふらと歩いて行く陸。

階段を上っていく。

○3F

考え事をしながらふらふらと歩き、いつの間にか音楽室の前までやってきてようやくわれに返る。

陸　「（おっ・・・・・・いつの間にここまで来てたんだ。まるで夜中に出歩く夢遊病者みたいじゃないか。　・・・・・・帰ろう、いくら悩んだって仕方ない・・・・・・）」

引き返して階段の踊り場まで来て一旦止まる陸。

視線を上に向ける。

屋上へと続く階段があり窓からは光が差し込んでいる。

さらにその先を見ると、もう使われなくなった机が積み上げられており行く手を阻んでいる。

それを確認してから、階段を上り先に進んでいく陸。

陸　「（懐かしいなぁーまだあったんだ。　昔、よくここを登ったのが見つかって怒られてたっけ）」

馴れたように机の間をくぐり抜けていく陸。

あまり人通りがない為、陸の足音しか聞こえていない。

突然、頭上からちりんと陸の耳に鈴の音が聞こえる。

音の鳴る方を見ると、首に鈴を付けた黒猫が陸を見ている。

陸　「（あの猫、どこかで・・・・・・）」

黒猫のすぐ隣には、沢山の椅子が積み上げられていて妙な雰囲気をかもし出している。

普段、閉まっているはずの屋上へのドアが開いたままになっている。

鈴の音を残し、素早く屋上へと出て行く黒猫。

追いかけるように階段を駆け上る陸。

その勢いのまま一気に屋上へでる。

○屋上

陸の視界を覆う真っ白な光。

暗い校舎から急に外に出た為、思わず目を細める。

視界がぼやけている陸。

微かに認識できる黒猫。

その後を追う陸。

急に立ち止まる黒猫。

陸　「（ん・・・・・・人？）」

うっすらと人らしきシルエットが見える。

同じように立ち止まる陸。

急に聞こえてくる、陸に発せられた声。

声　「ねぇ」

陸　「えっ？」

声　「黒魔術って信じる？」

次第に目が慣れて、視界がはっきりとしてくる。

確実に校則違反の黒いドレス。

風に揺れる長めの髪。

黒猫がぴょんと肩の上に乗る。

分厚い本を両手で抱えて真っ直ぐにこっちを見ている。

風が陸の体をすり抜けていく。

時間が止まったようにしばらく動かない陸。

もう一度、相手の方をちゃんと見て、

陸　「恵子・・・・・・」

二人しかいない屋上。

周りには青空と遠くに見える山、そして周辺の町並みがパノラマのように見える。

ふーっと一息ついてから答える陸。

陸　「あぁ・・・・・・俺は信じてるかもしれないな」

少し間を置いて、

恵　子　「そう・・・・・・」

少しうれしそうな表情の恵子。

恵　子　「あんたクラスのみんなに気味悪がられてるわよ。　あいつは陸じゃない、別人だって」

陸　「・・・・・・お前もそう思うか？」

恵　子　「さぁね・・・・・・ただ周りから気味悪がられてるって所は私も同じかしら・・・・・・」

優しい目で陸を見る恵子。

手すりに手をついて、遠くの景色を眺めている。

何かを思い出すかのような表情で、

恵　子　「私には小学二年生の弟がいるの。　名前を翔太ってい
ってね、小さい頃からずっと一緒だった。　明るくて素直で羨まし
いぐらい友達も多かったわ。　けどある日を境に全てが変わった・・
・・・・」

急に自分のことを話し始める恵子に驚いている陸。

しばらく沈黙が流れる。

黙って恵子の話に耳を傾ける陸。

恵　子　「父は他に女を作って家を出て行ってしまった。　残さ
れた母は私達を必死で育てようとしてくれていたけど、元々体が弱
く、持病が悪化してとうとう死んでしまったの」

言葉を失う陸。

表情が強張る。

恵　子　「私達は母の事が大好きだった。　週末になると私の好
きなコロッケをいつも作ってくれて、出来上がるのを今か今かと待
っていたの。　結局残ったのは莫大な遺産と私達姉弟には広くて大
きすぎる屋敷。　それがすごく孤独で辛かった・・・・・・家族み
んなで夕食を食べていた頃が本当に温かくて懐かしくて・・・・・・
それでも私は姉として何とか翔太を守らなければならないと思った
わ。　けどまだ低学年のあの子にはショックが大きすぎたみたい。
　それ以来、翔太は笑わなくなってしまった・・・・・・感情とい

うものを完全に失くしてしまったの・・・・・・・」

再び恵子の顔を見る陸。

次第に笑顔がなくなる恵子。

陸　「・・・・・・弟はこの学校にいるのか？」

恵　子　「ええ・・・・・・二年三組よ。　けど何にも関心を示さなくなった翔太は教師からは問題児扱いされ、友達も次第に離れていった。　だからあの子の友達って言ったら、いつの間にか屋敷に住み着くようになったこの猫ぐらい」

恵子の肩の上でにゃーっと鳴く黒猫。

恵　子　「授業が終わるまでここで翔太を待ってくれているの」

陸　「（生徒達の間で噂になっていた、化け猫の幽霊の正体ってこいつの事だったのか・・・・・・）」

一人、納得している陸。

恵子、再び陸の方を向いて、

恵　子　「あんた黒魔術を信じるって言ったわよね？　どうしてそう思うの？　根拠は？」

一瞬、その言葉にひるむ陸。

困った顔をしながら、

陸　「根拠か・・・・・・わからん。　けどないとは思わない」

何かを決意したかのような表情の恵子。

恵　子　「私はあの子を助けてあげたい。　どんな方法だっていい。　奇跡だって魔術だって願いが叶うんなら何だってかまわない。何度、失敗しても必ず・・・・・・」

急に思い出したかのように我に返る恵子。

恵　子　「ごめんなさい・・・・・・何だか一方的に話しすぎたみたいね」

陸　「全然いいよ。　上手くいくといいな。　てかお前こんなに人と話せるんなら友達できるんじゃないのか？」

恵　子　「あんたに言われると何かむかつくわね」

笑顔になる二人。

恵　子　「それより学芸会の練習しなくていいの？　あんた王子役でしょ？」

陸　「いっけね！　そうだった・・・・・・台詞思い出さねぇと・・・・・・」

陸の横を通って戻っていく恵子。

陸　「お前は何の役なんだよ？　木その１か？」

にやにや笑って恵子を茶化す陸。

陸の方を振り返りくすっと笑って、

恵　子　「魔法使いよ」

○陸の部屋（７月１９日　現在）

真剣に日記を読み続けている陸。

下から聞こえる母の声。

母　「陸ーー川島のおじいちゃんからもらったスイカ食べるかい？」

大きな声で返事をする陸。

陸　「今はいい！」

窓の外は次第に暗くなり始めている。

再びノートに視線を戻す陸。

ノートに書かれている７月７日の日記、

陸（語り）「７月７日。　周りは完全に学芸会への練習で必死

になっていた。　俺も王子という大役を与えられていながら、十年前の台詞をきちんと覚えているはずもなく暗記をする為、常に台本とにらめっこをしていた。　ただ一番問題なのは相手役がシンデレラであり花梨だという事で・・・・・・こんな自分でも一生忘れたくないと思えた程の学芸会を今の心境で昔と同じように再現できるのか？　人に喜んでもらえるものを作り上げる事ができるのか？　本当にそれが心配だった。　清水との喧嘩の件で、最近もどこか花梨とは気まずい雰囲気が流れていた。　・・・・・と思っていた。

初めて花梨とする演劇の練習では（本当の思い出では何回もしているのだが）　いたって自然で、俺の事を疑っているような様子もあまり見れず、それどころか会話のやりとりさえ昔のような感覚に似ていてどこか懐かしかった。　この世界に来て初めて花梨とまともに会話をしたような気さえする。　けど俺はまだ知らなかった、いや現実を受け止めたくなくて記憶の奥にしまっていた。

この日は花梨が転校するという事を知らされる日で、刻一刻と俺にとってあの忘れられない日が迫ってきているのだという事を・・・・・・」

○教室（回想　7月7日）

花　梨　「シッ・・・・・・シンデレラでひゅ・・・・・・」

緊張して声が裏返っている花梨。

花梨の演技に戸惑っている陸。

陸　「おぃおぃ、主役がそんなんで大丈夫か？　こんな緊張

しまくってるシンデレラ見たことないぞ」

ふて腐れたように、頬を膨らませている花梨。

花　梨　「しょうがないでしょ！　主役なんて緊張するに決まってるじゃない。　てかさっきのあんたの台詞もちょっと危うかったわよ？」

反撃をするように、にたっと笑って下から覗き込んでくる花梨。

陸　「シッ・・・・・・シンデレラでひゅ・・・・・・・・よりはましだ馬ー鹿」

花　梨　「誰が馬鹿よ！　最近ちょーっと勉強ができるからっていい気になってんじゃないわよ、このがり勉！」

陸　「がり勉じゃねぇ」

隣同士の席で演劇の練習をするのか、喧嘩をするのかわからない状況になっている二人。

その様子を周りの生徒がちらちらと見ている。

清水も前の席で気になっている様子。

イダセン　「よーし、じゃあ今日の練習は終わりだ。　とりあえずみんな席に着け」

時計を確認して生徒に声をかけるイダセン。

自分の席を離れて練習をしていた生徒達も、それぞれ戻っていく。

静かになる教室。

ちらっと花梨の方を見て話始めるイダセン。

イダセン　「みんなに大事な話があるからよく聞いてくれ。　・・・・・・実は今月の２３日を最後に池田は転校する」

静かな教室がより一層、静けさを増す。

みんな驚いて唖然としている。

イダセン　「お家の都合で県外に引っ越すそうだ。　もちろん池田はそっちの小学校で学校生活を過ごす事になる。　だからみんなと過ごす大きな行事といったらもう校内学芸会しかないんだ。　みんなその意味をちゃんと理解して欲しい。　精一杯練習していい思い出を残そう。　池田の為にもな。　池田はちゃんと主役として頑張らないと後悔するぞ。　先生に最高のシンデレラを見せてくれ・・・・・・・な？」

にこっと笑顔を見せるイダセン。

花　梨　「はいっ・・・・・・・」

今にも泣きそうになっている花梨。

その様子を見ている陸。

陸　「（今、昔の自分の記憶が鮮明に蘇った気がした。　前

から花梨に転校するって事は聞いていたけど、でも頭のどこかでそんな訳ないって現実を受け止めようとしない自分がいたんだ。　けどイダセンの口から告げられて初めて実感した。　花梨は転校するんだって・・・・・・もうどうにもならないんだって・・・・・・今、思えば県外に引っ越しても会おうと思えばいくらでも会える。
　けどあの頃は県外って言葉があまりにも遠く、もう一生会えないようにさえ思っていたんだ」

チャイムが鳴って教室を後にするイダセン。

扉が閉まると同時に沢山の生徒が花梨を囲む。

真っ先にやってくる夏美。

夏　美　「花梨ほんとなの？　嫌だよ、行かないでよ・・・・・・・」

花　梨　「ごめん・・・・・・ごめんね・・・・・・」

泣いている二人。

他の女子も泣いている。

少し離れてその様子を見ている男子生徒。

気を使って自分の席から離れる陸。

　陸　「（覚悟はしていた。　ちゃんとその日が来ても笑顔で花梨をおくりだしてやろうって。けど出来なかった・・・・・・強がって寂しくないって言っても、余裕があるように見せようとして

も全然涙を抑え切れなくて、結局思っている事と真逆の事を言ってしまったんだ。　お前なんかとっとと転校しやがれーって・・・・・・花梨を傷つけてしまった事。　言えなかった花梨への思い。　現在でも俺を苦しめ続けるそれらの後悔というもの。　もう二度と同じ過ちを繰り返さない・・・・・・」

ふと立ち止まり驚く陸。

周りを気にせず泣いている米川。

休み時間にも関わらず教室全体がしんみりとしている。

陸　「（花梨はみんなから愛されていたんだ・・・・・・）」

○実家　陸の部屋（7月19日　現在）

窓の外はすっかり暗くなっている。

鈴虫の泣き声が心地よく部屋に入ってくる。

うーんっと両手を挙げ伸びをする陸。

勉強机に置いてあるライトがノートを明々と照らしている。

再びノートに視線を戻す陸。

ノートに書かれている7月12日の日記、

陸（語り）「7月12日。　米川が花梨に告白した。　驚いた、あいつが花梨を好きだったなんて・・・・・結果は駄目だったみたいだ。　それを聞いてどこかよかったと思っている自分が何とも腹立たしい。　それと同時に自分の気持ちを素直に伝えられる米川が羨ましく思えた。　俺は焦っている・・・・・時間がないというのに・・・・・後悔した事をやり直す為にこの世界に来たんじゃないのか？　どんな形でもいい。　花梨に・・・・・・」

急にページをめくって7月12日の日記をとばす陸。

陸　「・・・・・・」

ふーっとため息をつく。

再びノートに視線を戻す。

ノートに書かれている7月18日の日記、

陸（語り）「7月18日。　今日で日記を最後にしようと思う。　もう学芸会に向けて出来る限りの練習はしてきた。　花梨の演技もすっかり板についてきて、俺もやっと安心して自分の演技に集中できるようになった。　俺は現実に戻った時、今の思い出が上書きされて本当の思い出を失ってしまう。　けど明日はあの頃に負けないぐらい最高の思い出を作れるって信じてる。　最後くらいだらだらと書かないで気持ちよく終わろう。　後は任せた。　頑張れ、俺！」

ノートをパタンと閉じる陸。

机から立ち上がり窓際に移動する。

窓から外の景色を眺める陸。

外からゆっくりと吹く心地いい風が陸の前髪を揺らす。

見慣れた町並み。

けど懐かしい町並み。

ほとんどの家の電気が消えていて、一部の家しか点いていない。

大きく息を吸い込む陸。

瞳をきらきらさせて、期待に満ちた表情。

陸　「よしっ！」

自分で自分に気合を入れる陸。

天上からぶら下がる紐を二回引いて、蛍光灯の電気を豆電球にする。

一瞬にして暗くなる陸の部屋。

倒れるようにベッドに仰向けになる陸。

ゆっくりと瞳を閉じる。

○体育館前　廊下（翌日）

教　師　「押さないでーゆっくり入って下さーい」

保護者達を体育館の中へと誘導していく教師。

入り口にある真っ黒な黒いカーテンをくぐって中に入っていく保護者達。

教　師　「ちょっと、おじいさん！　中は飲食厳禁ですよ」

川島のじいさん　「細かいこと言うんでない若いの。　後先、短い年寄りの楽しみを奪わんでくれんか？」

教師の見つめる先には、大きく腰が曲がり、片方の手には何とか自分の体を支えている杖、もう片方は道中のコンビニで買ってきた「男山」と書かれたパックの酒を持っている。

酒にはすでにストローがささっており、川島のじいさんの口からは話すたびに真新しい酒の匂いがしている。

教　師　「しかし・・・・・・」

声　「あーっ、川島のおじいちゃん！」

川島のじいさん　「おーっ、清水君とこの・・・・・・」

渡り廊下から川島のじいさんを見つけ走りよってくる清水の母。

清水の母　「いつも馬鹿息子が遊んでもらってるみたいで・・・・・・ほんとすいません」

深々とお辞儀をする清水の母。

川島のじいさん　「いやいや構わんよ。　わしも孫がいないんで寂しいての。　出雲君とお宅の息子さんは本当にいい遊び相手になってくれとる。　あの子はああ見えて芯の通ったいい子じゃ。　将来、本当に楽しみじゃわい・・・・・・はっはっはっ！」

普段しわくちゃの顔をさらにしわくちゃにして笑う川島のじいさん。

話の腰を折られ気分を悪くしている教師。

二人に声を掛ける。

教　師　「ちょっとすいません」

清　水　「なによ、あんた！　あんまりでかい声でおじいちゃんに注意してるから聞こえてたけど、あんたも教師なら機械みたいに固いことばっか言ってないで、もっと感情をもって発言しなさい！」

勢いよく教師を攻撃する清水の母。

教　師　「あっ・・・・・・すいません」

指摘をされ、しゅんとなる教師。

ここぞとばかりに酒を飲みながらとぼとぼと入り口に入っていく川島のじいさん。

上機嫌な声で、

川島のじいさん　「あんがとよ」

○体育館

恵　子　　「テクマクマヤコンーエロイムエッサイムーコウチョウノアタマハハゲカツラッ！」

先端に星がついた魔法の杖をぶんぶんと勢いよく振り回し、大きな声で呪文を唱える恵子。

勢いがよすぎて星が取れかかっている。

きらきら光るドレスに紫のウイッグをかぶり魔法使いを演じている。

すると目の前にあったかぼちゃが宙に浮いて消えていく。

ぼろぼろの服とほうきを持ってシンデレラの役を演じている花梨。

その光景を見て驚いている。

花　梨　　「まあっ！」

舞台の袖を指差す恵子。

恵　子　　「あれを御覧なさい」

恵子の指差す方から大きなかぼちゃの馬車が登場する。

きらきらと光を放ち、馬車のてっぺんには王冠が乗っている。

しかし、作りは立派なのに対して、馬は前田が、その馬を操る人を清水が演じていてこの上ない違和感を放っている。

清　水　「シンデレラ様、僕とこの馬車で夜の散歩に出かけませんか？」

手綱をぱしんと振り下ろす。

前　田　「ひひーん」

馬を熱演している前田。

恵　子　「シンデレラをナンパするんじゃない。　この下衆野郎」

魔法の杖で前田の頭をぼこぼこと殴っている恵子。

苦しんでいる前田。

前　田　「何で僕が責められてるんだよ」

花　梨　「まぁ、何て不思議なの？　馬がしゃべったわ！」

会場が笑い声で包まれる。

花　梨　「本当に素晴らしいわ。　あっ・・・・・・・でも私この格好じゃ舞踏会にはいけないわ・・・・・・」

恵　子　「もちろんよ・・・・・・おまかせなさいっ！」

今度は魔法の杖を花梨に向ける恵子。

真剣な表情。

会場に響く程の大きな声で、

恵　子　「まっがーれっ！」

何も起きない。

恵　子　「いや違った・・・・・・」

一人ぼそぼそとつぶやいている恵子。

呪文が何だったのか悩んでいる様子。

沈黙。

しばらくたって思い出したかのように笑顔で、

恵　子　「綺麗なドレスになーれー」

前　田　「普通かい！」

思わず馬が突っ込みを入れる。

花　梨　「何て不思議なの？　馬がしゃべったわ！」

パイプ椅子が突然倒れ、ずっこけている保護者達。

会場はさらに大きな笑い声に包まれる。

そして舞台の袖へと消えていく花梨。

しばらく経ち、綺麗なドレスを身に纏い、ガラスの靴を履いた花梨が再び登場する。

花　梨　「綺麗だわ・・・・・・ふふふっ」

うっとりしている花梨。

去ろうとしている恵子。

恵　子　「さぁ、行ってらっしゃい」

驚いた表情の花梨。

花　梨　「えっ・・・・・・一緒に来ては下さらないの？」

恵　子　「とんでもない、舞踏会なんて・・・・・・それにもし私が舞踏会に行けば、私が王子様に選ばれちゃうもの」

くすっと笑う恵子。

恵　子　「私の仕事はあなたの望みを叶えてあげる事だけ。　後、どうするかはあなた次第よ」

花　梨　「でも一人で行くのは怖いわ・・・・・・」

恵　子　「何にも怖がる事なんてないわ」

少し間を置いて、

恵　子　「でもね・・・・・・絶対に守って欲しい約束があるの」

黙って頷く花梨。

恵　子　「今夜の時計の鐘が十二時を打つ前に必ず帰ること。これだけは絶対に忘れては駄目よ」

花　梨　「でも何故？　十二時までに帰る事がそれ程、重要なの？」

恵　子　「あなたは何にも聞かないで。　ただ約束を守ってくれさえすればいいの」

再び魔法の杖を勢いよく振り回す恵子。

恵　子　「しっかりね、シンデレラー」

そういい残して消えていく恵子。

花梨と前田、清水の三人だけ舞台に残っている。

清　水　「シンデレラ様」

花　梨　「これは魔法なの？　こんなの見た事ある？」

清　水　「ええ何度も」

花　梨　「私は初めてだわ」

清　水　「約束をお守りください。　真夜中の十二時までにここを出ないともっとびっくりする事が起こりますよ」

花　梨　「分かったわ」

清　水　「けどその前に僕と夜のお散歩に・・・・・・」

前　田　「まだ言ってやがる・・・・・・気にしないで下せぇ、道はこっちです」

思わず馬が仕切りだす。

花　梨　「馬がしゃべったわ！」

舞台の袖へと消えていく三人。

そして一旦、黒い幕が下りる。

沢山の拍手が会場を包む。

×　　×　　×

○舞台裏

イダセン　「次ーー出雲と池田、準備しろ。　名シーンだからな、練習の成果を見せて来い！」

陸と花梨の背中を後ろから軽く叩いて、送り出すイダセン。

舞台裏に残された花梨と陸。

幕の向こうから聞こえている観客の声。

二人の間に自然と沈黙が流れる。

緊張している様子の花梨。

真っ白なドレスに銀色のティアラを頭に乗せている。

無意識のうちに花梨を見つめている陸。

陸　「（後三日で俺はこの世界からいなくなる・・・・・・・それも本当の思い出を代償に・・・・・・泣いても笑ってもこれが最後。　もう同じチャンスは二度とない。　花梨・・・・・・俺は君の笑顔が見たい。　過去の馬鹿な俺は君を傷つけてしまった・・・・・だからもう泣いたり、悲しんでる姿は見たくない・・・・・・最高の思い出を・・・・・・）」

ゆっくりと幕が開こうとしている。

陸　「よしっ、行こう！」

黙って頷き、陸の後に続く花梨。

完全に幕が開き、近くの観客の顔がはっきりと認識できる。
タイミングを見計らって舞台にでる二人。

○舞台

舞台の上からまぶしい程のライトが二人に降り注ぐ。
二人を迎えるかのように拍手と歓声が沸き起こる。
王子役を演じる陸。

陸　「広間は人が多すぎる」

陸の第一声を聞いて、拍手も歓声も止み、静かになっていく会場。

花　梨　「月明かりに浮かぶ花の庭・・・・・ここの方が素敵ですわ」

陸　「今夜は月もあんなに美しく輝いているし、ここは宮殿の中でも僕が一番好きな場所なんです」

突然、十二時を知らせる鐘が大きな音を立てて鳴り響く。
焦っている花梨。

陸　「どうかしたのですか？」

花　梨　「帰らなければいけないのです」

陸　「突然に何故？」

花　梨　「何故って・・・・・ある人と約束したんです」

陸　「少しくらい遅れてもいいじゃありませんか。　僕はこんなにもすばらしい時間をまだ終わらせたくありません。　それにその人もきっと許してくれますよ」

花　梨　「それは駄目です。その人は絶対に許してくれません。お分かりにならないでしょうけど、その人は・・・・・変わっているんです」

陸　「あなたは不思議な人だ。　まだ名前も教えて下さいませんね？」

花　梨　「つまらない名前ですもの」

陸　「どんな名前でも僕にとって世界で一番美しい名前です」

突然、自分が言わなければならない次の台詞の存在に気づき手が震えだす陸。

無理やりもう片方の手で震えを抑える。

額からは汗が流れ、呼吸も少し荒くなっている陸。

台詞が完全に止まる。

会場に流れる沈黙。

観客が不思議そうな顔をしている。

じっと陸を待っている花梨。

そのままの状態で動かない二人。

陸　「（この瞬間をどれほど待ち望んだのだろう・・・・・・・・・・・たったこれだけの言葉をどれほど言いたかったのだろう・・・・・・・・・・・長かった・・・・・本当に長かった・・・・・・けど・・・・・・それももう終わる・・・・・・・・・・・）」

大きく息を吐いて、自分自身を落ち着かせる陸。

真剣な表情で花梨を見つめる。

ゆっくりと陸の口元が動く。

会場に響く声。

陸　「僕はあなたを愛しています」

変わらず会場に流れている沈黙。

陸の台詞が返ってきてほっと安心している花梨。

陸　「（駄目だ・・・・・・もう止まらない・・・・・・・）」

陸　「今も・・・・・・・そして十年後も・・・・・・・・ずっと・・・・・・・・・・・」

花　梨　「えっ・・・・・・・」

驚き思わず口に出てしまう花梨。

突然、会場がざわざわと騒がしくなる。

○舞台裏

清　水　「何なんだよあの台詞は！　あんなの台本にあったか？」

ステージ衣装をまだ着たまま大声をあげている清水。

他の生徒達も混乱している。

清　水　「くそっ！　やっぱりおかしいぜ、あいつ・・・・・・」

イダセン　「落ち着け！　とりあえず起きてしまったものは仕方がない。　このままアドリブであの二人が上手く誤魔化し切れたらそれでいい・・・・・・しかし、万が一失敗してしまったその時は・・・・・」

舞台を見つめるイダセン。

○舞台

長い沈黙を切り裂いて、再び話し始める陸。

その声は落ち着いていて、けどゆっくりと何かを噛み締めるように、

陸　「帰らなければいけないと言いましたね？　実は僕もそうです・・・・・ある人と約束をしました・・・・・・こんなにもすばらしい時間をまだ終わらせたくありません・・・・・・・・・・だけど時間は残酷にも進み・・・・・・僕を元の世界へと連れ戻そうとするのです・・・・・・・・・・」

何も言わず、ただ視線を下に向けている花梨。

陸　「・・・・・・・・・・・・何も言わないのですね・・・・・・」

恐る恐る陸の方を見る花梨。

花　梨　「怖いんです・・・・・・これは夢で冷めてしまうのではないかと思うと・・・・・・」

へなへなとその場に崩れこむ花梨。

陸　「・・・・・・・・・・・・・・」

言葉を失う陸。

突然の出来事に、舞台を見ている全ての人が驚き、固まっている。

花　梨　「けど何より・・・・・・・それと同じぐらい・・・・・・・・・あなたが・・・・・・・・・・・・・怖い・・・・・・・」

花梨の目から大粒の涙が流れる。

花　梨　「うわぁぁぁぁぁぁあっ！！」

突然、会場全体に聞こえる程の大声で泣き叫ぶ花梨。

涙でくしゃくしゃの顔。

無造作に転がっている銀色のティアラ。

乱れている純白のドレス。

時間が止まったかのように、その光景を見て絶句している人達。

突然、舞台の前に掛けていくイダセン。

マイクを手に持ちながら、

イダセン　「ご来校のみなさま、突然のこのような事態になってしまい誠に申し訳ありません。　生徒の練習の成果を楽しみにわざわざ来て頂かれた保護者の方々には残念なお知らせなのですが、５年４組のシンデレラは私、飯田が担任として誠に勝手ではございますが続行不可能と判断した為、この時点で中断とさせて頂きます。申し訳ございません！」

深々と頭を下げるイダセン。

なおも騒がしくなっていく会場。

それを合図のうように幕が下がっていく。

すぐさま花梨の元に駆けつける女子生徒達。

発作のように泣き続け、声をあげ、一向に落ち着く気配がない花梨。

完全に力が抜けていて一人で立つことも出来ずにいる。

イダセン　「よしっ、池田。　とりあえず舞台からはけるぞ。　おーい男子、ちょっと手伝え！」

米川が走りよってくる。

イダセン、米川、花梨の両腕を自分の肩に回し、何とか起き上がらせる。

イダセン　米川　「せーのっ！」

花梨をほとんど引きずっているような状態で舞台の袖へ移動する。

抜け殻のような表情の陸。

両膝をついて舞台の中央で正座のような体勢になっている。

舞台の袖からまるで人間を見ているようではない冷ややかな目で陸を見る生徒達。

陸に沢山の視線が突き刺さる。

誰も声をかけようともしない。

近づこうともしない。

花梨を舞台裏に連れて行き、立ち上がろうとしない陸を見るに見兼ねて近づいていくイダセン。

目の前で立ち止まり陸に声をかける。

イダセン　「立て」

陸　「・・・・・・」

同じ体勢のまま、全く反応がない陸。

イダセン　「立てっ！」

大きな声を上げるイダセン。

むりやり陸の腕を持って立ち上がらせる。

力が入っていなく、魂が抜けたような人間味を感じられない陸の表情。

そんな陸を見て頬に平手打ちをするイダセン。

ぱーんと大きな音が鳴る。

舞台の袖で驚きながらその様子を見ている生徒達。

何も反応がない陸。

イダセンが手を離すとまたしても力が抜けたように、へなへなとその場で正座のよう体勢になる陸。

あきれた様子のイダセン。

イダセン　「もういい・・・・・勝手にしろ・・・・・・・お前はクラスのみんなの気持ちを踏みにじったんだ・・・・・・それだけは忘れるなっ！」

陸を残して舞台の袖へと帰っていくイダセン。

ただ一人舞台に取り残された陸。

急に舞台のライトも消え陸の姿もはっきり認識できなくなる。

わずかに認識できる陸の表情。

魂が抜かれたように、何かの抜け殻のように、その表情は決して人間味を帯びる事はない。

――つづく――

――第三話　「黒魔術って信じる？」　完――

第４話　何にも焦る事なんかない

メインタイトル　『２０日間のシンデレラ』

○教室（７月２３日）

黒板に大きく描かれた文字。〈さようなら　池田花梨さん〉

光が差し込み教室がオレンジ色に染まっている。

うっすらと遠くで聞こえる蝉の声。

ゆっくりと教壇の上に立ち、生徒を見つめているイダセン。

深刻な表情の生徒。

少し重たい空気が教室内に流れている。

イダセン　「えーみんなも知っての通り今日で池田とはお別れだ。来月からは県外の学校に通う事が決定している。なかなか会う機会も少なくなって寂しくなるとは思うが心配いらない。　池田は立派なこの五年四組の生徒だ。　それは他の学校に行っても何年経っても変わる事はない。　だからみんな笑顔で池田を送り出してやろう」

優しそうな笑顔を生徒に向けるイダセン。

しばらく教室内に沈黙が続く。

コホンと一度咳払いをするイダセン。

イダセン　「じゃあ最後に池田からみんなに挨拶をしてもらおう、池田」

花　梨　　「はい」

よく通る声が教室に響く。

席を立ち上がり、上靴の音を鳴らしながら壇上に向かう花梨。

短めの髪がふわりと揺れる。

自分の横を通り過ぎる花梨を横目でちらりと見る陸。

魂が抜かれたような表情。

陸の脳裏によぎる声。

陸　　「（俺は君の笑顔が見たい・・・・・・）」

イダセンに会釈をして教壇に上る花梨。

姿勢を正してクラスメイトの顔を眺める。

花　梨　　「・・・・・・」

こちらを見ている陸が視界に入る。

表情が少し曇り、話し始めるタイミングを逃してしまった花梨。

イダセンが目で合図を送り、コクリと頷く花梨。

少し前に一歩出て。

花　梨　　「私はこの五年四組が大好きです。ほんっとうに毎日が楽しくて、気がついたらあっという間に一日が終わってるような、そんなクラスでした。飯田先生は俺をいたずらで騙せたら、宿題をなしにしてやるぞーとか言って全然先生っぽくないし」

真剣な表情から笑みがこぼれて、柔らかい印象になっているイダセン。

花　梨　　「恵子は学芸会の魔法使い役の杖を練習中に何度も折っちゃうし、前田は給食のパンを牛乳につけて女子をドン引きさせるし、あと米川の持ってきたファービィは中国語版でまともに会話にならないし、清水はとにかく変態です」

教室にどっと笑いが起きる。

次第に生徒の表情が明るくなっていく。

花　梨　　「そして・・・・・・」

一瞬、陸の方を見る。

瞳を潤ませてまた視線を戻す。

花　梨　　「あと一年で卒業なのに急に転校する事になっちゃって

すごく残念だけど、私にとってこの五年四組で過ごした思い出は一生の宝物です。　みんな・・・・・・本当にありがとう」

涙声になりながらぺこりと一礼をする花梨。

拍手が教室に鳴り響く。

泣いている女子も何人かいる。

イダセン　「よし、みんなからも池田にお礼を言おう。　全員起立！」

椅子が一斉に引かれて、床とこすれる音。

陸もゆっくりと起立をする。

魂が抜かれたような表情。

陸の脳裏によぎる声。

陸　「（過去の馬鹿な俺は君を傷つけてしまった・・・・・・）」

イダセン　「じゃあ一人ずつ並んで、握手とお別れの言葉な。　男子ー握手するからってやましい事、考えるんじゃないぞ」

教室で笑いが起きる。

花梨も笑顔になっている。

長々と花梨の前に列が続き、一人ずつ握手とお別れの言葉を言っていく。

夏　美　「花梨・・・・・私のこと忘れないでね。　絶っ対、手紙書くからね」

握手をしながら花梨に声をかける夏美。

花　梨　「うん、絶対忘れないよ・・・・・」

今にも泣き出しそうな夏美を引き寄せ、耳打ちする花梨。

小さな声でぼそっと、

花　梨　「清水ともうまくいくといいね」

夏　美　「なっ、何、馬鹿なこと言ってんのよ！」

花　梨　「へへっ」

満面の笑顔の花梨。

突然、後ろから空気を読まずに覗き込んで来る清水。

清　水　「どうしたんだ？」

驚く夏美。

夏　美　「ぎゃぁぁぁぁーー」

とっさに清水の顔をビンタして、勢いよく自分の席へと走り抜けていく。

清　水　「向こうにいっても・・・・・・頑張れよ・・・・・・」

夏美にぶたれた頬を押さえながら、鼻水をすすって情けなくしくしくと泣いている清水。

握手をする二人。

花　梨　「どんまい・・・・・清水は最後まで清水らしいね。
心配しなくてもきっと大丈夫だよ」

清　水　「ん？」

不思議そうな顔で自分の席に戻っていく清水。

陸の番が近づいてくる。

自分の前にいた米川が花梨と握手をしている様子を見ている。

魂が抜かれたような表情の陸。

陸の脳裏によぎる声。

陸　「（だからもう泣いたり、悲しんでる姿は見たくない・・・・・）」

花　梨　「次はちゃんと日本語で会話ができるファービィー持ってきてよ」

米　川　「お前、その話いつまで引っ張るんだ」

お互い楽しそうに笑っている米川と花梨。

花　梨　「あと絶対、自分の夢かなえなきゃ駄目だよ。　米川カンパニーの社長になるんでしょ？」

米　川　「あぁ・・・・・・当たり前だ。　池田も元気でな・・・・・・」

花　梨　「うんっ」

自分の席に戻っていく米川。

順番がやって来て、花梨の正面に立つ陸。

魂が抜かれたような表情。

陸の脳裏によぎる声。

陸　「（最高の思い出を・・・・・・）」

花梨を見る陸。

さっきまで笑っていた花梨の表情がガラリと変わる。

何かに怯えているような強張った表情。

陸と目を合わさずに下を向いている。

沈黙。

意を決して話し始める陸。

陸　「か・・・・・・花梨・・・・・・頑張れよ・・・・・・・・」

花　梨　「・・・・・・」

下を向いたまま無表情の花梨。

陸　「お前だったらさ・・・・・・その・・・・・・・誰とでも仲良くなれるし絶対上手くいくよ・・・・・・」

無理やりに笑顔を作る陸。

花　梨　「・・・・・・」

下を向いたまま無表情の花梨。

陸　「お・・・・・・俺のこと忘れないでくれよな・・・・・・」

さっと手を差し出し、花梨に握手を求める陸。

花　梨　「・・・・・・」

下を向いたまま無表情の花梨。

手を差し出さず時間が止まったように固まっている。

握手が返ってこず、とまどっている陸。

下を向いている花梨を真剣な表情で見つめる。

何かにすがるように、救いを求めているかのように。

陸　「（笑ってくれ・・・・・・・・・・・・いつものように笑ってくれ・・・・・・・・・・・・・）」

さらに沈黙。

後ろの男子生徒がしびれを切らしたかのように、

男子生徒　「おいっ！　みんな並んでるんだ、さっさとしろ。　もうすんだだろっ！」

どんっと陸を突き飛ばし後ろから割り込んでくる男子生徒。

ふらふらと倒れそうになりながら教室の後ろにやられる陸。

無表情でなおも花梨の様子を見ている。

男子生徒　「なぁ、池田。　これ俺の住所なんだけどよかったら手紙のやりとりしないか？」

一人、花梨に話し続けている男子生徒。

下を向いたまま無表情の花梨。

全く男子生徒の話が聞こえていない様子。

誰にも聞こえないぐらい小さな声でぼそっと、

花　梨　「・・・・・・・・・・・・・・忘れるわけ・・・・・・・ないじゃない・・・・・・・」

男子生徒　「えっ？　何だって？　だからさぁ池田の住所も教えて欲し・・・・・・」

ざわざわと騒がしい教室。

けどどこかしんみりともしている。

もう花梨と話し終わり自分の席に戻っている生徒。

花梨と話す順番を待って、列に並んでいる生徒。

泣いている生徒。

後ろの黒板を背にもたれ掛かり、自分の席に戻らずただ突っ立っている陸。

その陸の様子を気味悪そうに冷めた目で見ている生徒。

カーテンの隙間から差し込む光。

教室は何も変わらずに一層オレンジに包まれていく。

サブタイトル　『第４話　何にも焦る事なんかない』

○陸の家　玄関

がちゃりとドアを開けて中に入ってくる陸。

よろよろと壁にぶつかり、何とか自分の部屋への階段にたどり着く。

台所から聞こえてくる母の声。

母　「ん？　陸ー帰ったのかい？」

陸　「・・・・・・」

返事をせず階段を上っていく陸。

○陸の部屋

全ての力を使い果たしたかのようにベッドに倒れこむ陸。

×　　×　　×

真っ暗な陸の部屋。

窓からも光が差し込まず、すっかり外も暗くなっている。

ゆっくりとベッドから起き上がる陸。

倒れそうになりながら勉強机の椅子に座る。

勉強机の上に置いてあるライトのボタンに手を掛ける陸。

ピッと音が鳴り、真っ暗な部屋に白色の明るい光が点る。

光に照らされる陸の表情。

無表情で全く生気を感じられない。

机の上に置いてあるノートを見つけ機械のようにパラパラとめくり始める。

ノートに書かれている7月18日の日記、

陸（語り）「7月18日。　今日で日記を最後にしようと思う。もう学芸会に向けて出来る限りの練習はしてきた。　花梨の演技もすっかり板についてきて、俺もやっと安心して自分の演技に集中できるようになった。　俺は現実に戻った時、今の思い出が上書きされて本当の思い出を失ってしまう。　けど明日はあの頃に負けないぐらい最高の思い出を作れるって・・・・・・」

急にノートを勢いよく閉じる陸。

目を見開き、手はぷるぷると痙攣しているかのように震え、その両手で自分の耳をふさぎ、さらに体を震わせながらこの上ないぐらい大きな声で、

陸　「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

静かな部屋に陸の叫び声が響く。

壊れだす陸。

壁を全力で殴り、大声を上げながら頭を打ちつける。

ふらふらしながらも暴れ続け部屋にあるものを無茶苦茶になぎ倒していく陸。

陸　「はぁ・・・・・・はぁ・・・・・・はぁ・・・・・・」

息を切らしその場に座り込む陸。

勉強机の上にあったものはあちらこちらに飛び散り、棚に載せていた漫画や本もほとんど倒れ、どこを見渡しても部屋の中は嵐が過ぎていったかのようにぐちゃぐちゃになっている。

窓からは月の光が差し込んでいて部屋には不気味な明るさを感じられる。

無造作に床に転がっている日記を見つける陸。

ゆっくりと立ち上がり、日記を乱暴につかみ部屋を出て行く。

○台所

息を荒げながら台所に入って来る陸。

目は血走っていて殺気立っている。

ふらふらと真っ暗な台所をさまよいながら、食器棚の引き出しを勢いよく開ける。

中からチャッカマンが現れる。

急に表情が少し落ち着く陸。

すっとそのチャッカマンをポケットに入れて台所を出て行く。

○陸の家　玄関前

メラメラと煙が上がっている。

真っ黒な闇の中に赤々と燃える炎。

陸の日記が書かれていたノートが、炎に迫られているかのように燃え続け、次第に灰になって原型を失っていく。

その場にしゃがんでチャッカマンをノートに向けている陸。

カチッとチャッカマンの発火される音が聞こえる。

何度も何度も不気味に繰り返される。

炎に照らされる陸の表情。

気が狂ったかのように笑っている。

陸　「・・・・・・俺の思い出・・・・・・・俺の思い出・・・・・・・俺の思い出・・・・・・・・俺の思い出・・・・・・・・俺の思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ぼそぼそとつぶやき続ける陸。

全く感情を感じられない。

もくもくと激しくなっていく煙、燃え上がる炎。

急に玄関のドアが大きな音を立てて開く。

飛び出てくる母。

目の前の光景に驚き、再び家の中へと戻っていく。

×　　×　　×

慌てながら大きなバケツを持って飛び出てくる母。

息を切らして、陸の方に近づき、

母　「陸ーーーーーーあんた何やってんの！！！！」

火をさらにカチカチと点け続けている陸の体を突き飛ばし、バケツの中の水を勢いよく火の元にぶっかける。

じゅーっと音が鳴り辺りは煙で真っ白になる。

しばらく経って煙も晴れ、火の元は完全に消えている様子。

地面に尻を突いたままの陸。

その陸を驚いたような表情で見つめる母。

元々鳴いていたであろう鈴虫の鳴き声がちゃんと聞こえ始め、再び外には元の夜の静けさがやってくる。

○陸の部屋

母　「一体どうしたって言うの！！　陸、答えなさい！　どうしてこんなに部屋は無茶苦茶になってるの？　どうして火なんか点けたりするの？　ねぇ・・・・・・陸ーーー」

陸の肩を揺さぶり大声を上げている母。

次第に表情が崩れ涙を流している。

人形のように何も言わず、ただ揺さぶられている陸。

ふと視線を下に向ける。

床には目覚まし時計が転がっていて針は十二時前を指している。
急に感情を取り戻したかのように落ち着いた表情になる陸。
泣き崩れている母。
優しい目で母を見つめて、
陸　「・・・・・・・・・・・もう時間だ・・・・・・・何年経っても馬鹿な息子でほんとごめんな・・・・・・おかん・・・・・・」
母　「えっ、陸！　あんた何言ってんのよ？」
不思議そうな顔をしている母。
床に転がった時計がちょうど十二時を指す。
穏やかな笑顔を母に向ける陸。
その瞬間、激しい胸の痛みに襲われる陸。
陸　「うっ・・・・・・」
うつろうつろな目がゆっくりと閉じていく。
意識を失う陸。
目を見開き言葉を失っている母。

母　「陸・・・・・・・・・・・・陸ーーーーーーー」

母の声が陸の部屋に響く。

○真っ白な世界

陸の意識がゆっくりと目覚める。

周りは真っ白で何も存在しない。

何故か体が宙に浮いている感覚がある。

流れに身をまかせている陸。

表情は無表情のまま。

急に目の前からものすごい速さで何かが飛び込んでくる。

激しい音とともにそれらは陸の両手足につかまり、強く引っ張る。

よってたかって引っ張る。

機械のようにゆっくりと視線を体が引っ張られている方に向ける陸。

およそ十人程の数の少年達。

その顔は全て陸と同じ顔。

同じように無表情。

さらに体が千切れそうなぐらい乱暴に引っ張る。

されるがままの陸。

表情は無表情のまま。

しばらくすると再び目の前から何かがやってくる。

今度はどこまでも不気味にゆっくりと。

ふわふわと浮かんでようやく陸のすぐそばで止まる。

不自然なぐらい背筋がぴんと伸びた気をつけの姿勢。

それは背も伸び、顔もりりしくなった、けれど無表情の大人の陸。

目の前に立ちふさがる大人の陸。

よってたかって体を引っ張り続ける自分と同じ少年の陸達。

大勢の陸に囲まれる陸。

急に目の前の大人の陸が気味悪く笑い出す。

それを合図のように体を引っ張る少年の陸達も気味悪く笑い出す。

一人だけ無表情の陸。

次の瞬間、全ての陸の顔がぼろぼろと崩れ落ちていく。
大人の陸も、体を引っ張る陸たちも、そして本当の陸も。
真っ白な世界に陸の顔の欠片たちが、気味悪く漂っていく。
どこまでもゆらゆらと。

○一人暮らしの陸の家　寝室（２０１０年　現在　）

陸　「はっ！！」

顔は青白く、目を見開き、何かに怯えたかのように体を震わせながら我に返る陸。
体はぐったりと倒れたまま。
すっかり大人の姿に戻っている。
視界は蜃気楼のようにどこかぼやけて、かすかに認識できる視線の先にはロウソクの火がゆらゆらと揺れている。
ゆっくりと体を起こし、何とかあぐらをかく姿勢になる陸。

陸　「はぁ・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・・・」

激しく息が乱れている。

強張った表情のまま、あたりをきょろきょろと見渡す陸。

日付が書かれた半紙、壁際に寄せられた小さな机、乱暴に置かれているケータイ。

儀式が行われたであろう形跡がしっかりと残っている。

服ダンスを見つける。

目の色を変え、床を這いずる何かの生き物のように必死にそこまで移動する陸。

服ダンスのドアに手をかけ、ごくりとつばを飲む。

手がぷるぷると震えている。

ますます荒くなる陸の息づかい。

そのままの勢いでドアを開ける陸。

ドアの反対側についている大きな鏡が姿を現す。

げっそりとして青ざめた顔の大人の陸が写っている。

力が抜けたかのようにその場に崩れる陸。

土下座をするように床に手をつき、頭をだらんと垂らしている。

がくがくと震える陸の口元。

そこから発せられる、喉がかれたような声。

陸　「俺は・・・・・・・・・・・・・・誰だ・・・・・・・・・・・・・・」

ロウソクの火は少しずつ弱弱しくなり始め、小さな部屋に再び闇が訪れようとしている。

○住宅街（翌日）

ここからの映像は人も景色も全て白黒になる。

ぎらぎらと日差しが強い日中。

セミが活発に鳴き続け、空には大きな入道雲が出ている。

一人、ふらふらになりながら歩いている陸。

額から流れる汗。

どんよりとした顔。

今にも倒れそうになっている。

陸　「（・・・・・・・・・・・・・・俺はどこに向かっているんだろう・・・・・・・・・・・・・・）」

歩き続ける陸。

まるで死体が動いているように、生気がない。

住宅街の角を曲がった所で、勢いよく何かと衝突する陸。

弾き飛ばされ尻餅をつく。

声　「いってー」

急に耳に入る大きな声。

声のする方に目をやるとカッターシャツと黒いズボンを穿いた、おそらく学生であろう

男の子が自分と同じように尻餅をついている。

地面に転がっている学生カバンを拾い立ち上がる男子学生。

陸と目が合う。

すると心配そうな顔で一気に陸のそばに駆け寄ってくる。

男子学生　「大丈夫ですか？　お怪我はありませんか？」

そう言いながら陸に手を差し出す男子学生。

その手をとりながら起き上がる陸。

陸　「あぁ・・・・・・」

小さい声でぼそっとつぶやく。

真っ白なカッターシャツがまぶしいぐらいきらきらと輝き、よく見ると女性に間違えそうな程、容姿の整った男子学生。

さっきまで心配していた表情が一変して、満面の笑みを陸に向ける。

それを見てなぜか驚いている陸。

男子学生　「あー怪我がなくてほんと良かった・・・・・・すいません・・・・・・僕、すごく急いでしまってて・・・・・・・・・・・・あっ、やべっ遅刻する！」

ポケットから急いでケータイを取り出し時間を確認している男子学生。

すぐさまぺこりと礼儀正しく陸に一礼して、

男子学生　「ほんとすいませんでしたっ！　では僕はこれで失礼します。　また機会があればどこかで」

にこっと笑い、大急ぎで走り去っていく男子学生。

陸　「・・・・・・・」

再び歩き出す陸。

○恵子の家　玄関前

普通の住宅街の中、一際異彩を放つ大豪邸。

ぼーっと突っ立って恵子の家を見つめる陸。

恵子の言葉が脳裏によぎる。

恵子の声　「元の世界に戻ってきた時、恐らくあんたは二つの記憶を持っている。　けど時間が経つごとに元々あった本当の記憶は薄れて、最終的には完全に忘れてしまうわ。　それがこの黒魔術の呪い。　犠牲よ」

急に何かに怯えるような表情の陸。

陸　「呪い・・・・・・俺の呪い・・・・・・・」

恵子の家のインターホンを押そうとする陸。

しかし途中で、手が振るえ断念する。

またしてもふらっと倒れそうになる陸。

それでも再び歩き出す。

○小学校　校門前

力が抜けたように金網にもたれ、地べたに座り込んでいる陸。

入道雲がどこまでも続く空をぼーっと眺めている。

陸　「（忘れる・・・・・・２０日間の思い出を忘れる・・・・・・忘れる・・・・・・クラスが初めて一丸となった学芸会を忘れる・・・・・・忘れる・・・・・・花梨に転校しやがれーって言った事を忘れる・・・・・・書き換えられる・・・・・・親友を・・・・・・清水を失った・・・・・・書き換えられる・・・・・・俺のせいでクラスの学芸会を台無しにした・・・・・・書き換えられる・・・・・・花梨を傷つけた・・・・・・書き換えられる・・・・・・花梨を傷つけた・・・・・・・・・・）」

絶望した顔をしている陸。

陸　「（俺は結局、同じ過ちを何度も何度も繰り返している・・・・・・・・・・・・黒魔術を使っても・・・・・・何をしても・・・・・・・・・・・・この先もどうせ・・・・・・・・・・）」

抜け殻のようになっている陸。

その場から動かない。

目がだんだんとうつろになっていく。

陸　「（もう・・・・・・生きてるのか・・・・・・死んでるのかさえ・・・・・・分からない・・・・・・世界が・・・・・・灰色に見える・・・・・・・・・・・・）」

しばらく経って急に声が聞こえる。

声　「出雲じゃないか！　こんな所でなにしてる？」

驚いた顔で声のするほうをゆっくり見る陸。

少し老けた印象を受けるイダセンが立っている。

○イダセンの家

イダセン　「まぁ、遠慮せずにあがれ」

頭を軽く下げ家にあがる陸。

ふすまを開けて上品な和室に招き入れるイダセン。

テーブルをはさみお互い向き合うようになりながら、イダセンが先に座布団に座り、その後に陸も座る。

急にふすまが開いてイダセンの奥さんであろう女の人が、麦茶を二人分持ってきてくれる。

イダセン　「おぉ、すまんな。　ここに置いといてくれ」

ゆっくりとテーブルに麦茶を置く奥さん。

うれしそうな顔をしながら、

イダセン　「驚いたよ、たまたま小学校の前を通りかかったら彼がいたんだ。　昔の俺の生徒でね、問題児だったがこうして久しぶり

に会うと嬉しいもんだな」

つられるように奥さんもにっこり笑い、

奥さん　「そう・・・・・・ゆっくりしていってね」

そう陸にやさしく声をかける。

陸　「はい・・・・・・」

小さくつぶやくように返事をする陸。

部屋を出て行く奥さん。

静かな空気が流れる。

イダセン、首をかしげながら、

イダセン　「どうしたんだ出雲？　久しぶりに会ったってのに元気がないじゃないか」

不思議そうな目で陸を見るイダセン。

ゆっくりとイダセンの方を見て、

陸　「先生・・・・・・その・・・・・・悩みを聞いてもらっていいですか？」

イダセン　「何だ、お前らしくもない。　さっさと言ってみろ」

意を決したように話し始める陸。

陸　「俺・・・・・・駄目です・・・・・・ほんと駄目な人間です・・・・・・取り返しのつかないひどい事をしました・・・・・・それもその時、痛いほどわかったはずなのにまた同じ事を繰り返してる・・・・・・・・・・・・一生忘れられないくらいの後悔が残りました・・・・・・けど俺、不安なんです・・・・・・その後悔がこれから先、自分を呪いのように苦しめ続けるんじゃないかって・・・・・・・・・・何をやってもまたこりずに同じような事をしてしまうんじゃないかって・・・・・・・・・・俺・・・・・・自分が前に進めているのか分からない・・・・・・・・・・怖くて・・・・・・怖くて・・・・・・仕方がないんです・・・・・・・・・・」

表情がどこまでも暗くなっていく陸。

沈黙。

ゆっくりと話し始めるイダセン。

イダセン　「何年前だったかな・・・・・・佐々木からも相談を持ちかけられていたんだ・・・・・・」

驚いた顔をしている陸。

イダセン　「弟を助けて欲しいと・・・・・・何でも両親を失くしたショックで感情を失ってしまったんだとか・・・・・医者に診せても原因は分からない、精神的なカウンセリングなども受けたそうだが全く効果はない。　俺も何か方法はないかと何度も佐々木の家に足を運んだよ。　けど駄目だった・・・・・・おもしろい話を

しても悲しい話をしても表情は何も変わらず返事さえも返ってこない。　それが数年続き俺も正直もう無理だと半ば諦めていた・・・・・・」

一瞬遠い目をするイダセン。

麦茶の中にある氷がカランと音を立てる。

黙って話を聞いている陸。

一息ついてゆっくり陸を見つめながら、

イダセン　「先日、とある本屋に寄ってな・・・・・・ついつい一冊の本を買ってしまった。　それも普段、全く買わないような絵本だ・・・・・・・・・・・・俺は何を思ったんだろうな・・・・・・その絵本を佐々木の弟に見せたんだ・・・・・・」

真剣な表情の陸。

イダセン、やさしい顔をしながら、

イダセン　「そしたらな・・・・・・・笑ったんだよ・・・・・・・・・・・・綺麗でまだ幼い少年のような顔を初めて俺に見せてくれた。　佐々木はわんわん泣いてたな。　医者もこんな事は初めてだって目を丸くして驚いてた・・・・・・」

言葉を失っている陸。

急にその場を立ち上がるイダセン。

不思議そうな顔をしている陸。

イダセン　「少し待っていてくれないか？」

そう言うと部屋を出て行くイダセン。

×　　×　　×

イダセンが戻ってくる。

ゆっくりと座り、テーブルの上に何かを乗せる。

それはまだ真新しい絵本。

イダセンが陸を見つめる。

どこまでも暖かく、どこまでも優しい目で。

イダセン　「これはお前が描いたんじゃないのか？」

表紙には陸が小学生の頃、ノートに描いていたのと同じ恐竜の絵が描かれている。

タイトルの文字。

（一人ぼっちの恐竜）

体を震わせている陸。

沈黙。

恐る恐るイダセンの方を見ながら、

陸　「はい・・・・・・・・・・・・俺が描きました・・・・・・・・・・・・実は・・・・・・・・ある事がきっかけで中学の頃から絵本作家に憧れるようになったんです・・・・・・高校を卒業して何度も何度も出版社に作品を持っていきました・・・・・・そしたら去年、遂に発売できる事が決定したんです。一部の本屋なら置いてくれるって。　けど結果は全然売れなくて沢山の在庫ばかり抱えてしまった・・・・・・・売り上げも人に自慢できるようなものではありません・・・・・・・周りは有名ないい会社に就職して、給料も沢山もらってる・・・・・・その中で自分は何をしてるんだろって・・・・・・こんな給料も不安定で先が全く見えない事が仕事と呼べるんだろうか？　今、何をしてるんだって聞かれた時に悔しいけど絵本作家って事が言えなかった・・・・・・だから俺は自分がしている事を隠しました・・・・・・バイトして適当に過ごしてるって・・・・・・確かに周りからは変な目で見られたけど、何かその方が気持ち的に楽だったんです・・・・・・」

必死で何かを堪えている陸。

イダセン、しっかり陸の目を見ながらゆっくりと話し始める。

イダセン　「一生忘れられない程の後悔は確かに苦しい。　この先の自分が本当に正しいのか不安になるし、やり直せるもんならやり直したいとも思う。　けどな・・・・・・それは一見、ただ辛くて苦しいだけのように思えるが、見方を変える強さを持てばプラスになるんだよ。　後悔があるから今の自分があるんじゃないか。出雲、目を覚ませ！　お前は立派な事をしたんだ。　医学でも治ら

ない奇跡のような事をやってみせたんだ！　自分が心からしたいと思う事をすればいいじゃないか！　胸を張ってやればいいじゃないか！　そんな周りの目を気にする程、出雲陸は繊細な奴だったのか？　違うだろ！」

体をぷるぷると震わせる陸。

イダセン　「何にも焦る事なんかない」

さらに体を震わせる陸。

イダセン、陸の全てを受け入れるように最高の笑顔で、

イダセン　「お前はちゃんと前に進んでるんだよ」

白黒になっていた映像が急に色を帯びて人も景色も全てカラーになる。

陸、全身の力が全て抜けたようにその場に崩れる。

陸　「先生ーーーーーーーーっ！！！！」

赤ん坊のように大きな声をあげて泣く陸。

大量の涙が陸の目から流れる。

何度も何度も溢れていく。

今まで堪えていたものが全て放出されるようにきらきら綺麗に輝いて。

うんうんと頷きながらながら温かい笑顔を陸に向けるイダセン。

○一人暮らしの陸の家

机に座り真剣な表情ではがきに文字を書いている陸。

イダセンの声が脳裏によぎる。

イダセンの声　「出雲・・・・・・すまなかったな。　学芸会の時、お前をぶってしまって・・・・・・あれから先生も考えたんだ。もしかするとあの行動はお前なりの何かがあっての事だったのかもしれないと・・・・・その後、お前は学芸会の話題があがる度に窮屈な思いをしてたんじゃないかと思う・・・・・・そこで提案なんだが同窓会を開かないか？　それも出雲・・・・・・お前が幹事をしてみんなを集めるんだ。　五年四組の絆を再び取り戻そう。失敗したら立ち止まるんじゃなくてまた歩き出せばいい。　今のお前になら分かるだろ？」

何かに後押しされるように黙々と文字を書き続ける陸。

すぐ側にはもう書き終えた大量のはがき。

冒頭には、

（同窓会のお知らせ）

と書いてある。

陸　「（忘れるのが怖くて本当の思い出をどこかに書いて残しておこうとも考えた・・・・・・もしかするとそれを見た時また思い出すかもしれないって・・・・・・けどやめた。　もう俺は恐れない、今の自分と向き合って行こうと思う。　これからどうするか・・・・・・それが一番大事なんだ）」

陸の表情はどこか希望に満ち溢れ生き生きとしている。

○とある高校の教室

男子生徒　「おい、翔太！」

窓の外を眺めていた翔太、声を掛けられ驚いたように我に返る。

男子生徒　「大丈夫か？　まだ寝ぼけてるだろ？」

翔　太　「ちょっとね」

男子生徒　「遅刻しといてよく言うぜ」

にやにや笑う男子生徒。

翔　太　「ごめん、朝から人とぶつかっちゃってさ」

男子生徒　「ふーん、あっ！　また授業さぼって変なもん描いてやがる。　ところでこの恐竜なんなんだ？　確か前も描いてたよな？」

翔太のノートには陸の絵本と同じ恐竜が。

やさしい笑顔で、

翔　太　「僕の大切な絵なんだ」

○駅前の居酒屋　入り口前（二ヶ月後）

もうこの時点で陸の本当の思い出は完全に忘れさられて、新しい思い出に書き換えられている。

辺りは暗く、一人居酒屋の前で待っている陸。

陸　「（夏も終わりだな・・・・・・）」

電車の音が聞こえる。

時計を確認する陸。

（１８時２０分）

同窓会集合時刻の十分前。

陸　「（やっぱり誰も来ないか・・・・・・そりゃそうだよな・・・・・仲の良かった奴らも今じゃほとんど疎遠になってるし、自分達の思い出をぶち壊された張本人から同窓会の誘いが来るんだ・・・・・・行きたい訳ねぇよな・・・・・）」

ため息をつき途方に暮れている陸。
うな垂れる。
陸の死角になっている所に大勢の人が。
その瞬間、声がかかる。
声　「陸ーー」
驚き後ろを振り返る陸。
そして言葉を失う。
五年四組の生徒ほとんどが集合している。
その中にはイダセン、米川、夏美、恵子、前田、そして清水の姿も。
みんな笑顔で陸の方を見ている。
体が震えて泣きそうになる陸。
陸　「みんな・・・・・・」
○居酒屋　店内
ほんのりと暖色系のライトが点いて薄暗い印象の店内。
大きなテーブルを囲む五年四組の生徒達。

あまりにも人数が多いため、ほとんど貸切状態になっている。
テーブルにはすでにセッティングされた豪華な料理と沢山のビール。
緊迫した空気が流れている。
一人、立っている陸。
乾杯の合図を待っているみんなの顔を見渡す。
何かをかみ締めるようにしっかりと。
しかし花梨の姿が見えない。
少し表情が曇る陸。
真剣な表情のイダセンと目が合う。
目で合図を送るイダセン、コクリと頷く陸。
気にせず話し始める陸。
陸　「今日はみんな集まってくれて本当にありがとう。　正直誰も来てくれないと思ってた・・・・・すぐに乾杯をしたいのは山山なんだけど一旦グラスを置いて、少し俺の話を聞いてくれないか？」
あたりは静まり返る。

さらに緊迫した空気。

真剣な表情で陸を見つめる生徒達。

ゆっくりとドアが開く。

花　梨　　「ごめーん、遅くなっちゃって」

夏　美　　「しーっ」

遅れて入ってくる花梨に静かにするよう合図をする夏美。

思わず口を押さえる花梨。

陸は花梨がいる事にまだ気づいてない。

荷物を下ろし、一人立っている陸を見つける。

真っ直ぐ陸を見つめる花梨。

陸　　「みんな・・・・・・校内学芸会を覚えているよな？
夏にやった五年四組のシンデレラ・・・・・・そう・・・・・・俺がぶち壊してしまったシンデレラだ・・・・・・遅くまで学校に残って何度も何度も練習したよな・・・・・・最高の思い出を作ろうとみんなで頑張ったよな・・・・・・けど俺の勝手な行動で劇はまさかの中断・・・・・・あんなに練習したのに結果を出せず悪い思い出だけが残ってしまった・・・・・・・・・・・・俺は自分がしてしまった事の重みにとても耐えれなくて、次第に俺の側から離れていくみんなに何一つ声を掛けれなかった・・・・・・今さら謝っても許してもらえると思ってない・・・・・・独り善がりだって分

かってる・・・・・・けど・・・・・・・・・・・・・・・・自分が許せない・・・・・・」

急に土下座をする陸。

手を突き頭を深々と下げる。

陸　「本当に・・・・・・・・・・・・・・・すいませんでした！！！！」

陸の声が響く。

苦悶の表情。

静かな空気、何も言わない生徒達。

陸のすぐ後ろから清水が忍び足でやってくる。

周りにしーっと合図を送りながら、突き出た陸のお尻に勢いよくカンチョーする。

陸　「・・・・・・ッツ」

声なき声をあげ飛び上がる陸。

すぐ後ろを振り返り、

陸　「何しやがる清水てめぇ！」

清水がにやにやと笑っている。

思わず清水に昔のような態度をとった為、あっとなる陸。

清　水　「その気持ちだけで十分だよ。　それにもうみんな怒ってない。　なぁ、みんな？」

やさしい笑顔で頷き、陸の方を見つめる生徒達。

驚いた表情の陸。

再び清水の方を見る陸。

真剣な表情で言いにくそうに、

陸　「なぁ・・・・・・清水・・・・・・」

陸の話を止めるように首を横に振る清水。

何も言わずに手を軽く握り陸の前に向ける。

はっと何かに気づき応えるように頷く陸。

同じようにして清水の手にコツンと当てる。

照れ臭そうにニコッと笑う陸と清水。

前　田　「おーい幹事！　そろそろ乾杯の挨拶してくれよーもう待ちきれないよー」

それを聞いて笑い出す生徒達。

ようやくやわらかい空気が流れ始める。

グラスを持ち、再びその場に立ち上がる陸。

陸　「あっ、いけね！　それじゃあみんなお待たせしましたっ。　最高のクラス、五年四組の再会にかんぱーい！」

一同　「かんぱーい」

グラスがカンッと当たる音が鳴り、あたりは一斉に騒がしくなる。

×　　×　　×

清　水　「その時だよ！　前田が俺の水筒に入ってるお茶をがぶがぶ飲んだんだ。　俺は大丈夫か？　って聞いたよ。　そしたらすごく満足した顔で美味しいって言うんだ。　前田ーーあん時のお茶、前の日に水筒を忘れて帰ったから多分腐ってたぞー」

前　田　「何で今頃、暴露するんだよー遅いよっ！」

清　水　「どうだ？　腹痛くならなかったか？」

前　田　「覚えてないよ！」

前田も清水も顔が赤くなっている。

みんな酒に酔って楽しんでいる様子。

その場に立ち上がり大きな声をあげている清水。

清　水　「よーし、じゃあ暴露大会しようぜーーお題は今だから言えるあの頃の事！」

何やらがやがやと盛り上がっている。

みんなそれぞれ席を移動した為、取り残されている陸。

一人でビールを飲んでいる。

恵　子　「隣いいかしら？」

陸　「おぉ、恵子か？　どうぞ」

陸の隣に座る恵子。

恵　子　「イダセンに聞いたの。　あの絵本はあなたが描いたって事。　本当に感謝しているわ。　弟を救ってくれてありがとう・・・・・」

陸　「俺は何もしてない・・・・・・それよりあの絵本はそこまで明るいような物語じゃなかったと思うんだ・・・・・なのにどうしてだろう？」

恵　子　「多分、どこかあの子なりに自分の心境と重なる部分があったんじゃないかしら」

陸　「そっか・・・・・・」

陸　「ってかお礼を言うのはこっちの方だ。　お前に黒魔術を・・・・・・」

はっとなり何かを思い出そうとする陸。

首をかしげながら、

陸　「俺、お前に黒魔術を教えてもらったよな？　その後、黒魔術を何かに使ったってのは覚えてるんだけど、その何かが思い出せないんだ・・・・・・恵子、お前は覚えてないか？」

恵　子　「えぇ・・・・・・確かに黒魔術は教えたけど・・・・・・何でだったかしら？」

考え込んでいる恵子。

諦めたように、にこっと笑って、

恵　子　「もういいじゃない。　ここにあるのは今だけよ」

わいわい盛り上がってる方に視線を向ける恵子。

立ち上がって大きな声で話している米川。

米　川　「実はイダセンのバイクに勝手に乗ったり、叩いたりしてたのは僕です。　すいません！」

イダセン、笑いながら、

イダセン　「米川ーー罰としてお前が社長になったら先生に高級な

バイクを買う事。これ絶対な」

生徒達の笑い声が響く。

みんな満面の笑みで、懐かしさに浸っている。

その光景を見て自然と笑顔になる陸。

陸　「そうだな」

恵子と陸が話している様子を見ている、花梨と夏美。

夏　美　「ほらっ花梨、まだ陸と話してないんでしょ」

花　梨　「いや何か恵子と話してるみたいだし、また後で・・・・・・」

夏　美　「いいから行ってきなさいっ！」

花梨をどんっと後ろから突き飛ばす夏美。

わっとなり陸の席の側まで近づいてしまう。

とっさに恵子と目が合う花梨。

ふーっと一息つく恵子。

恵　子　「どうやら私はお邪魔みたいね・・・・・・そろそろ失礼するわ」

席を立ち上がりすたすたと戻っていく。
その先には、その場に突っ立っている花梨が。
恵子、すれ違い際に小さな声でぼそっと、
恵　子　「頑張ってね・・・・・・シンデレラ」
一瞬、驚くがすぐに笑顔になる花梨。
ゆっくりと陸の席に向かっていく。
こちらに向かってくる花梨に気がつく陸。
驚き固まっている。
すぐ側までやってきて陸に声をかける花梨。
花　梨　「久しぶり・・・・・・」
陸　「あぁ、久しぶり・・・・・・来てくれたんだな・・・・・・」
花　梨　「うんっ・・・・・・あっ、隣いい？」
ほんのりと漂う香水の匂い。
髪は最後に見た小学生の時より、かなり伸びて少し茶色味がかかっている。

顔はよく見たら分かるぐらいのメイクがうっすらとされていて、どこか大人びた印象を受ける。

陸　「何か・・・・・・変わったな」

花　梨　「そうかな？　自分では全然分からないや。　私は陸のほうが変わった気がする」

陸　「変わって・・・・・・・いや・・・・・・・」

言うのを途中でやめて、急に真剣な表情になる陸。

何かを考えている様子。

次第に笑みを浮かべ、

陸　「少し変わったのかもな」

陸の目を見ながらうんうん頷いている花梨。

花　梨　「そうなんだ・・・・・・今は何してるの？」

何も迷いがないような自信に満ちた表情の陸。

少年のように生き生きと瞳を輝かせて一言。

陸　「絵本作家だよ」

――つづく――

――第４話　「何にも焦ることなんかない」　完――

最終話　私の本当の気持ち・・・・・・

メインタイトル　『２０日間のシンデレラ』

○５年４組　教室（２０００年　過去　陸が元の世界に戻って二日後）

こないだまで花梨が座っていた席を眺めている陸。

今はもう誰も座っておらず、机と椅子だけが物悲しくぽつんと置かれている。

はーっと大きなため息をつく陸。

黒板の前ではイダセンが国語の授業をしている。

窓の外を見つめる陸。

どこまでも続いていきそうな雲ひとつない青空。

どこかうわの空の陸。

陸　「（朝起きたらおかんが泣き付いていた。　何度も俺の名前を呼んで・・・・・・何でも丸一日寝続けてたからもう死んでると思ったって・・・・・・ったく気持ち悪いっての・・・・・・けど不思議なんだよなー。　何だか頭がぼーっとするし、ここ最近の事なんか全く覚えてないし・・・・・・自分でも馬鹿な事、言っ

てるって分かってる。　けど本当なんだ・・・・・・・まぁこんな事、説明しても誰も信じてくれないと思うけど・・・・・・・それに今は7月25日だって？　学芸会は終わってるし花梨ももう転校しちゃってるじゃん・・・・・・最悪だ・・・・・・ほんと最悪だ・・・・・・・・ったくのん気になにやってたんだよ俺は！　・・・・・・・・・・・・結局・・・・・・好きだって告白できなかったなぁ・・・・・・・・・」

再びため息をついてさらに表情が曇る。

陸　「（それにしても・・・・・・何で警察が家にやってきたんだろ？　俺のこと犯罪者みたいな目で見ながら、何で部屋が散らかってるのかとか、何で火をつけたのかとか、そんなこと聞かれても知らねーっつうの。　あーっ、もう全く訳がわかんねぇ・・・・・・それに俺が学芸会をぶっ壊したってどういう事だよ？　そんな事あるわけねぇじゃん・・・・・・あんなに練習したんだぞ・・・・・・最初はみんで俺を騙してるんだと思ってた・・・・・・けどいつまでたっても俺に対する態度は冷たいし、何か無視されてるっぽいし・・・・・・・・・・・・・・・てかその話がもし本当だとしたら、俺は未だに花梨に勘違いされたままなのか？」

遠い目をする陸。

陸　「（・・・・・・・・・・・・・戻りてぇな・・・・・・・花梨が転校したあの日に・・・・・・・・ちゃんと笑顔で送り出してやりたかった・・・・・・・面と向かって好きだって事を言いたかった・・・・・・突然未来のロボットがやってきてタイムマシンにでも乗せてくれれば、もう一度あの日に戻ってやり直せるのに・・・・・・）」

遠くの景色を眺めてふっと一人笑う陸。

陸　「そんなことある訳ないか・・・・・・」

○東京　一人暮らしの花梨の家（２０１０年　同窓会二ヶ月前）

真っ暗な部屋。

かちっと音が鳴り部屋に明かりが点る。

花瓶に入った花が綺麗に飾られている。

どさっと床には鞄を、小さめのテーブルにはコンビニの袋に入ったパンと牛乳を置く花梨。

そのままベッドにばふっと倒れこむ。

遠くで電車の音が聞こえる。

長めの髪が乱れる。

ゆっくりと顔を横に向ける花梨。

ベッドの隅に追いやられたテディベアがこっちを見ている。

ぼーっと視線をそちらに向けて、テディベアの頭をぽんぽん触っている花梨。

急に何かを思い出したかのように起き上がる。
部屋の隅にある本棚の前に立ち何かを探している様子。
一冊の本に手をかける。
本のタイトル。
（フラワーデザイナー資格検定テキスト）
その本を取り出そうとした時、あるものの存在に気づく花梨。
花　梨　「あ・・・・・・」
視線の先には少し古びてしまった五年四組の文集が。
手に取った本を元に戻し、代わりに文集を取り出す花梨。
ベッドを背にもたれ掛かるようにその場に座る。
テーブルに置いてあるコンビニの袋からがさごそと牛乳を取り出す。
ストローをさしてちゅーっと牛乳を飲む花梨。
文集をぺらぺらとめくっている。
懐かしさに浸るように表情が緩む。
ふとページをめくる手が止まる。

次第にどこか寂しそうな表情になっていく花梨。

開かれているのは陸の自己紹介のページ。

生年月日や将来の夢、先生に一言などが書かれている。

都会の真ん中にある、花梨一人しかいない部屋。

その部屋で何度も何度も同じページを眺めている花梨。

花　梨（語り）　「私は陸の事が好きだった・・・・・・・」

サブタイトル　『最終話　私の本当の気持ち・・・・・・・』

○小学校前（回想）

花　梨（語り）　「初めて陸の事を知ったのは、まだ桜の花びらが舞う小学四年生の春・・・・・・」

班登校をしている一組のグループ。

先頭は班長を任されている短髪で活発そうな六年の男子生徒。

花梨がその後ろに続き、隣のクラスの夏美、さらに後ろに二年の男子二人、一年の女子

一人、計六人がたて一列になって歩いている。

歩きながら桜の木を眺めている花梨。

きらきらと木漏れ日が差し込んでいる。

ひらりと花びらが一枚舞って落ちてくる。

それを興味心身に見ながら歩いている花梨。

前を見ていなかった為、どんっと班長のランドセルに後ろからぶつかる。

班　長　「おっ、大丈夫か？　池田」

痛そうに鼻を押さえながら、

花　梨　「ごめん、班長」

へへっと笑い、タメ口で謝る花梨。

左側には小学校の運動場が見え、朝から元気に遊んでいる生徒達の声が聞こえる。

班長を先頭に角を曲がって校門にさしかかろうとした時、当然後ろから大きな声が聞こえてくる。

声　「こらーっ！」

その声の後、一人の男子生徒が花梨たちの側をものすごい勢いで駆け抜けていく。

後ろを振り返って挑発するように、

男子生徒　「へへーん、誰が班登校なんかするかよ！」

一気に校内に入っていく。

少し遅れて後ろからもう一人、男子生徒がやってくる。

制服には六年生の証明である名札が縫い付けられている。

激しく息を乱しながら、

六年の男子生徒　「ったく・・・・・・あの馬鹿」

その様子を見て同じ学年の班長がけらけらと笑う。

班　長　「またあいつか？　毎朝お前も大変だな」

六年の男子生徒　「本当だよ。　お前の班は大人しい子達ばっかで羨ましいな。　どうだ？　一日だけ俺と登校班交換しないか？」

班　長　「そんな事できないだろ。　ってか俺にあいつの世話は無理だ」

隣に並んで話をしている上級生。

きょとんとしている花梨。

後ろにいる夏美に話しかける。

花　梨　「今のって同級生だよね？」

驚いた顔をする夏美。

夏　美　「えっ、花梨知らないの？　出雲陸だよ。　問題児だって有名じゃん。　男子も女子もみんな怖がってあんまり近づこうとしないんだから」

花　梨　「ふーん」

再び歩き出す。

○廊下

花　梨（語り）「陸は校内でとびっきりの有名人だった。　それもよくない噂で・・・・・・」

廊下を全速力で駆け抜けていく陸。

花　梨（語り）「遅刻、早退は当たり前、上級生とでも平気で喧嘩をするし、万引きで親を呼び出された事も何度もあるらしい。　そもそもこんなに騒ぎを起こしていたのに、何で今まで私は陸を知らなかったんだろうって思う」

無邪気な表情の陸。

花　梨（語り）「けどみんなが言うほど悪い奴じゃない。　私は根拠もないのにはじめて見た陸に対して、そんな確信にも似た感情を抱いていた・・・・・・」

そのまま教室に入っていく陸。

○教室（回想）

花　梨（語り）「そんな私はというともちろん優等生なんかではなく、教科書を見ると一分も経たない内に気分が悪くなるし・・・・・・」

自分の机に座って教科書を開いている花梨。

しばらくして何かがショートしたように頭からぷしゅーっと煙を出し、ふらふらになりながら机にうな垂れる。

○廊下（回想）

大慌てで廊下を駆け抜けていく花梨。

花　梨（語り）「朝は大好きなアニメをつい長く観すぎてしまって、一時間目が始まってる教室に忍び込んでは先生に怒られる事もよくあった」

○教室（回想）

教室の後ろの扉が開いて花梨がこっそり入ってくる。

授業をしている教師に結局見つかり怒られている花梨。

花　梨（語り）「ただ友達はありがたい事に男女問わず多かったように思う」

花梨の机の周りには沢山の友達が集まっている。

わいわい楽しそうに話をしている花梨。

花　梨（語り）「けど正直な所、私は周りのみんなが思っている以上に、天然でわがままで、頑固で・・・・・・そのくせ筋の通らない事が昔から嫌いで・・・・・・」

○花梨の部屋（回想）

花　梨（語り）「この頃より一年前・・・・・好きだった親戚のお兄ちゃんに花梨は女の子らしくないって言われたのがショックで、それから極力周りにだけでもそれらしく見えるように、まだ幼いながら気を使い出したのを今でも覚えてる」

活発な格好の花梨。

可愛らしいスカートに履き替えて大きな鏡の前に立ってみる。

首をかしげながらぽりぽりと頭をかいている花梨。

○花梨の家　玄関前（回想）

赤いランドセルを持って、勢いよく走っていく。

段々、花梨の姿が小さくなっていく。

花　梨（語り）「けどまだ小学四年生の私はそんな事が完璧にできてしまうぐらい器用な訳もなく、気がつくといつの間にか自分を抑えきれずに突っ走ってしまっていた。　あれは学校からのある帰り道の事・・・・・・」

○駐車場（回想）

友達と別れて一人、家に向かって歩いている花梨。

普段あまり人気がない駐車場を横目に通っていると異様な光景が。

隅のほうでカッターシャツを着た中学生二人が、花梨と同じ制服の小学生を囲んでいる。

少し近づきながらその様子を不思議そうに見ている花梨。

中学生Ａ　「お前が後ろから突っ込んできたからよーチャリンコがぶっ壊れたじゃねーか。　どうしてくれるんだよ？　あんっ？」

眉間にしわを寄せて、その小学生をにらみつける中学生。

その側にはボロボロの自転車が。

怯えながら、話し始める小学生。

小学生　「こ・・・・・・これは・・・・・・・僕がぶつかる前から壊れてたじゃないか・・・・・・」

中学生Ａ　「何だと？　おい、疑ってんのかてめぇ！」

小学生の髪の毛をつかんで、自分の顔を小学生の顔のぎりぎりまで近づけてさらに脅しをかける。

中学生Ｂ　「ぐだぐだ言ってねーで何か出せよ。　おいっ、弁償しろ！」

今にも泣きそうになっている小学生。

目の色を変えて走り出す花梨。

二人の中学生をにらみつけて、

花　梨　「あんた達、何やってんのよ！　その子を離しなさい！」

驚いた顔で花梨を見る中学生。

その拍子に小学生の髪の毛をつかんでいた手を離してしまう。

わんんわん泣きながら今だといわんばかりに走って逃げていく小学生。

中学生Ｂ　「あっ、てめぇ！」

小学生を逃がしてしまう中学生。

目の前に立ちはだかる花梨を見る。

ため息をつきながらこの上ないぐらい不機嫌な顔をして、

中学生Ａ　「逃がしちまったじゃねーか・・・・・何だよてめぇ！」

花　梨　「小学生相手にかつあげするなんて、ほんと最低ね！」

言葉とは裏腹に良く見ると体を震わせている花梨。

それに気づく中学生。

中学生Ａ　「あんっ？　だから？　可愛そうにー震えてるじゃねーか。　どうした？　ママのおっぱいでも欲しくなったのか？　はっはっはっ」

馬鹿にするようにけらけら笑う中学生達。

目に涙を浮かべながらも、さらににらみ続ける花梨。

その表情を見て、笑うのを止め再び眉間にしわをよせる中学生。

中学生Ａ　「ちょっと来いよ！」

乱暴に花梨の腕を引っ張る中学生。

必死に抵抗する。

花　梨　　「やめろーっ！　離せっ！！」

泣きながら逃げようとする花梨。

反対側にはもう一人の中学生が立ちはだかり、花梨の体を押さえる。

悔しそうな表情で涙を流している花梨。

その瞬間、一人の中学生が声をあげる。

中学生Ａ　「うっ・・・・・・」

花梨の腕をつかんでいた手を急に離し、退く中学生。

何事かと視線を横に向ける花梨。

次第に驚いた表情に変わる。

そこには中学生の脇腹を蹴り終えた足を、タンッと地面に下ろす陸が。

怒り狂って大きな声をあげる。

陸　　「女に手を上げる奴は、俺が許さねぇ！！」

体勢を立て直し冷めた目で陸に向かっていく中学生。

中学生　「おう、上等だ！　遊んでやるよ」

中学生に突き飛ばされ端にやられる花梨。

お互い叫びながら、中学生二人と陸の喧嘩が始まる。

体が震えてその場から動けずにいる花梨。

×　　×　　×

傷まみれで宙を眺めるように倒れている陸。

陸に駆け寄って泣いている花梨。

体を揺すりながら、

花　梨　「・・・・・・大丈夫？」

陸　「いてっ！　おい止めてくれ・・・・・・・まじで死にそうになる・・・・・・」

花　梨　「あっ！　ごめん・・・・・・」

思わず陸の体を揺すっていた手を引っ込める花梨。

沈黙。

花　梨　「あんた馬鹿だよ・・・・・・相手は中学生だよ？　勝てるわけないじゃん・・・・・・」

ゆっくり顔を花梨の方に向けて、

陸　「・・・・・・お前もその中学生に立ち向かっていっただろ？」

花　梨　「あ・・・・・・・」

驚く花梨。

再び沈黙。

少し経って二人同時に笑い出す。

陸　「お前、笑かすなって・・・・・・・はははは・・・・・・あーっ、傷が痛ぇ・・・・・・」

笑いながら痛がっている陸。

同じように笑っている花梨。

花　梨　「はは・・・・・・私達、馬鹿同士だね」

二人の笑い声が駐車場から聞こえる。

花　梨（語り）「その時、私は思った。　なーんだやっぱり怖くない、私の勘は当たってたんだって・・・・・・・」

○小学校　げた箱（回想）

（五年四組）

と書かれたげた箱から、上靴を取り出し代わりに下靴を入れる花梨。

その後ろから、あくびをしながら陸がやってくる。

同じように五年四組のげた箱から上靴を取り出す。

ふと花梨と目が合う。

笑顔で挨拶をする二人。

花　梨（語り）「五年になって私達は同じクラスになった。　あの日以来、まるで昔からお互い知っていたんじゃないかってぐらい仲良くなって、私は陸に安心して素の自分を出せていたように思う・・・・・」

○教室　休み時間（回想）

花　梨　　「いくよ・・・・・せーのっ！」

合図の後、算数のテストの点を見せ合う花梨と陸。

花梨の点数。

（２０点）

陸の点数。

（18点）

その場に立ち上がって大喜びをする花梨。

花　梨　「やったーー陸のあほーー罰ゲームとして毎回語尾に（そんな事よりも早く給食を食べたい）ってセリフをつける事！　分かった？」

陸　「たった2点しか変わらねぇじゃん・・・・・ったく分かったよ・・・・・」

花　梨　「陸は将来の夢とかってあるの？」

陸　「俺は特にないな・・・・・花梨は？　そんな事よりも早く給食を食べたい」

花　梨　「私はね、お花屋さん。　ほらっ花梨って名前には花って文字が入ってるし、なんか女の子っぽいでしょ？」

急に笑い出す陸。

陸　「はっはっはっ・・・・・お前が花屋って似合わねぇよ。　そんな事よりも早く給食を食べたい」

花　梨　「似合うわよ！　その内、びっくりするぐらいおしとやかな大人の女性になってやるんだからっ」

陸　「無理、無理。　そんな事よりも早く給食を食べたい」

じーっと陸を見つめる花梨。

陸　「・・・・・・何だよ？　そんな事よりも早く給食を食べたい」

急に怒り出す花梨。

花　梨　「あんた人の話、聞く気あんの！！」

陸　「お前がやれって言ったんだろ！！　そんな事よりも早く給食を食べたい」

よく分からない喧嘩が繰り広げられる。

ボールを持って陸に声をかける清水。

清　水　「陸ードッヂやろうぜ！」

陸　「おお！　そんな事よりも早く給食を食べたい」

清　水　「って事はやらないんだな？」

陸　「え？」

花　梨（語り）「陸と過ごす時間は本当に楽しかった・・・・・・毎日学校に行くのが楽しみで家に帰っても早く明日になってほしくて仕方がなかった。　というよりただ単に陸と話したかったんだ・・・・・・私は知らずの内にどんどん陸に惹かれていったんだと思う・・・・・・」

○教室　休み時間（回想）

自分の机に座っている花梨。

隣には陸の姿がない。

きょろきょろ辺りを見渡して明らかに挙動不審な花梨。

自分の机を少しずつ動かして陸の机との距離を近づけている。

急に花梨の背後から陸がやってくる。

陸　「何やってんだよ、お前？」

びくっとなって焦る花梨。

花　梨　「あははっ、何でもないあるよー少年」

陸　「キャラ壊れてるぞ・・・・・何かいたずらしてんじゃないだろうな？」

花　梨　「だから何もないって言ってるでしょ、この馬鹿」

陸　「馬鹿はお前だ、馬鹿」

○運動場（回想）

がやがやと騒がしい運動場。
お互いの担任が見守る中、五年四組の男子と五年二組の男子がドッジボール大会の試合をしている。
四組の内野には陸ただ一人。
二組の内野にはまだ三人残っている。
その様子を心配そうに見ている生徒達。
花梨に声をかける夏美。
夏　美　「やばっ！　陸だけとか二組に負けちゃうよ」
真剣な表情で答える花梨。
花　梨　「大丈夫だよ」
激しい攻防が繰り広げられる。
絶対絶命と思われていたものの、次々と相手チームを倒していく陸。
外野からの攻撃も全て受けとめ遂に最後の一人にシュートを決める。
沈黙。
笛を大きく鳴らすイダセン。

手を四組の方に向けて、

イダセン　「ゲームセット。　四組の勝ちー」

その瞬間、大きな歓声に包まれる。

飛び跳ねるように清水とハイタッチをする陸。

そして四組の他の生徒達も陸の元に集まってくる。

もみくちゃにされながら喜んでいる陸。

その様子を嬉しそうに眺めている花梨。

呆気にとられている夏美に笑顔で、

花　梨　　「ねっ？」

花　梨（語り）「馬鹿な陸が好きだった・・・・・・真っ直ぐで不器用な陸が好きだった・・・・・普段は生意気だけど不意に見せる笑顔が可愛くて・・・・・・格好良くて・・・・・・陸は私の事どう思ってるんだろうって・・・・・・そればかり気になって夜も眠れなかった・・・・・・なのに・・・・・・」

○花梨の部屋（回想）

ばたんっとドアを閉めて部屋に入る花梨。

電気も点けずにその場に突っ立っている。

曇った表情。

力がぬけたようにベッドに飛び込む。

体を震わせている花梨。

そして声をあげてわんわん泣き始める。

花　梨（語り）「父さんの新しい仕事が決まった・・・・・それはいい事だ・・・・・喜んでいる父さんの顔を見ると私もうれしい・・・・・けど・・・・・けどっ！　転校だなんて・・・・・・・・・・・・あとたった一ヶ月で陸と会えなくなるなんて・・・・・私はどうすればいいの？　どうする事もできないの？　当時の私にとって転校という言葉はあまりにも重くて残酷で・・・・・その夜、不安と悲しさとただ強くなり続ける陸への思いに・・・・・・・・・・・・私は泣いた・・・・・」

○東京　一人暮らしの花梨の家（２０１０年　同窓会二ヶ月前）

文集を読みふけている花梨。

ふいにベランダの方を見る。

花　梨　「雨・・・・・」

いつの間にか外は強めの雨が降っている。
遠くの方で一瞬ぴかっと光り、その後地響きのように雷の音が聞こえてくる。
ゆっくりと立ち上がる花梨。
はーっと深いため息をつき、寂しそうな目をベランダの外に向けている。
花　梨（語り）「いつ頃からだろう・・・・・・・・・・・・・陸が別人に思えたのは・・・・・・」

○教室　休み時間（回想）

花　梨　「ファービーだってさ陸！　やばいってー絶対可愛いよーいこいこっ」
ぶんぶん体を揺さぶられ目を回している陸。
陸　「いや・・・・・・俺はいいよ。　花梨行ってこいよ」
陸を揺さぶる手が止まる。
花　梨　「あ・・・・・・うん・・・・・・」
少し寂しそうな顔をして米川の元に駆けていく花梨。

花　梨（語り）「陸といつものように馬鹿騒ぎができなくなっていった・・・・・・何だろう？　話しかけても反応が薄いっていうか・・・・・・それにいつ見ても思いつめたような難しい顔をしてるし・・・・・・私、何か陸にひどい事、言ったのかな？　急に陸との間に壁ができたような気がする・・・・・・私はあと一ヶ月しかこの教室にいられない・・・・・・だから余計に・・・・・・寂しかった・・・・・・・・・・・・」

×　　×　　×

○教室　授業中（回想）

前　田　「すげぇ・・・・・・」

一番前に座っていた前田がぼそっと一言。

それをきっかけに我に帰る陸。

周りを見渡すとみんな不思議な顔をしている。

その意味が全くわからない陸。

イダセンまでもが驚いた顔をして、

イダセン　「・・・・・・どうしたんだ出雲、変なものでも食ったか？」

そう言いながら黒板の前に立つイダセン。

赤のチョークを持ち陸の答えに大きく丸をうつ。

その瞬間、教室で歓声が上がり沢山の拍手が沸き起こる。

花　梨（語り）「ありえない・・・・・・こんな問題・・・・・・・・あの陸に解けるわけない・・・・・・・」

清　水　「なぁ、どう思う花梨？　陸が神だぞ」

ははっと笑って、

花　梨　「何よ神って。　陸は陸じゃん」

花　梨（語り）「怖かった・・・・・・段々、陸が私の知らないどこか遠い所に行ってしまう様な気がして・・・・・・・だから私は自分に言い聞かせていた・・・・・・・・・・・・・陸は陸なんだ・・・・・」

×　　×　　×

○教室（回想）

瞬間的に清水を前田が陸を米川が、必死にその体を抑える。

清　水　「離せっ前田！　こんな奴、陸でも何でもねぇ！！」

前　田　「落ち着けって清水！」

対照的にその清水の言葉を聞いて自然とクールダウンしていく陸。

陸の体を抑えながら、

米　川　「陸・・・・・・」

お互いの真ん中に割って入る花梨。

花　梨　「もうやめて！　あんた達、親友なんでしょ！！」

花梨の悲痛な叫びが教室に響く。

花　梨（語り）「どうして・・・・・・何でこんな事になるの・・・・・・こんなのあの二人じゃない・・・・・・いつも仲が良かったあの二人じゃないよ！」

清水を抑える前田の手を振りほどき、陸を睨み付けながら、

清　水　「お前は一体、誰なんだよ」

花　梨（語り）「・・・・・・時間が止まった気がした・・・・・・清水のその言葉は現実から目を背けようとする私を捕まえて離さなかった・・・・・・・・・・・・もう・・・・・・訳がわからない・・・・・・」

×　　×　　×

○舞台（回想）

陸　「僕はあなたを愛しています」

変わらず会場に流れている沈黙。

陸の台詞が返ってきてほっと安心している花梨。

陸　「今も・・・・・・そして十年後も・・・・・・・・ずっと・・・・・・・・・・・・」

花　梨　「えっ・・・・・・・」

驚き思わず口に出てしまう花梨。

突然、会場がざわざわと騒がしくなる。

花　梨（語り）「正直・・・・・・うれしかった・・・・・・・こんな言葉を私はずっと待っていたのかもしれない・・・・・・・・けど・・・・・・・・・・・・」

陸　「帰らなければいけないと言いましたね？　実は僕もそうです・・・・・ある人と約束をしました・・・・・・こんなにもすばらしい時間をまだ終わらせたくありません・・・・・・・・・・・だけど時間は残酷にも進み・・・・・・僕を元の世界へと連

れ戻そうとするのです・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

何も言わず、ただ視線を下に向けている花梨。

陸　「・・・・・・・・・・・・・・何も言わないのですね・・・・・・・」

恐る恐る陸の方を見る花梨。

花　梨　「怖いんです・・・・・・・これは夢で冷めてしまうのではないかと思うと・・・・・・・」

へなへなとその場に崩れこむ花梨。

花　梨（語り）「もうやめて・・・・・・・全部嘘だよね？　みんなを騙してるんだよね？　ねぇ陸・・・・・・・嘘だって言ってよ・・・・・・・・・・・・」

陸　「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

言葉を失う陸。

突然の出来事に、舞台を見ている全ての人が驚き、固まっている。

花　梨　「けど何より・・・・・・・それと同じぐらい・・・・・・・あなたが・・・・・・・・・・・・・怖い・・・・・・・・」

花梨の目から大粒の涙が流れる。

花　梨（語り）「私は・・・・・・・・・・・・・・・・・誰を好きになった

の？」

花　梨　「うわぁぁぁぁぁぁあっ！！」

×　　×　　×

○東京　一人暮らしの花梨の家（２０１０年　同窓会二ヶ月前）

降り続ける雨。

風も次第に強くなりベランダの外はいつの間にか嵐のような光景になっている。

ずっとその前に突っ立って外を眺めている花梨。

目からは涙が流れている。

ゆっくりとその目を閉じる花梨。

○教室（回想）

陸　「か・・・・・・花梨・・・・・・頑張れよ・・・・・・」

花　梨　「・・・・・・」

下を向いたまま無表情の花梨。

花　梨（語り）「・・・・・・・・・・・・・・・やめて・・・・・・・・・」

陸　「お前だったらさ・・・・・・・その・・・・・・・誰とでも仲良くなれるし絶対上手くいくよ・・・・・・・」

無理やりに笑顔を作る陸。

花　梨　「・・・・・・・」

下を向いたまま無表情の花梨。

花　梨（語り）「・・・・・・・いつもの・・・・・・・・・・・・・・・・・・・陸でいてよ・・・・・・・」

陸　「お・・・・・・・俺のこと忘れないでくれよな・・・・・・・」

さっと手を差し出し、花梨に握手を求める陸。

花　梨　「・・・・・・・」

下を向いたまま無表情の花梨。

手を差し出さず時間が止まったように固まっている。

花　梨（語り）「どうしてだろう・・・・・・怖かったのももちろんあったけど・・・・・・このまま握手をしてしまえば微かな希望

も全部失って・・・・・私が陸を好きだったって事もなかった事になるんじゃないかって・・・・・・・・・・・・それが嫌で・・・・・・やっぱり怖くて・・・・・・・・・・・・お別れなのに・・・・・・・・・・・・握手・・・・・・・・できなかった・・・・・・」

○東京　一人暮らしの花梨の家（２０１０年　同窓会二ヶ月前）

未だにベランダの前に突っ立っている花梨。

突然、カタンと玄関のドアから音が聞こえる。

ポストの中には一枚のはがきが。

大きな文字で、

（同窓会のお知らせ）

そして差出人の名前は、

（出雲　陸）

と書かれている。

×　　×　　×

いつの間にか激しかった雨もほとんど止んで、ベランダからはほんのりと光りが差し込んでいる。

ベッドにうつ伏せになりながらケータイで話をしている花梨。

花　梨　「久しぶり、元気してた？」

ケータイから聞こえてくる声。

夏美の声　「それはこっちが言いたいわよ！　花梨、そっちは大丈夫なの？　一人でちゃんとやれてる？」

花　梨　「大丈夫だって、そろそろ慣れてきたかなってカンジ」

夏美の声　「痴漢とかにあったらすぐに警察に連絡するんだよ。って花梨だったらその心配はないか」

笑いながら話す花梨。

花　梨　「どういう意味？　これでもあの頃よりは女らしくなったつもりよ」

電話の向こうから夏美の笑い声も聞こえてくる。

少し落ち着いて、再び話を切り出す夏美。

夏美の声　「あっ！　そうだ花梨、こないだタイムカプセル開けたんだよ、六年四組の！」

花　梨　「いいなぁーそっか・・・・・・私も五年で転校しなかったらタイムカプセル埋めれたのか・・・・・・」

夏美の声　「思ったよりみんな集まってくれてさー懐かしかったよ」

急に無言になる花梨。

夏美の声　「ん？　花梨どした？」

花　梨　「り・・・・・・陸は来てたの？」

んーと困った声を出している夏美。

夏美の声　「あれ？　陸って・・・・・・出雲だよね？　えっと・・・・・・来てたような来てなかったような・・・・・・ごめん・・・・・・何か思い出せないや・・・・・・・」

花　梨　「そっか・・・・・・」

はーっとベッドの上をごろごろしながら深いため息をつく花梨。

花　梨　「・・・・・・夏美、陸から同窓会のはがき届いた？」

夏美の声　「あっ！　届いた届いた！　まさか出雲から声がかかるとはね・・・・・・学芸会の事とかもあったしまだ気にしてるんじゃないかなとか思ってたから、ほんとびっくりしたよ」

花　梨　「同窓会・・・・・・・行く？」

夏美の声　「行こっかな・・・・・・子供は説明すれば一日ぐらいは親が面倒みてくれると思うし・・・・・・みんなでお酒飲める年にもなったしね」

花　梨　「酒飲み」

夏美の声　「ほっとけ」

笑顔になる花梨。

夏美の声　「それより花梨はどうすんのよ？」

花　梨　「私は・・・・・・どうしよっかな・・・・・・」

夏美の声　「仕事は？」

花　梨　「まだ先だし多分、何とか・・・・・・」

夏美の声　「じゃあ来なって、イダセンも来るみたいだしさ。それにどうせ他にも目的あるんでしょ？」

電話の向こうから夏美のいじわるそうな声が聞こえてくる。

思わずびっくりする花梨。

優しい笑顔で、

花　梨　「ははは・・・・・・夏美には敵わないな・・・・・・」

夏美の声　「あったりまえじゃん！　それより聞いてよーこないだ清水にあってさー・・・・・・」

○東京　一人暮らしの花梨の家　玄関前（同窓会　当日）

玄関のドアを手で持って、外から自分の部屋を眺めている花梨。
すっかり綺麗に整理整頓されている。
何かを決意したような目をしながら、ぼそっと一言。
花　梨　「行ってきます・・・・・・」
そしてゆっくりとドアを閉める。
ばたんっとドアの閉まる音。

○新幹線

車内アナウンス　「今日も新幹線をご利用下さいましてありがとうございます。　この電車はのぞみ号新大阪行きです。　途中の停車駅は品川、新横浜、名古屋、京都です・・・・・・」
ざわざわと騒がしい車内。
一人、窓から過ぎていく景色を眺めている花梨。
花　梨（語り）「小学校を転校した私は県外の小学校で一年過ごし、後は中学、高校とごく普通の学生生活を過ごした。　もちろんごく普通というぐらいだから、人並みに彼氏もできたし新しい恋もした。
けど陸の事がずっとひっかかっていたのは確かで・・・・・・高

校を卒業した私は何を思ったのだろう、思い切って急に環境を変えたくなった・・・・・・どこか陸の事をふっきりたかったってのもあったかもしれない・・・・・・全く知らない町、全く知らない人・・・・・・そしてその中で昔からの夢だったお花屋さん・・・・・・今はやりたい事も微妙に変わって呼び方も少し格好よくなってしまったけどフラワーデザイナーを目指そうって・・・・・・そして二年前から東京で一人暮らしを始めた。　小さな花屋さんで働かせてもらえるようになって、今はフラワーデザイナーの資格を取る為に勉強してる。　夏美をはじめ、たまに連絡をくれる地元の友達が懐かしくてその気持ちが東京で一人ぼっちの私の支えになっていた・・・・・・・・・・段々記憶が遠くなっていく・・・・・・今から陸に会いに行くっていうのに・・・・・・・・・・・・どんな陸が好きだったのか思い出せない・・・・・・私の気持ちが思い出せない・・・・・・あんなに好きだったのに・・・・・・・・あんなにいつも一緒にいたのに・・・・・・なのに・・・・・・あんな別れ方ってないよね・・・・・・私ってほんと馬鹿だ・・・・・・・・・」

○居酒屋

入り口の前で突っ立っている花梨。

中から騒がしい声が聞こえてくる。

花　梨（語り）「この扉を開ければ陸がいる・・・・・・」

なかなか中に入れずにいる花梨。

花　梨（語り）「怖い・・・・・・・・・・・・・・・怖い・・・・・・・・・・・・・・・いや・・・・・・逃げちゃ駄目だ・・・・・・・・ちゃんと向き合うって決めたじゃない・・・・・・・」

一回深呼吸をする花梨。

ゆっくりとドアが開く。

花　梨　「ごめーん、遅くなっちゃって」

夏　美　「しーっ」

遅れて入ってくる花梨に静かにするよう合図をする夏美。

思わず口を押さえる花梨。

陸は花梨がいる事にまだ気づいてない。

荷物を下ろし、一人立っている陸を見つける。

真っ直ぐ陸を見つめる花梨。

陸　「みんな・・・・・・・校内学芸会を覚えているよな・・・・・・・」

花　梨（語り）「涙が出そうになった・・・・・・・そこにいた陸はあの頃よりも見違えるように大人っぽくなっていて・・・・・・・格好よくて・・・・・・・胸が締め付けられるみたいに苦しかった・・・・・・」

花　梨　「久しぶり・・・・・・・」

陸　「あぁ、久しぶり・・・・・・・来てくれたんだな・・・・・・」

花　梨　「うんっ・・・・・・・あっ、隣いい？」

×　　×　　×

陸　「何か・・・・・・変わったな」

花　梨　「そうかな？　自分では全然分からないや。　私は陸のほうが変わった気がする」

陸　「変わって・・・・・・・いや・・・・・・」

言うのを途中でやめて、急に真剣な表情になる陸。

何かを考えている様子。

次第に笑みを浮かべ、

陸　「少し変わったのかもな」

陸の目を見ながらうんうん頷いている花梨。

花　梨　「そうなんだ・・・・・・今は何してるの？」

何も迷いがないような自信に満ちた表情の陸。

少年のように生き生きと瞳を輝かせて一言。

陸　「絵本作家だよ」

花　梨（語り）「あの頃と同じような目をしている陸を見て、私は不安も緊張も一気にどこかへ飛んで行ったような気がした・・・・・・そしてエールを送るように、微かな希望をこの先の自分に託してみたんだ・・・・・・」

○小学校　校門前（深夜）

ふらふら歩きながら笑い声をあげている花梨と陸。

花　梨　「ははは・・・・・・笑いすぎてお腹痛いよ・・・・・・」

陸　「お前、信じてないだろ？　本当にあの校長がカツラはずすとこ見たんだって！」

顔を赤く染めている二人。

時計を確認する陸。

陸　「花梨、帰らなくて大丈夫なのか？　もう二時半だぞ・・・・・」

花　梨　「明日、休みもらってるから大丈夫だよ。　それよりど

こに連れて行くつもり？　みんな二次会行っちゃったよ？」

陸　「いいから、いいから」

にこっと笑う陸。

しばらく歩いてその場に立ち止まる花梨。

驚きながら、

花　梨　「あ・・・・・そっか・・・・・」

花梨の視線の先には、二人が過ごした小学校が。

小学校を囲っている壁をよじ登ろうとしている陸。

花　梨　「ちょっと！　あんた何やってんのよ？」

花梨の方を振り返って、

陸　「入ろうぜ！」

満面の笑顔の陸。

一瞬、困った顔をするも結局、陸の後に続いて小学校に入る花梨。

○小学校　運動場

朝礼台の上に隣同士で腰掛けている陸と花梨。
あたりは静かで人の声もほとんど聞こえない。
少し冷たさを感じる風が二人の間をすり抜けていく。
決して何か気まずいような空気ではなく、ごく自然に二人の間に沈黙が流れている。

花　梨　「何か・・・・・・懐かしいね・・・・・・・」

遠くを見つめながら、話し始める花梨。

陸　「そうだな・・・・・・」

花　梨　「あの日、覚えてる？　私が中学生に絡まれててさ・・・・・陸が大声あげて助けに来てくれたの・・・・・・」

懐かしそうに笑顔で、

陸　「覚えてるよ・・・・・・・結局ぼろぼろにやられて、格好悪かったな・・・・・・俺」

花　梨　「ううん・・・・・・そんな事ないよ・・・・・・だって・・・・・・」

急に黙る花梨。

陸　「・・・・・・どした？」

首を横に振って、

花　梨　「へへっ・・・・・・何でもない・・・・・・」

急に何かを思い出したように鞄をあさる陸。

陸　「・・・・・・お前、結局埋めれなかったんだよな？
タイムカプセル・・・・・・」

鞄の中から手紙を取り出す。

十年前の陸から現在の陸に届いた手紙。

少し寂しそうにその手紙を見つめながら、

花　梨　「うん・・・・・・でも仕方ないよ・・・・・・六年四組に私はいなかったんだし・・・・・それより何て書いたの？
ねぇ、見せてよ」

陸が持ってる手紙を奪おうとする花梨。

陸　「わっ！　馬鹿、やめろ・・・・・・ってか絶対、お前には見せられないって！」

必死で抵抗する陸。

突然、動きがぴたっと止まり真剣な表情になる。

陸　「あれ・・・・・・」

不思議そうな顔をする花梨。

花　梨　　「どうしたの？」

ゆっくりと手紙を開ける陸。

そしてその中に手を入れ何かを取り出す。

覗き込むように陸の手に注目する花梨。

ゆっくりと握っていた手を開く陸。

急に言葉を失う二人。

そこには記憶が書き換えられる前、花梨が陸に渡したミサンガが。

青と黄色の糸で丁寧に作られている。

沈黙。

黙ったまま全く動かない二人。

永遠にも似たような静かな時間がどこまでも流れる。

×　　×　　×

突然、独り言のようにつぶやく花梨。

花　梨　　「思い出した・・・・・・」

体を震わせ、涙を堪えながらも陸の方を見る花梨。

花　梨　「私の本当の気持ち・・・・・・」

下を向いたまま動かない陸。

花梨からもらったミサンガをじっと見つめて固まっている。

何かを訴えかけるような目で陸の方を見る花梨。

不安そうな声で、

花　梨　「ねぇ・・・・・シンデレラの一番最後のシーン覚えてる？　王子さまが硝子の靴を履かせてシンデレラを探すんだよね・・・・・・・・・・・硝子の靴じゃないけどさ・・・・・・陸・・・・・私の質問に答えてくれないかな？」

ゆっくりと花梨の方を見る陸。

真剣な表情。

少し経って、恐る恐る切り出す花梨。

花　梨　「・・・・・・・・・・・・直方体を求める公式は何？」

沈黙。

いつの間にかあたりは明るくなってきている。

ジャングルジムも、鉄棒も、砂場も。
ずっと暗くて見えにくかったものがほんのりと光を浴びて少しずつはっきりとしてくる。
近くでうっすらと聞こえてくるすずめの鳴き声。
陸の口元が動く。
陸　「たて×横×・・・・・・」
びくびくとさらに体を震わせる花梨。
何かに怯えるように下を向いてしまう。
唇をかみ締め、陸の返事をじっと待っている。
その様子を見ている陸。
しばらく経って花梨の前にゆっくりと手を差し出す。
その手は握手を求めるように少し開いている。
驚いて陸の方を見る花梨。
まるで十年前のあの頃のような笑顔を花梨に向けて、
陸　「気合だろ？」
花梨の目から涙が流れる。

そして差し出された陸の手を握る花梨。

朝礼台の上に腰掛けている二人の後姿。

隣にいる陸にしか聞こえないぐらいの声でつぶやく花梨。

花　梨　「・・・・・・馬鹿」

二人の視線の先、小学校の側にある住宅街の上からゆっくりと朝日が顔を覗かせる。

辺りはオレンジ色に包まれ、陸と花梨の後姿が次第にシルエットになっていく。

陸（語り）「やっと・・・・・・見つけた・・・・・・」

花　梨（語り）「これが本当の・・・・・・」

景色も人もまるで全て一つに染まっていくような幻想的な光景。

しっかりと繋がれている花梨と陸の手。

陸　花梨（語り）「（二人同時に）自分なんだ」

――完――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8797z/

２０日間のシンデレラ

2011年12月28日08時58分発行